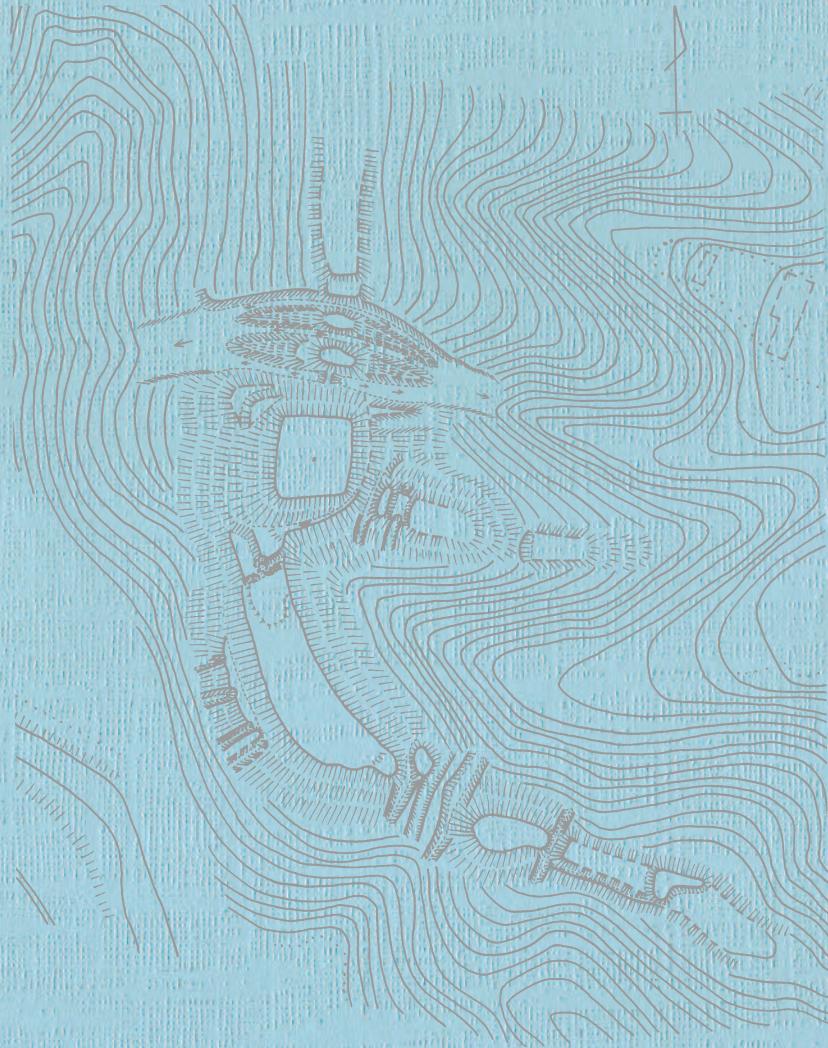


西 本 城 跡

NISHIMOTO CASTLE

— 県道岡本大方線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —



1999.3

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

西 本 城 跡

NISHIMOTO CASTLE

1999.3

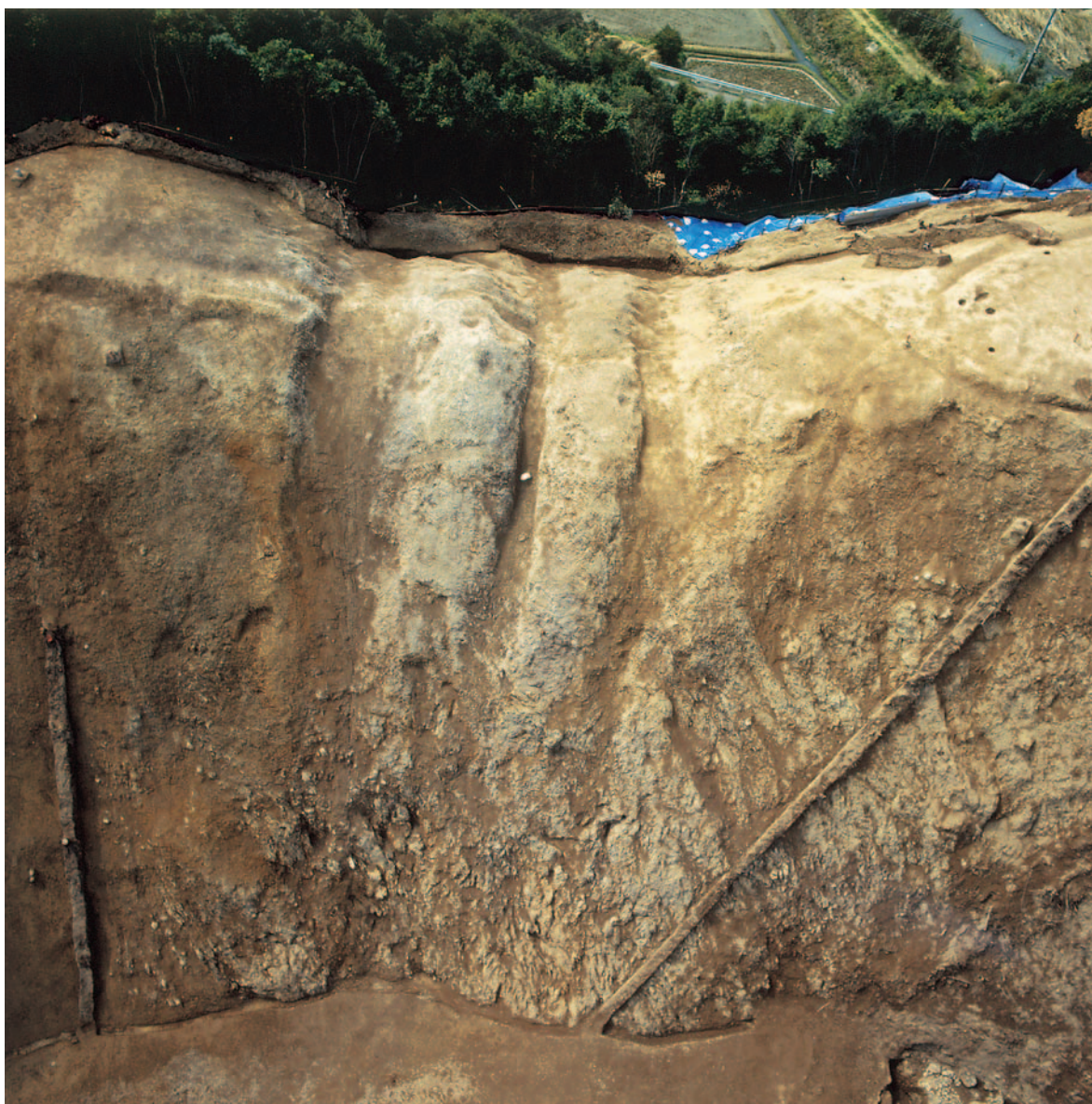
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター



西本城跡及び上田ノ口集落航空写真 (S=1 : 3000)



西本城跡航空写真（西から）



堀切2~4 (東から)



西本城跡遺跡オルソコンター図 S=1:300



出土遺物（貿易陶磁）表と裏

序

大方町は、青い海と緑の山々の豊かな自然に囲まれた土地で、長い歴史の中で人々の生活を育んで参りました。人々の生活の歩みは営々とその大地に刻まれ、その中で固有の文化を築きあげてきました。文化は一朝にして出来上がったものではなく、幾星霜、長い歴史と風土の中で我々の祖先のたゆまない努力と創意によって培われ生み出されたものであります。私たちは、歴史の中に生きていることを自覚し、過去に学びながら現在に働きかけ、そしてこのすばらしい自然と文化を次代に継承して行かなければなりません。

今回の調査資料は周辺地域はもとより土佐の歴史を明らかにする上で重要な位置を占め、分けても全国的な城郭研究の中で西南四国の城郭の規模・施設・性格などを知るうえで貴重な資料となりました。

報告書を刊行するに当たり、本書が学術的に多くの研究者に活用されることはもちろんのこと、残された城郭範囲と併せて地域学習の一環として学校教育や社会教育、あるいは多くの町民の方々に広く活用されることを願うところであります。また、西本城跡の発掘調査が大方町の歴史を紐解く契機となり、一人でも多くの方々が埋蔵文化財に関心を持たれ、ひいてはより一層の文化振興の一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、調査・報告書作成にあたって多大なご理解とご協力を頂いた高知県中村土木事務所、並びにご指導頂いた高知県教育委員会はじめ、お世話になった関係者の皆様及び地元の方々に厚くお礼申し上げます。

1999年3月

財団法人高知県文化財団 埋蔵文化財センター

所長 古谷 碩志

例 言

- 1 本書は、平成9年度県道岡本大方線改良工事に伴う「西本城跡」の緊急発掘調査の報告書である。
- 2 調査は、高知県土木部中村工事事務所の委託を受け、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 西本城跡は高知県幡多郡大方町上田ノ口字タナダ・テッポウ田他に所在する。
- 4 発掘調査は平成9年10月15日から平成10年3月31日まで実施し、引続き9月30日まで整理作業、報告書作成を行った。調査面積は4,500m²である。
- 5 発掘調査は、高知県文化財団埋蔵文化財センター調査第5係長松田直則・同主任調査員堅田至が担当した。
- 6 発掘調査にあたり、調査の方法及び縄張り図の作成について中井均氏（米原町教育委員会）の指導・協力を頂いた。記して感謝する次第である。
- 6 本書の執筆は、松田直則と堅田至が分担し、編集は松田直則が行った。文責は、目次及び文末に執筆者を記した。
- 7 城跡の全体測量は公共座標Ⅳ系により、航空測量を行った。なお、航空測量は委託により（株）アイシーが実施した。
- 8 検出遺構に関しては、掘立柱建物跡（SB）、土坑（SK）、柵列（SA）で標示している。出土遺物は通し番号とし、遺物の挿図、写真図版は同一番号である。
- 9 調査にあたっては、委託者である高知県中村土木事務所から多大なご援助をいただき、また、地元関係各位にはご協力をいただいた。記して感謝する次第である。
- 10 出土遺物の資料は、高知県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。また遺物の注記は調査略号97-17ONである。
- 11 本書に掲載したFig.39の地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の20万分の1地勢図を80%に複製縮小したものである。（承認番号 平11四複. 第23号）

本文目次

第1章	調査に至る契機と経過	
	第1節 調査の契機	松田 ……1
	第2節 調査組織及び経過	堅田 ……3
	第3節 調査日誌抄	堅田 ……4
第2章	地理的・歴史的環境	
	第1節 地理的・歴史的環境	堅田 ……7
	第2節 大方町の中世城郭	松田 ……13
	第3節 西本城跡の概要	松田 ……15
第3章	調査の概要	
	第1節 調査の方法	堅田 ……17
	第2節 調査の概要	堅田 ……19
	第3節 基本層序	堅田 ……20
第4章	調査の成果	
	第1節 検出遺構	堅田 ……29
	第2節 出土遺物	松田 ……43
第5章	考察	
	第1節 四国西南部の中世城郭	松田 ……55
	第2節 大方町中世城郭の検討	松田 ……60
	第3節 西本城跡出土遺物の検討	松田 ……64
	第4節 連続堀切・壘堀群について	松田 ……66

挿 図 目 次

Fig. 1	大方町の位置図	Fig. 23	SA1・2
Fig. 2	西本城跡位置及び周辺の地形図	Fig. 24	SK1・2・3
Fig. 3	西本城跡周辺遺跡分布図	Fig. 25	集石1平面図
Fig. 4	大方町河川流域別中世城郭分布図	Fig. 26	堀切1平面図及びエレベーション図
Fig. 5	西本城跡概要図（高知県幡多郡大方町）	Fig. 27	堀切2・3・4平面図
Fig. 6	西本城跡測量基準点設定図	Fig. 28	竪堀1・2・3平面図
Fig. 7	西本城跡調査対象範囲	Fig. 29	堀切2・3・4セクション図
Fig. 8	調査区グリッド設定図	Fig. 30	竪堀セクション図
Fig. 9	A・B・C TR平面図	Fig. 31	集石2平面図
Fig. 10	西本城跡鳥瞰図	Fig. 32	遺構内出土遺物
Fig. 11	A・B・C TRセクション図	Fig. 33	遺構外出土遺物1
Fig. 12	曲輪2及び東西斜面セクション図	Fig. 34	遺構外出土遺物2
Fig. 13	曲輪1a・b、曲輪3、切岸セクション図	Fig. 35	遺構外出土遺物3
Fig. 14	西本城跡検出遺構全体図	Fig. 36	遺構外出土遺物4
Fig. 15	切岸平面図及びエレベーション図	Fig. 37	古銭拓本
Fig. 16	曲輪2遺構全体図	Fig. 38	四国西南部の中世城郭地域別分布図
Fig. 17	SB1	Fig. 39	四国西南部の中世城郭分布図
Fig. 18	SB2	Fig. 40	大方町河川流域別中世城郭分布図
Fig. 19	SB3	Fig. 41	大方町中世城郭流域別比高差グラフ
Fig. 20	SB4	Fig. 42	中世遺物出土量グラフ
Fig. 21	SB5	Fig. 43	西本城跡遺物出土分布図
Fig. 22	SB6	Fig. 44	連続堀切・竪堀を多用する城郭縄張り図

表 目 次

Tab. 1	大方町遺跡一覧表	Tab. 5	出土遺物観察表4
Tab. 2	出土遺物観察表1	Tab. 6	古銭観察表
Tab. 3	出土遺物観察表2	Tab. 7	大方町中世城郭観察表
Tab. 4	出土遺物観察表3	Tab. 8	出土遺物出土地点表

写 真 目 次

卷頭図版 1 西本城跡及び上田ノ口集落航空写真	PL. 17	豎堀 3
卷頭図版 2 西本城跡航空写真		曲輪 2、SB1・2・3
卷頭図版 3 堀切 2～4	PL. 18	曲輪 2、SB4・5・6
卷頭図版 4 西本城跡オルソコンター図		堀切部・曲輪 2
卷頭図版 5 出土遺物（貿易陶磁）	PL. 19	曲輪 2・3
PL. 1 西本城跡遠景（東より）		曲輪 2・Pit群
曲輪 2 調査前	PL. 20	曲輪 4 集石 1
PL. 2 曲輪 2・切岸調査前		曲輪 2・3 東斜面
曲輪 2 伐採風景	PL. 21	曲輪 3 作業風景
PL. 3 斜面部土留め作業風景		堀切・曲輪 3 東斜面
切岸ベルト設定状況	PL. 22	曲輪 2 東斜面
PL. 4 曲輪 2 西斜面調査前		東斜面下集石 2
Cトレンチ設定状況	PL. 23	現地説明会風景
PL. 5 A・B・Cトレンチ完掘		同上
Aトレンチ完掘	PL. 24	曲輪 2 青磁碗出土状況
PL. 6 B・Cトレンチ完掘		曲輪 2 備前播鉢出土状況
Aトレンチセクション	PL. 25	遺物出土状況
PL. 7 Aトレンチセクション	PL. 26	出土遺物 1
曲輪 2 作業風景	PL. 27	出土遺物 2
PL. 8 曲輪 2	PL. 28	出土遺物 3
曲輪 2	PL. 29	出土遺物 4
PL. 9 曲輪 2 作業風景	PL. 30	出土遺物 5
曲輪 2 セクション	PL. 31	出土遺物 6
PL. 10 切岸作業風景	PL. 32	出土遺物 7
堀切（北東から）	PL. 33	出土遺物 8
PL. 11 堀切 4 セクション	PL. 34	出土遺物 9
堀切 3 セクション	PL. 35	出土遺物 10
PL. 12 堀切 2・3・4（東下方から）	PL. 36	出土遺物 11
堀切 2・3・4 完掘	PL. 37	出土遺物 12
PL. 13 堀切 1 完掘（東から）	PL. 38	出土遺物 13
堀切 4 完掘（西から）	PL. 39	出土遺物 14
PL. 14 堀切 2 完掘（東から）	PL. 40	出土遺物 15
曲輪 4 作業風景	PL. 41	出土遺物 16
PL. 15 豎堀 1・2	PL. 42	出土遺物 17
豎堀 3 南北セクション	PL. 43	出土遺物 18
PL. 16 豎堀 3 東西セクション		
豎堀 1 集石		

第1章 調査に至る契機と経過

第1節 調査の契機

大方町は県の西南部、幡多郡の東よりで、海岸沿いの集落と土佐湾に注ぐ6つの小河川の谷間と谷間にある集落によってできた町である。主要産業は農業で、温暖な気候に恵まれ特にキュウリや砂地栽培のラッキョウの産出が多い。これらの主要産物の主な流通手段は陸上運送で、国道56号線が、中村・高知に向かう主要幹線となっている。

大方町南西部の主な岐線として南線と北線がある。南線は中村・下田ノ口線で、北線は岡本・大方線である。南線の中村・下田ノ口線は、中村市下田を起点として平野・双海・出口・田野浦を経て下田ノ口に至る南部海岸線の主要県道となっている。さらに出口から中村市古津賀で国道56線と取り合う一般県道出口・古津賀線もある。北線では、今回調査の原因となった岡本・大方線がある。岡本・大方線は、大方町上田ノ口から中村市蕨岡の岡本を結ぶ線である。この北線は、上田ノ口から御坊畑、下馬荷を経て蕨岡に通ずる道である。

明治の頃から馬荷村や橘川村の経済圏は旧中村町で、両村に於ける生活道としては下馬荷から蕨岡に出る線が多かった。古老の話によると、生活物資はもちろん肥料をはじめとする生産資材なども、中村町からの購入が主であったとされている。その後地域の利便性は変わらず、地域住民からは下馬荷から蕨岡に通ずる道の整備が望まれていた。昭和34年一般県道岡本・大方線として、蕨岡を起点として長坂峠を越えて、下馬荷を経由し上田ノ口に至る間8371mが認定された。しかし地域住民の一部は、馬荷から上田ノ口に至る間よりも、馬荷、蕨岡間の整備を優先して欲しいと根強い要望があった。昭和48年に下馬荷と蕨岡の大方町区間は、工事が着工され昭和55年度までに長坂峠まで350mを残し工事が進んでいる。さらに優先して整備を進めていた馬荷・上田ノ口間の局部改良工事も現在進捗している。

県道岡本・大方線が国道56号線と取り合う地点は、現在蛸瀬川の流路と同じ方向で上田ノ口集落

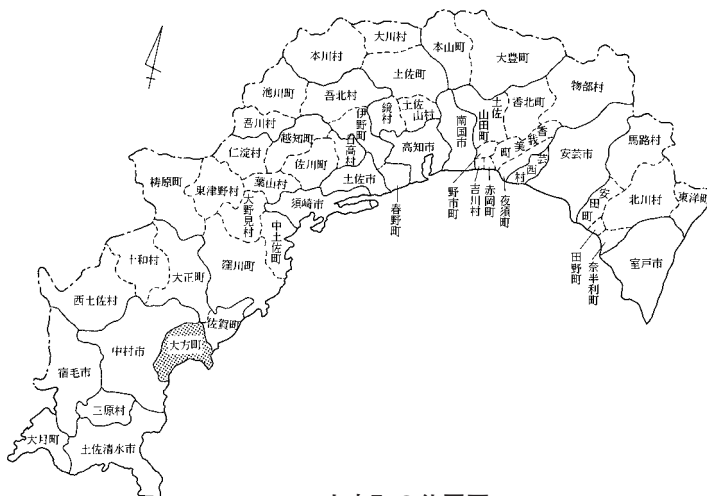


Fig.1 大方町の位置図

を迂回する経路を取っている。集落を迂回し中心を通らなければならないことや、交通量も多くなっていることから、集落背後の丘陵を切り取り直線的に国道に結びつけ、さらにそれに伴い国道沿いの圃場整備も同時に行う計画が上がった。高知県土木部から、この計画路線に埋蔵文化財の有無について、大方町教育委員会を通じて県教育委員会に紹介がもたらされ



Fig. 2 西本城跡位置及び周辺の地形図

た。これを受けた大方町教育委員会及び県教育委員会は、集落背後の丘陵上に中世城郭の西本城跡が所在していることを示し、現状保存の為の協議を行った。現状保存のためトンネルによる工事工法も協議したが、予算及び期間的なことなど計画変更による保存は不可能である結論に達し、止むを得ず記録保存を行うこととなった。このため平成9年10月15日付けで発掘届けが提出された。これを受けて、工事計画範囲を確認するため踏査、立会を行ったが計画範囲内に西本城跡の曲輪及び堀切等が含まれており、工事計画範囲全てを調査対象範囲とした。

以上の結果、県教育委員会・大方町教育委員会が協議し、発掘調査は財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが調査主体となり工事主体の高知県土木部から委託を受けて平成9年10月15日から調査を実施することになった。(松田)

第2節 調査組織及び経過

発掘調査は、平成9年10月15日から平成10年3月31日までの間約5ヵ月半の現地調査で4500m²の範囲を実施した。引き続き平成10年4月1日から3月まで、整理作業及び報告書刊行の工程で開始された。発掘調査は(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターが実施し、調査体制は以下のとおりである。

総括…埋蔵文化財センター所長 古谷碩志

調査事務総括…同次長 津野洲夫 調査総括…同調査課長 西川 裕

調査担当…同調査第5係長 松田直則 同主任調査員 堅田至

事務担当…同主幹 吉岡利一・同主幹 大原裕幸

発掘作業員…浜田昌一・野並 廬・岡本寅美・地引博司・秋森広松・藤本福包・布 陽子・松本菊美・中山昭子・畔元順子・岡本芳子・高橋太郎・松井澄子・北川久子・武政松子・川村 勉・岡本覚・出島正勝・深木繁実・深木繁春・田辺勝茂・成子喜代子・松本安雄・深木正寛・矢野茂世・安田籐助・宮川清子・平地 武・深木 繁・永瀬好幸・植田稔弘・松本辰美・田辺貞雄・武政輝忠・沖和子・沢田建男・伊芸愛子・森 繁子・大原豊実・前田耕作・岩本 正・東 丑枝・竹田信男・長崎竹美・平地五月・岡崎真紀・岡崎桂子・岡本里以・松本光代・松田五六・野安勝利・松本昇・宮崎貞義・伊与木春茂

整理作業員…橋田美紀・黒岩佳子

発掘調査期間中の平成10年3月には、埋蔵文化財センター主任調査員小島博満の協力を得た。

調査前に、西本城跡全体の縄張り図を滋賀県米原町教育委員会の中井均氏と作成し、発掘調査は平成9年10月15日から器材の搬入設営を行い、伐採作業を実施した。伐採作業の後調査区内の測量にはいりグリッドの杭打ち作業を開始した。さらに排土処理のため斜面部にトタンを使用したシューター設置作業を行った。排土置場の空間が東側斜面下の谷部にしかなく、調査はこの谷地形部分にトレンチA～Cを設定し掘削作業にはいった。曲輪部分の調査は、伐採作業と排土処理に必要なシューター設置が完了した曲輪2からトレンチを設定し順次掘削にはいった。城跡という遺跡の性格から斜面部も含め遺構が検出され、西側斜面下には県道岡本・大方線が通っており排土がながれ落ちな

いよう土留め処理に時間を要した。遺構を含む全体測量及び空中写真は、(株)アイシーに委託して行った。現地調査後、整理作業及び報告書作成は、高知県立埋蔵文化財センターの施設において実施し平成11年3月31日をもって全ての作業を終了した。

第3節 調査日誌抄

10月15日(水) 調査区域の調査前写真撮影及び伐採準備。現場事務所設置。技術公社との打ち合わせ。

10月16日・17日(木・金) 調査区域の伐採始める。平場に測量用の杭打ちを始める。現場事務所完成。発掘機材整理。現場事務所内清掃。

10月21日(火) 調査区平坦部掘削範囲のグリッド設定。北側斜面を残し伐採はほぼ終了。

10月22日(水) 水田部分にトレンチを設定する。曲輪2の2×4mのトレンチを設定し掘削を開始する。

10月23日・24日(水・木) 曲輪2の掘削。水田部掘削。

10月27日(月) 曲輪2にベルトを設定し、表土掘削。

10月28日(火) 調査区西側斜面伐採。水田部分掘削を続ける。曲輪2M-9, L-9, K-9, J-9 遺物取り上げ。

10月29日・30日(水・木) 西側斜面伐採、帯曲輪有り。曲輪2各グリッド掘削。

10月31日(金) 西側斜面伐採。水田部分掘削、



曲輪2掘削。

11月4日・5日・6日(火・水・木) 調査区西側斜面伐採。曲輪2掘削。

11月10日(月) 西側斜面伐採終了、東斜面の伐採した雑木を下におろす。曲輪2掘削。

11月11日(火) 西側帯曲輪平板地形測量。東斜面シューター増設と伐採した木の整理。曲輪2掘削。

11月12日(水) 東側斜面雑木整理終了。北側斜面掘削開始。D-12杭打ち。

11月13日(木) 前日に続き曲輪2掘削。北斜面掘削。A-17, D-14, E-14杭打ち。

11月14日(金) 西側斜面に土留め用フェンスを張り掘削開始。

11月17日(月) 東斜面下場平板地形測量。北斜面掘削。西斜面掘削。

11月18日・19日(火・水) 西側斜面、北斜面掘削。

11月20日(木) 西側斜面、北斜面掘削続ける。9ラインセクション図。中村土木と打ち合わせ(4:30~5:00)





11月21日(金) 西側斜面掘削。掘削した土を下の県道に落とさないようにするため道板を仮設する。D-14付近の平板測量。北斜面掘削。

11月25日(火) 西側斜面、北斜面掘削続ける。掘削した土を安全な場所に移動する。

11月26日(水) 雨で現場作業なし。調査区内松の伐採について大方町森林組合と打ち合わせ。

11月27日・28日(木・金) 西側帯曲輪掘削。土留め用フェンスを西側斜面に増設する。北斜面掘削。

12月1日・2日(月・火) 西側斜面Hライン掘削開始。西側帯曲輪掘削

12月3日(水) 西側斜面、西側帯曲輪掘削及び北斜面掘削。遺物写真撮影後、取り上げ。

12月4日・5日(木・金) 西側斜面、西側帯曲輪掘削及び北斜面掘削。

12月8日(月) 曲輪2掘削。西斜面土留め用ネット補強。東斜面シューター修理。

12月9日・10日(火・水) 北斜面、西斜面、掘削。

12月11日～15日(木～月) 北斜面、西斜面掘削。西斜面帯曲輪集石実測。西斜面昇降用に階段を設置。松伐採作業本日より開始。

12月16日(火) 西斜面掘削。松伐採作業終了。西斜面下集石及び遺物写真撮影。

12月17日(水) 雨で現場作業中止。

12月18日(木) 西斜面掘削、遺物取り上げ曲輪2掘削。

12月19日・22日(金・月) 曲輪1掘削。西斜面掘削。

12月23日(火) 西斜面掘削。西斜面土留め用ネット増設。西斜面集石実測。

12月24日(水) 曲輪1、北斜面掘削。西斜面堀切部掘削。

12月25日(木) 西斜面、北斜面掘削。現場事務所清掃、整理。

1月5日(月) 西側斜面集石実測。北斜面掘削。東斜面シューター修理。

1月6日(火) 西斜面土留め用ネット増設。西側斜面掘削。

1月7日(水) 西側斜面掘削、遺物取り上げ。松伐採跡地杭打ち。

1月8日(木) 東側境界線にネットを張る。現場事務所駐車場土入れ整備。

1月9日(金) 西側斜面掘削。遺物取り上げ東斜面シューター設置準備。

1月12日(月) 西斜面土留め用ネット修理。南西堀切部ベルト設定。東斜面シューター設置。

1月13日(火) 西斜面堀切付近掘削開始。東斜面掘削。

1月14日(水) 雨のため現場作業中止。

1月16日～21日(金～水) 堀切部掘削。東斜面掘削。

1月22日～30日(木～金) 東斜面土砂移動。松伐採跡地シューター設置。曲輪3掘削。

2月2日～4日(月～水) Aートレンチ周辺土砂移動。松伐採跡地掘削開始。曲輪3掘削。

2月5日(木) Aートレンチの北側掘削。松植林部掘削。堀切1、2、3東斜面掘削。





2月6日(金) Aートレンチ北側集石の写真撮影と実測準備。東斜面掘削。堀切部東斜面掘削。桧植林部掘削。

2月9日～11日(月～水) Aートレンチ北側集石実測。桧植林部掘削。堀切部東斜面掘削。東斜面掘削。

2月12日(木) 桧植林部掘削。堀切部東斜面掘削。東斜面掘削。Aートレンチ北側土器取り上げ。

2月13日～19日(金～木) 桧植林部掘削。堀切部東斜面掘削。曲輪2東斜面掘削。

2月20日～23日(金～月) 雨のため現場作業中止。

2月26日・27日(木・金) 曲輪2の全体写真、遺構検出。

3月2日(月) 曲輪2の遺構検出。桧部分掘削。東斜面掘削。

3月3日・4日(火・水) 曲輪2のバンクを外し、遺構検出。桧部分掘削。東斜面掘削。

3月5日(木) 雨のため現場作業中止。

3月6日(金) 曲輪2遺構探し、杭の打ち直し、堀切部全体写真撮影。桧部分掘削。東斜面掘削。

3月9日(月) 曲輪2杭打ち直し。東斜面掘削。桧部分に梯子設置準備。

3月10日・11日(火・水) 雨のため現場作業中止。記者発表準備。

3月12日(木) 午前中東斜面に階段を設置し、記者発表準備。午後記者発表。

3月13日(金) 曲輪2柱穴探し及び半截。堀切西斜面ベルトを外す。東斜面掘削。

3月14日(土) 曲輪2ピット精査。桧部分東斜面掘り下げ。現地説明会準備。

3月15日(日) 現地説明会を行う。参加人数約80人。

3月16日(月) 曲輪2柱穴及び土坑全掘。堀切部ベルトを外す。東斜面掘削。

3月17日・18日(火・水) 桧部分に設置した階段を撤去する。堀切部のベルトを外す。東斜面集石上部を掘削し残土運搬。曲輪2柱穴完掘。

3月19日(木) 航空測量に備えて調査区清掃と鋼管、ステップ付属品を現場事務所前まで運ぶ。午後(株)アイシー測量と撮影計画の打ち合わせ。

3月20日(金) 午前中雨。午後ピットの水抜き。

3月21日(土) 航空測量。

3月23日(月) 西斜面埋め戻す。

3月24日・25日(火・水) 賃借機材を返却する。東斜面残り部分の土層断面図作成。

3月26日(木) 西斜面縦堀断面図作成。現場事務所整理清掃。

3月27日(金) 現地機材を一部撤収する。

3月30日(月) 機材等の撤収を終え、現地調査終了する。

3月31日(火) 賃借車両を返却。午後、中村土木事務所検査。(堅田)



第2章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的・歴史的環境

大方町は、高知県の西南部幡多郡の東寄りの海岸に位置し、東は佐賀町、北は大正町、北から西は中村市に接し、南は土佐湾に面する。町の中央部に湊川、東に蜷川・有井川、西に蛸瀬川が南流し、これらの川の流域に集落が形成され、河口の海浜に大きな集落が位置し、中でも湊川と蛸瀬川に挟まれた入野は町の中心をなす。総面積の75パーセントは山林原野、町の主要産業は農業で温暖な気候に恵まれ、米のほかキュウリ、イチゴ、ショウガ、ニラなどの施設園芸が盛んである。また近年、花卉栽培が町南部で急成長、入野ノ浜の砂地を利用したラッキョウも特産として知られている。漁業は沿岸漁業が中心であるが、チリメンジャコの生産が多い。美しい海岸線は4kmにも及び海水浴場やキャンプ場などがあり観光客の人気を呼んでいる。



大方町入野松原

北部と南部は山地で、高岡郡中土佐町から南方に伸びる火打山脈は、御在所山・仏が森、さらに当町と中村市境の石見寺山に達して土佐湾沿岸と四万十川流域の間に分水嶺を作り、その東側が当町に当たる。面積は112.87km²である。

1 原始・古代

町内の最古の考古遺跡は縄文時代の遺跡である。この時期の遺跡としては小坂口遺跡（出口）・長門駄馬遺跡（出口）・入野遺跡（大方商業高校校庭北側）・オクダバ遺跡（浮鞭）・東ダバ遺跡（浮鞭）・伊の岬遺跡（伊田）がある。以上の諸遺跡はすべて海岸段丘上に立地する。また遺跡が小規模であることも共通し、チャート製打製石鏃に混在して大分県姫島産黒曜石製打製石鏃がみられるのも大きな特色である。小坂口遺跡ではサヌカイト製打製石鏃も一部に見られ、長門駄馬遺跡は海岸に接近する遺跡であり、入野遺跡からは縄文後期と推定される石鏃が出土している。オクダバ遺跡では時期不明の縄文土器と石斧が発見され、石鏃のなかには縄文早期とみられるものがある。東ダバ・伊の岬両遺跡は、ともに海岸に近く、サヌカイト製石鏃も稀少ながら存在する。なお、やや内陸部には茶畑遺跡（平野）と森近口遺跡（浮鞭）があり、ともに石鏃を多く出土する縄文遺跡である。森近口遺跡からは尖頭器・石錐も出土している。各遺跡とも本格的な発掘調査はなされていない。

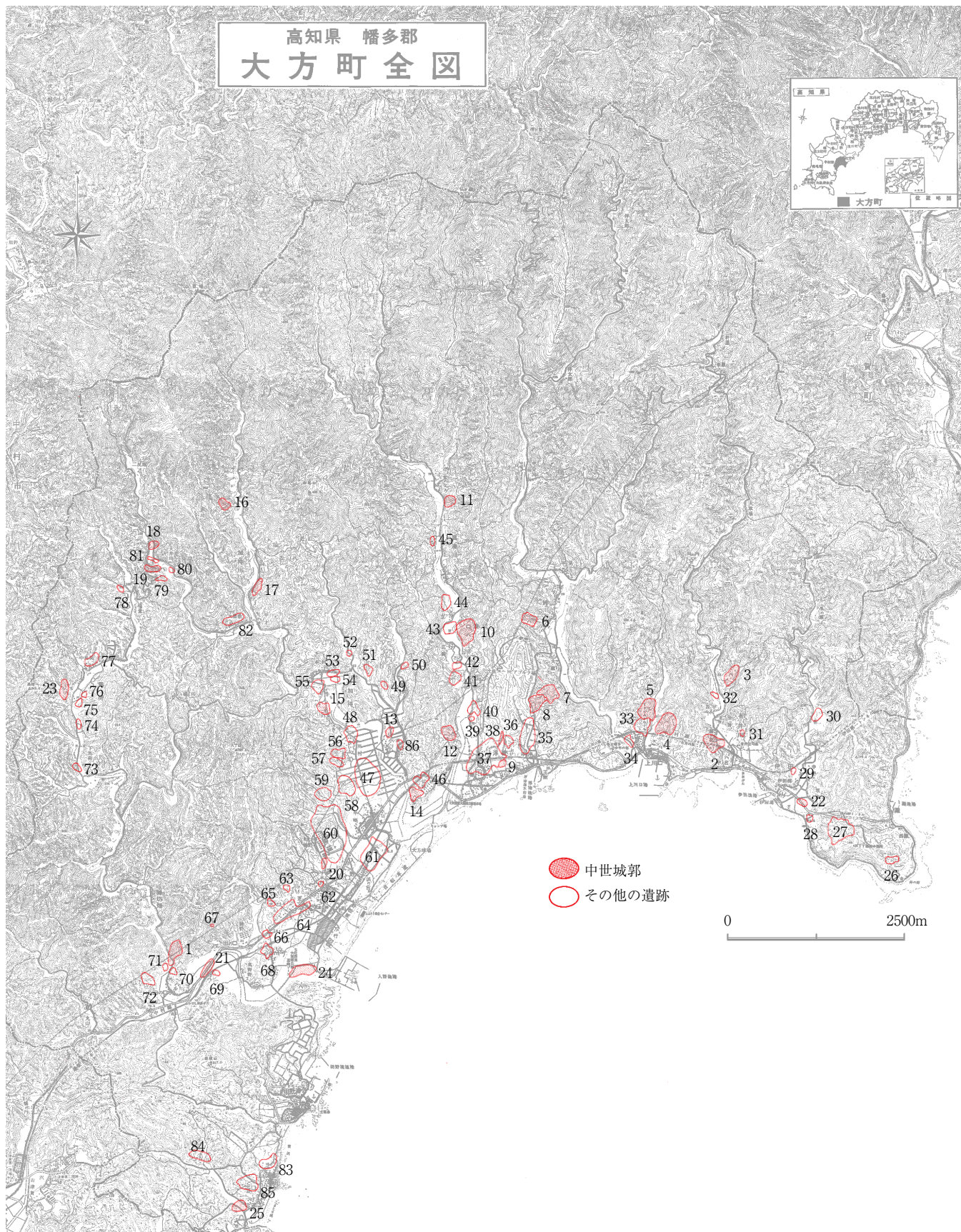


Fig. 3 西本城跡周辺遺跡分布図

Tab.1 大方町遺跡一覧表

No	名称	所在地	種別	現況	時代	備考
1	西本城跡	大方町下田ノ口字タナダ・テッポウ田	城跡	山林	中世	
2	有井城跡	〃有井川字ホキノ畝	〃	〃	〃	
3	北有井川(有井川奥之古)城跡	〃〃字シロクビ・スタノダバ	〃	〃	〃	
4	上川口城跡	〃上川口字岡野地山	〃	〃	〃	
5	高山城跡	〃〃字高山	〃	〃	〃	
6	鱈川城跡	〃鱈川3599-1・5・11~13	〃	〃	〃	
7	浮津城跡	〃浮津字城山・上城山	〃	〃	〃	
8	南浮津城跡	〃〃字小城山	〃	〃	〃	
9	浮漣城跡	〃〃字田城	〃	畑・荒蕪地	〃	
10	米津(口湊川)城跡	〃口湊川字城山	〃	山林	〃	
11	大平(湊川)城跡	〃奥湊川字地藏ノ上	〃	〃	〃	
12	曾我城跡	〃浮漣字城ノ谷口	〃	〃	〃	
13	小川城跡	〃加持字平見	〃	〃	〃	
14	吹上城跡	〃浮漣字南旧城	〃	山林・荒蕪地	〃	
15	鹿持城跡	〃加持字古城	〃	山林	〃	
16	本谷城跡	〃加持川字下ケンギウ・ケンキウロ	〃	〃	〃	
17	加持川城跡	〃〃字城山・北汐水・東汐水	〃	〃	〃	
18	宮ノ川城跡	〃大井川字クサイガ峠山	〃	〃	〃	
19	大井川(三重)城跡	〃〃字城ノ谷	〃	畑・道路	〃	一部消滅
20	入野城跡	〃入野字城山	〃	山林・畑	〃	
21	岩合城跡	〃下田ノ口字ツボノソト	〃	山林	〃	
22	伊田(井田)城跡	〃伊田字古城	〃	山林・墓地	〃	
23	馬荷城跡	〃馬荷字城山	〃	〃	〃	
24	蛸瀬(田ノ浦)城跡	〃田ノ浦字古城・古城東平・古城西平	〃	〃	〃	
25	出口城跡	〃出口字寺田・寺田谷	〃	〃	〃	
26	伊の岬遺跡	〃灘字中ダバ	散布地	畑・荒蕪地	縄文	
27	伊田の火立場跡	〃〃字大松畝	狼煙場跡	山林	近世	
28	松山寺跡	〃伊田字寺山	社寺跡	畑・墓地	中世~近世	
29	伊田遺跡	〃〃字ホコデン	散布地	水田・畑	平安・中世	
30	清水出遺跡	〃〃字清水出	〃	〃	中世	
31	有井庄司墓	〃有井川字八幡神社	墓	墓地	〃	県史跡
32	清源寺跡	〃〃字橋本	社寺跡	荒蕪地	中世・近世	
33	上川口遺跡	〃上川口字西高山・中屋敷	散布地	畑・宅地	奈良~中世	
34	小櫛山遺跡	〃〃字鳥羽ノ谷・板屋カダバ下モ	〃	畑・荒蕪地	縄文	
35	浮漣字南千次ヤシキ・代僧・休場他	〃浮漣字南千次ヤシキ・代僧・休場他	散布地	水田・畑	縄文~中世	
36	奥尾遺跡	〃〃字前奥尾・西奥尾・田中谷他	〃	畑	奈良~中世	
37	漣遺跡	〃〃字東ダバ・奥ダバ・色見ダバ他	〃	畑・宅地	縄文~中世	
38	鹿々場窯跡	〃〃字鹿々場	窯跡	水田・畑	奈良・平安	
39	窯跡	〃〃字ツエツチ	〃	畑・山林	〃	
40	防ノ駄馬遺跡	〃〃字防ノ駄馬・防ノ谷	散布地	畑	縄文~中世	
41	寺尾遺跡	〃口湊川字岡寺尾	〃	〃	奈良~中世	
42	コウカ遺跡	〃〃字コウクラ	〃	畑・荒蕪地	中世	
43	高知神遺跡	〃〃字高知神・新田	〃	水田・畑	縄文~中世	
44	日原遺跡	〃〃字ヒ高原	〃	畑・宅地	奈良・平安	
45	奥湊川遺跡	〃奥湊川字中地屋敷	〃	水田・畑	弥生・中世	
46	弘野遺跡	〃浮漣字弘野	〃	畑・荒蕪地	縄文~平安	
47	早咲遺跡	〃入野字早咲	〃	水田・畑	弥生・中世	祭祀遺跡
48	田村遺跡	〃加持字田村ヤシキ・王子谷口	〃	畑・宅地	奈良~中世	
49	正田畝遺跡	〃〃字正田畝	〃	畑・山林	平安・中世	
50	猿飼遺跡	〃〃字サ子トウシ	〃	畑・果樹園	縄文	
51	庄田遺跡	〃〃字庄田	〃	畑	弥生~古墳	
52	花井川遺跡	〃〃字上屋敷	〃	〃	中世	
53	加持本村遺跡	〃〃字イセキ	〃	水田・畑	奈良~中世	
54	泉福寺跡	〃〃字寺中	社寺跡	畑	〃	
55	竹シマツ遺跡	〃〃字竹シマツ	散布地	畑・荒蕪地	〃	
56	宇町ノ前遺跡	〃〃字ウチウマエ	〃	山林・畑	古墳・中世	
57	岡崎遺跡	〃入野字岡崎	〃	〃	〃	
58	亀ノ甲遺跡	〃〃字亀ノ甲	〃	畑	古墳~中世	
59	高知駄馬遺跡	〃〃字高知駄馬・四拾石他	〃	〃	〃	
60	入野遺跡	〃〃字大谷・タバタ他	〃	学校・畑	古墳	
61	浜ノ宮遺跡	〃〃字浜の宮・上万行・神上	〃	畑・宅地	中世	
62	入野本村遺跡	〃〃字八幡屋敷	〃	〃	奈良~中世	
63	板取谷遺跡	〃〃字板取谷	〃	畑・墓地	〃	
64	芝遺跡	〃〃字サッヘイ・弓場・水留	〃	水田・畑	〃	
65	東ヲゴウ遺跡	〃下田ノ口字東ヲゴウ・地ヲゴウ	〃	畑	古墳・中世	
66	カシワ遺跡	〃〃字カシワ	〃	〃	古墳~中世	
67	田ノ口古墳	〃〃字石ガミ	古墳	山林	古墳	県史跡
68	下田ノ口遺跡	〃〃字地イケノ谷	散布地	畑	奈良~中世	
69	積善寺跡	〃下田ノ口字イワカミ	社寺跡	山林	中世・近世	
70	上田ノ口遺跡	〃上田ノ口字荒神下・苗代	散布地	畑・宅地	中世	
71	コビロウカ遺跡	〃〃字ウヂカワ他	〃	〃	奈良~中世	
72	ムネノダバ遺跡	〃〃字ヤマサキ他	〃	畑	〃	
73	下馬荷遺跡	〃馬荷字コヤノダバ	〃	〃	縄文	
74	野中遺跡	〃〃字野中・山方	〃	水田・畑	中世	
75	宗正寺遺跡	〃〃字寺藪山・ヨリマセ	〃	〃	縄文・中世	
76	天神駄馬遺跡	〃〃字天神駄馬	〃	畑	中世	
77	中馬荷遺跡	〃〃字上大田	〃	畑・宅地	〃	
78	福堂遺跡	〃〃字カザヤシキ	〃	〃	〃	
79	アリノ木遺跡	〃加持川字上アリノ木	〃	畑	〃	
80	長丁頭遺跡	〃〃字長丁頭	〃	〃	〃	
81	大井川遺跡	〃大井川字宮川屋敷	〃	水田・畑	〃	
82	大屋敷遺跡	〃加持川字寺田・上林山・上林谷他	〃	畑・ハウス	縄文	
83	上駄馬遺跡	〃出口字上ミノキシ・椿屋敷	〃	畑・宅地	縄文・中世	
84	小坂口遺跡	〃〃字小坂口・シンボリ・西坂本・新開	〃	水田	〃	
85	長門駄馬遺跡	〃〃字長門ダバ・ヤマメダ・長門	〃	畑	〃	
86	宮崎遺跡	〃加持宮崎	〃	水田	平安	消滅

2 弥生から平安時代

弥生時代の遺跡は4カ所あり、奥湊川遺跡からは弥生中期の柱状石斧が出土している。破損が激しく一見すると打製の局部磨製石斧のように見られる。加持の庄田遺跡からも中期の扁平片刃石斧と多くの叩石が出土し、浮鞭の弘野遺跡からも打製石斧と叩石が発見されている。弘野遺跡も弥生中期と推定される。弥生後期から古墳時代の複合遺跡としては入



田ノ口古墳

野の早咲遺跡がある。弥生時代の叩石のほかに古墳前期の土師器が出土し、祭祀用の粗製小型土器も発見されている。古墳としては、下田ノ口の後期横穴式石室古墳（県史跡）があり、古く勾玉や須恵器が出土している。入野本村の大方商業高校裏山からは提瓶と呼ぶ須恵器が出土しているが、これは、地形や出土の遺物などから木棺直葬の後期古墳とみられる。浮鞭色見場の鞭遺跡は多くの須恵器が出土し、古墳時代後期の集落関係遺跡と推定される。本格的調査はなされていない。浮鞭の鹿々場では、須恵器を焼いた窯跡が発見されている。登り窯は未発見であるが、灰原が発見されている。灰原から出土している須恵器から見て9世紀代の窯と見られる。瓦は焼かれず、須恵器の甕・瓶・杯・蓋・盤などが焼かれている。



鹿々場窯跡遠景

3 中世

大方郷は当初一条家領であり、建長2年(1250) 九条道家から一条氏の祖実経に譲与した所領の幡多郡(幡多荘)に「大方庄」がみえる(九条家文書)。のち元応2年(1320) 3月10日の一条殿寄進状によれば、道家開基の東福寺へ寄進されている(東福寺文書)。以後大方郷は東福寺領として一応幡多荘とは別途の道を歩むこととなり、長宗我部地検帳には、当町域では足摺分(金剛福寺領)が一筆もないことなども、その現れであろうか。なお、金剛福寺文書には幡多荘内各村(郷)の名が散見するが、そのうち大方郷内の地名は正応2年(1289) 前撰政家政所下文の中に「大方郷内浦国名田口壺町」と見えるのみである(蠹簡集)。

1) 尊良親王の幡多配流

当地は、土御門上皇の遠流の地ともいわれ(大方町史) 尊良親王も配流されてきたと伝え、中世にも遠流の地であった。後醍醐天皇の倒幕計画発覚で配流されたなかに後醍醐天皇の第1皇子尊良親王がおり、親王は幡多郡の大方郷に入ったという。元弘2年(1332) 3月の事である。配流後、大方郷の土豪大平弾正や有井川の土豪有井庄司の活動があったと伝えられる。「太平記」には、「土佐ノ畑」と記され、大方郷の地であったかは明確でない。大平弾正は奥湊川の領主といわれ、親王を奥湊川の最奥、王野という山中に迎えたが、京より刺客襲来の噂もあって、有井川の庄司三郎左衛門

豊高と相談してさらに有井川の奥の米原の地に移し、以後有井庄司が親王を守護したと伝えられる。当時の親王の心境は「新葉和歌集」に載る少なからぬ歌によって知られる。小袖貝や衣掛簪など親王とその御息所あるいは有井庄司・大平弾正にまつわる伝説が多く残り、大平弾正の墓や有井庄司一族の五輪塔などの遺跡・遺物も当地のそこそこに影を落としている。



大平弾正の墓

有井庄司の墓は有井川にある。尊良親王は忠臣有井庄司の死を聞き、冥福を祈って五輪塔を贈ったと伝えられる。大小総数68個の五輪塔が現存し、沖の海中には多くの五輪塔石が砂中に埋没しているとも伝えられる。昭和28年に県史跡に指定された。また米原の仮宮の跡と伝える米原宮跡（町文化財）もある。なお加持の田村大明神は、南北朝期の常滑大甕を古くから神体にしていたと「南路誌」に見えるが、昭和47年に付近からこの大甕が発見された。また田村大明神に近い宮尾の畝でも、同50年に同じく南北朝期の常滑大甕が発見された。この大甕が土中に埋没していた様子は鹿持雅澄の「幡多日記」文化15年（1818）の記事に掲載されている。



常滑焼大甕

2) 土佐一条氏と入野氏

応仁2年（1468）10月、前関白一条教房は、幡多荘の中心中村に入った。一条氏は、下向後、幡多荘内の主だった武士たちの官位昇進の要望を入れて、朝廷に推挙している（大乘院寺社雑事記）。この中に「市正」に任じられた入野家則が見える。家則とその父家元は、一条氏に服従せず、そのために一条氏は興福寺大乘院門跡の尋尊を通じて入野父子を春日社で調伏しているほどである。この入野氏もついに翌3年8月頃までに一条氏に属するに至った（同前）。

3) 地検帳に見える大方

天正17・18年（1589・1590）に行われた入野郷関係の地検帳には、有井川・井田・出口・浮津・馬荷・大井川・奥湊川・御坊畑・上田之口・弘ノ・福堂・鞭・蜷川などの村名が見える。地検帳に見える村名は、若干の例外（赤坂ノ村・大楠ノ村・ヒビ原ノ村・弘ノ村など）を除いてほとんどが、そのまま現在に続いている。入野郷の村では一部町を形成した地域もあり、幡多郡では珍しいあり方を示している。東小野様御分・タイノ大分殿分・安田上様御分・観音寺新左衛門殿分・冷泉院民部小輔殿給・入江治部小輔給・飛鳥井虎熊給などの記載が多い。これら是一条家一門や公家衆、および長宗我部氏一族などと思われる。冷泉院・入江・飛鳥井などは長宗我部時代となっても、一条氏時代に引き続いて土着し、旧領の一部を給与されて在地小領主へ転化したものと思われる。当時も当町域は一条氏時代の支配態勢の名残を残している。

4) 水主の記録

長い海岸線をもつ当町には水主が相当数存在した。地検帳によると、各村の水主は、現住のわかるものが井田14・有井川4・浮津3・田浦7の計28名、居住不明の者は井田5・有井川1・浮津0・田浦4で計10名、あわせて38名を数えている。砂浜のみの入野や出口に水主のいないことはうなずけるが、港らしい港を持たない有井川に水主がおり、大方町第一の港



現在の大方町入野漁港

とされる上川口に水主が1人もいない意味は今後の研究課題である。舟頭（船頭と同意義か）が上川口に3名もおり、ほかの海辺に記載されていないこともあわせて注目される。また水主や船頭と最も関係の深い船番匠（船大工）が少なくとも5軒あることも重要である。長い海岸線をもちながら東隣の佐賀町の水主数に比して少ないことは重視される。

4 近世

江戸期に入ると当地も土佐藩山内氏の支配下に入る。当町の江戸期の村名は、4ヶ村の例外を除き地検帳記載の村名がそのまま踏襲されて、一村庄屋あるいは兼帯庄屋により行政が行われている。小村の場合は名本が置かれることもある。そのうち入野村は 相当の広域村で一村を続けていることで特色がある。また入野郷には藩政当初から大庄屋が配置され（大方町史）、当初の大庄屋には曾根氏がおり、中期・末期には永野・猪石両家がある。大庄屋の管下には出口・田野浦・上田ノ口・下田ノ口・御坊畑・馬荷・橘川・鹿持川・鹿持・口湊川・奥湊川・大井川・鞭・蜷川・有井川・入野の16ヶ村があった。入野は大庄屋の直轄地である。寛保3年（1743）の郷村帳には、入野・鹿持（加持）・鹿持川（加持川）・浮津・鞭・口湊（口湊川）・奥湊川・広野・大井川・上田ノ口・田ノ口（下田ノ口）・御坊畠（御坊畑）・馬荷・橘川・出口・田ノ浦（田野浦）・蜷川・川口・井田・有井川・福堂の21ヶ村がみえる。戸数・人数は、入野村の140戸・648人、井田村の87戸・493人など、合計1,075戸・4,719人であった。なお、広野村は鞭村、福堂村の内と思われ、川口村は江戸後期から上川口村とも称された。

1) 浦と浦庄屋

海辺の港湾・漁獲地は浦と称され、浦庄屋が配置された。当町域の浦は井田・上川口・浮津・入野・田ノ浦などがあり、浮津以外の浦は同名の浦もある。入野は従来村であったが、宝暦12年（1762）新浦立てされた。当時の庄屋は永野家であり、村浦兼帯であった。なお漁師居住の旧浦分を浜と言い、百姓居住の農村分を郷という慣行は今に続いている。上川口浦は当町域中でも海運ならびに漁業の重要港として、井田・浮津・入野各浦を兼帯した浦大庄屋が配置されたこともあり、藩政後半には安光家が4ヶ浦大庄屋を勤めている（安光家年譜）なお伊田の松山寺跡に再興された観音寺に残る「月」の字の額は、土佐国司紀貫之の板書と伝えられている。焼却されて「月」の1字のみ残ったものを、郡奉行尾池春水が寺僧から貰い受けて松山寺に寄進したものといわれ、江戸期に文

人墨客の評判を得、関係の詠歌が多く残されている。

2) 田ノ口銅山と入野砂糖

海岸線は長いが良港に恵まれぬ点と、当地が土佐湾内にあるためか、漁業は総体的に余り盛んではなかった。製塩も地検帳に塩浜72浜が集計されているが、みるべきものはない。むしろ当地の産業としては銅山と精糖が産業史に特記すべきものといえよう。田ノ口銅山は土佐で最も古く、幡多郡では唯一の銅山である。延宝5年（1677）藩営事業として試掘が始められており、のち宝永4年（1707）大阪商人海部家助右衛門らによって採掘が始められた。翌年中止され、正徳2年（1712）再開、元文3年（1738）廃坑、安政3年（1856）再開された。その後経営者が転々としながらも明治44年まで続いたが休山している。（堅田）

第2節 大方町の中世城郭

大方町の中世をみると、南北朝時代以降大方郷の豪族として名前の知られている入野氏がいる。入野氏は、一条氏が中村に下向するまでその勢力を保ち、下向後は一条氏の有力家臣団に組み込まれているが依然として大方郷を支配していた。大方町には、高知県遺跡詳細分布調査によって確認されている中世城郭が25城跡ある。確認されている中世城郭は、小規模城郭が多く一条氏の傘下で入野氏と関わりのある小土豪の持ち城の可能性が強い。しかしこの入野氏の詳細については不明な点が多く、入野氏滅亡に関しても文献面の資料は数少ない。その中で、高野山円満院の過去帳に入野家和・家重父子の名前が認められる。この過去帳によると、永正17年卯月24日という命日の記録がある。この過去帳の記録を残して、入野氏の名前が突如として姿を消している。大方町史によると、主家である一条房家が入野父子を誅殺したとされ、その誅殺に手をかけた者の褒賞として入野郷に給地が与えられていることを長宗我部地検帳の分析から指摘している。いづれにしても一条氏が下向してくる15世紀後半から前述した房家が入野氏を上意討ちした事件の頃までに、西本城跡をはじめ周辺の中世城郭は構築されている可能性が考えられる。このような歴史的背景の中で、現在までに発掘調査されている曾我城跡や、縄張り調査されている中世城郭を各流域ごとにみていきたい。

曾我城跡は、大方町浮鞭城ノ谷口に所在している。1995・1996年に農地造成工事に伴い堀切部を中心として発掘調査されている。曾我城跡は、標高が45mの主郭を中心に連結したいくつかの曲輪と堀切1条、堅堀2条で構成されている。東側に流れる湊川の岸部分の標高差は35mである。主郭部分は、工事対象外で試掘調査のみが実施されている。試掘調査の結果を見ると、主郭部には掘立柱建物跡を検出しており、出土遺物を見ると青磁のみで構築から機能した時期を類推すると15世紀後半から16世紀前半の時期とみられている。曾我城跡をみても、前述した一条氏下向から入野氏事件の時期と城跡の機能した時期が一致する。さらに今回の西本城跡の調査成果からも同じことが言えそうである。

大方町は、太平洋に面した扇形の地形をしている。北部の大半を山地が占め、南の太平洋に向けて6つの中・小河川が流入している。中世城郭も各河川沿いの丘陵上に構築されているものが多い。

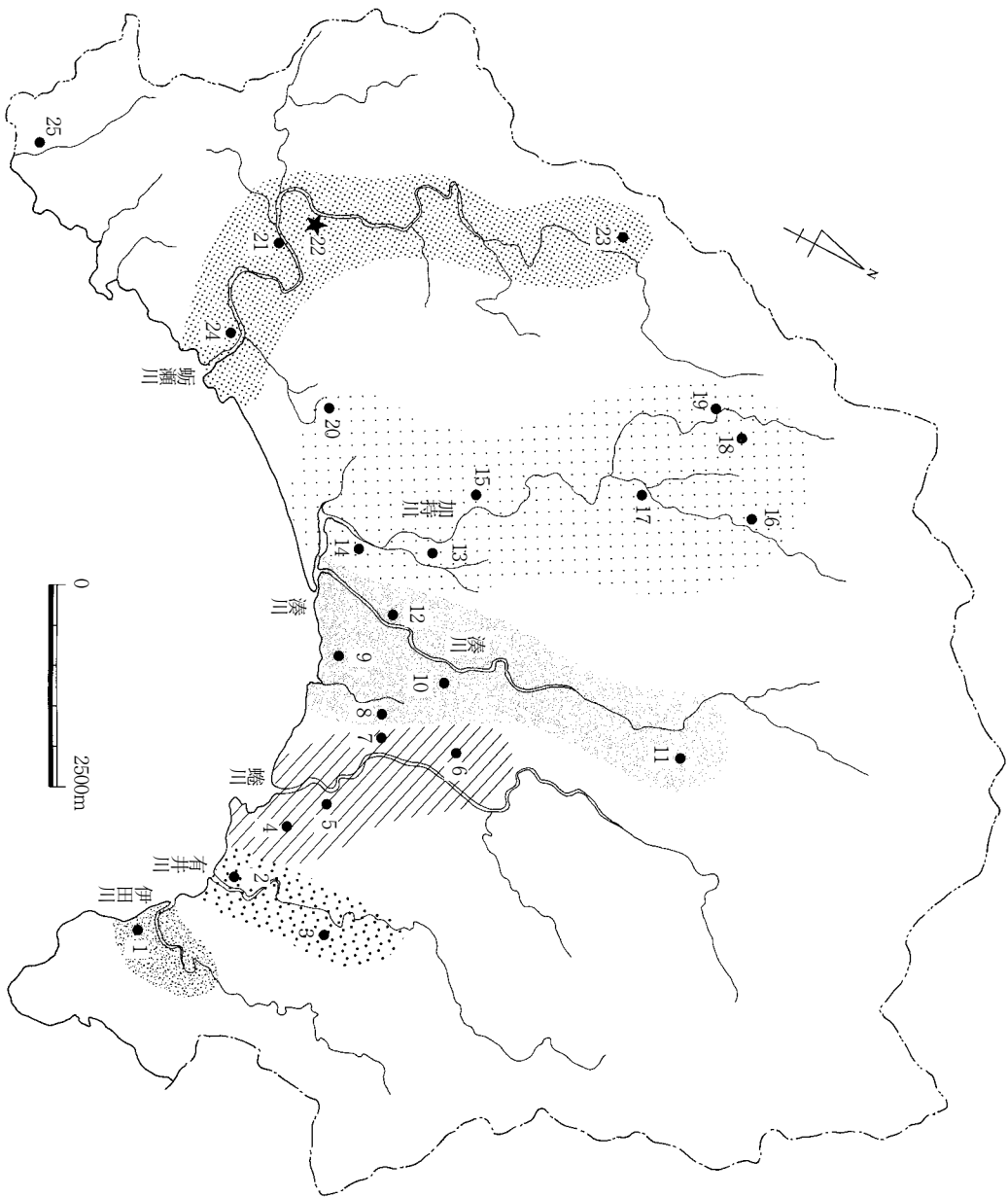


Fig. 4 大方町河川流域別中世城郭分布図

- 伊田川流域
 - ①伊田城跡 (井田城跡)
- 有井川流域
 - ②有井川城跡
 - ③北有井川城跡 (有井川奥之古城跡)
- 蜷川流域
 - ④上川口城跡
 - ⑤高山城跡
 - ⑥蜷川城跡
 - ⑦浮津城跡
- 湊川流域
 - ⑧南浮津城跡 (浮羅城跡)
 - ⑨吉田山城跡
 - ⑩木津城跡
 - ⑪湊山城跡 (大平城跡)
 - ⑫曾我城跡
- 加持川流域
 - ⑬小山城跡
 - ⑭吹上城跡 (大江城跡)
 - ⑮鹿持城跡
 - ⑯本合城跡
 - ⑰加持川城跡
 - ⑱宮川城跡
 - ⑲大井川城跡
 - ⑳入野城跡
- 新瀬川流域
 - ㉑岩合城跡
 - ㉒西本城跡
 - ㉓馬布城跡
 - ㉔新瀬城跡 (田ノ浦城跡)
 - ㉕出口城跡

ここでは、各河川ごとに城郭分布をみていきたい。

伊田川流域…伊田城跡の1城跡。

加持川流域…加持城跡、入野城跡、吹上城跡、本谷城跡、加持川城跡、小川城跡、宮ノ川城跡、大井川城跡の8城跡。

蛎瀬川流域…西本城跡、岩合城跡、蛎瀬城跡、馬荷城跡の4城跡。

湊川流域…米津城跡、南浮津城跡、曾我城跡、浮鞭城跡、大平城跡の5城跡。

有井川流域…北有井川城跡、有井城跡の2城跡。

蜷川流域…上川口城跡、高山城跡、浮津城跡、蜷川城跡の4城跡

その他町内主要河川付近ではないが、小河川に近い場所に構築されており、海に近く大方町西南端部に位置する出口城跡がある。以上各流域ごとに城跡を見てきたが、町内に構築されている城跡の特色についての詳細な検討は考察で行うことにする。

第3節 西本城跡の概要

西本城跡は、大方町上田ノ口字タナダ・テッポウ田に所在している。尾根上に立地し、主郭と考えられる標高50mの曲輪1と西側に一段低い標高42mの曲輪2が構築されている。主なこの2ヶ所の曲輪を防御するように堀切3条を両端に配している。曲輪2の南部には3条の堀切を挟んで曲輪3が存在するが、南端を堀切1条によって区画されている。主郭及びその東部は調査対象外であるが、主郭の東側も堀切3条が掘られ強固に防御されている。曲輪2の西側斜面には堅堀が連続して掘り込まれていることも今回の調査で判明した。主郭の曲輪1及び下段の曲輪2は、その前後を3条ずつの堀切で囲まれており尾根上の侵入を防御しており、さらに曲輪2の西側斜面の堅堀群は、斜面を利用した登城の防御的役割を果たしている。曲輪1・2は、田ノ口地区を一望できる適所に構えられており、東は対岸の岩倉城とともに入野～中村間の往還を抑え、西側は馬荷への入口を抑えることができる。小規模城郭ながら、交通の要所を押さえることと、上田ノ口集落を防御するに堅固な構えをもつ城郭である。

大方町では、中世の城館跡が25ヶ所確認されている。そのほとんどが山城で小規模城郭が多い。大規模城郭のような地域支配の核となる城を「拠点的城郭」と位置付けると、対する特徴の乏しい城郭を「小規模城郭」と捉えることができる。西本城跡をはじめ、その多くの山城が小規模城郭であることは認識されており、民衆との係わりの中で小規模城郭が構築されていった点など西本城跡の調査成果は貴重な資料である。(松田)

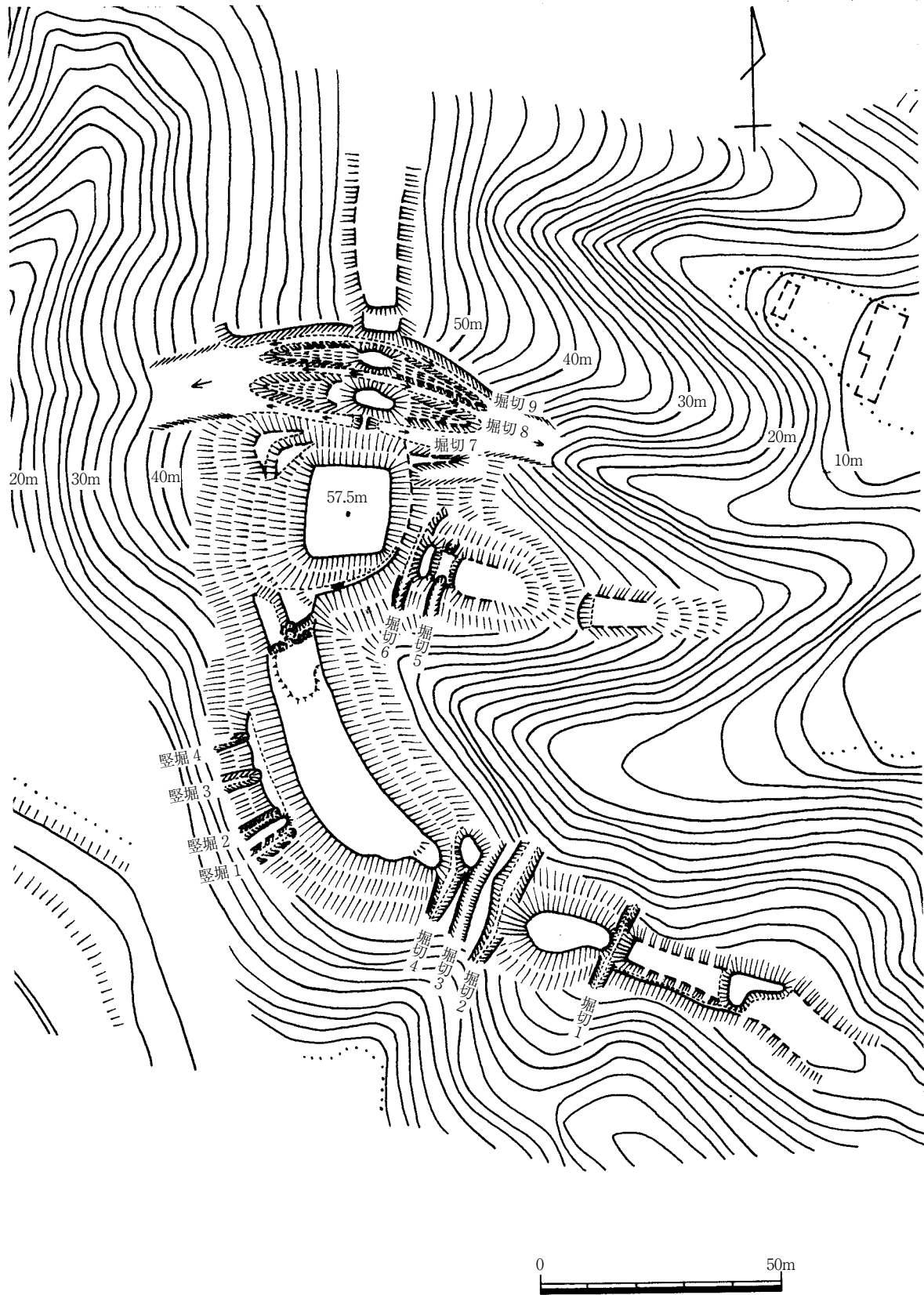


Fig. 5 西本城跡概要図（高知県幡多郡大方町） 作図：中井 均

第3章 調査の概要

第1節 調査の方法

調査にあたっては、雑木の伐採前に城跡全体の縄張り図を作成した。伐採終了後西斜面に豎掘と曲輪を発見し、縄張り図に追加作図した。詳細は遺構の項に譲ることとする。測量基準点の設置にあたっては、(社)高知県建設技術公社に委託した。測量の概要は四等三角点、田ノ口(標石第052951号)・下田ノ口(標石第048989号)を基点にT1～T8の新点を設置し、西本城跡のまわりに準拠点(コンクリート杭)JK1・JK2・JK3を設置した。基準線は曲輪2の長軸方向とし、公共座標第IV系の北から西へ $30^{\circ}-49'-52''$ 振っている。名称は南北をA～Z(4.0mピッチ)、東西に2～32(4.0mピッチ)のメッシュ測量点を設置し、各グリッドとした。1～4曲輪は同一グリッドラインであり、グリッドの名称は北西コーナーを基準として呼称することとした。曲輪1～3の調査は2×2mのトレンチを設定し、遺構・遺物の遺存状態を確認した後、ベルトを残して全面発掘を行った。曲輪4については面積が狭かったので、西側斜面部分と同時にベルトを残して掘り進めた。東側斜面も同様にベルトを残し掘り進めた。東斜面下の水田部分については、確認のためA～Cトレンチを設定し調査を行った。各トレンチは次のとおりである。Aトレンチ2×12m、Bトレンチ2×10m、Cトレンチ2×

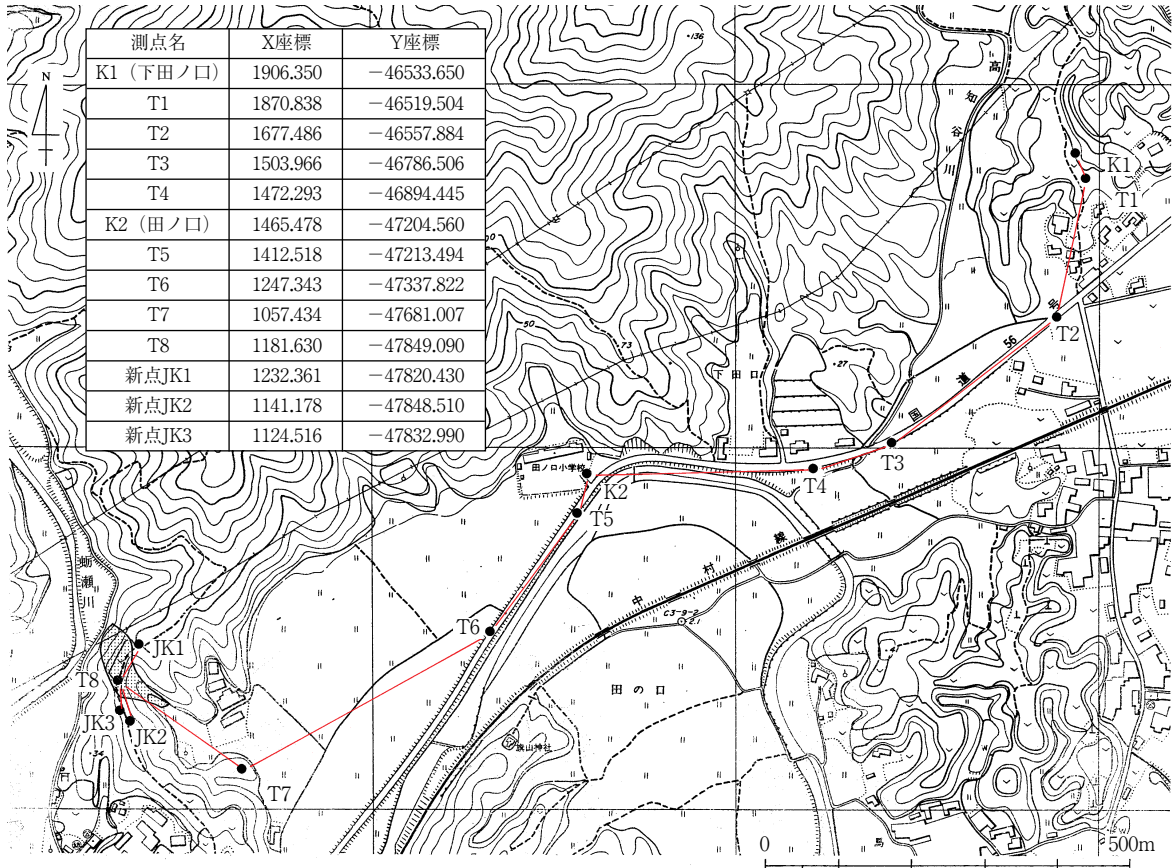
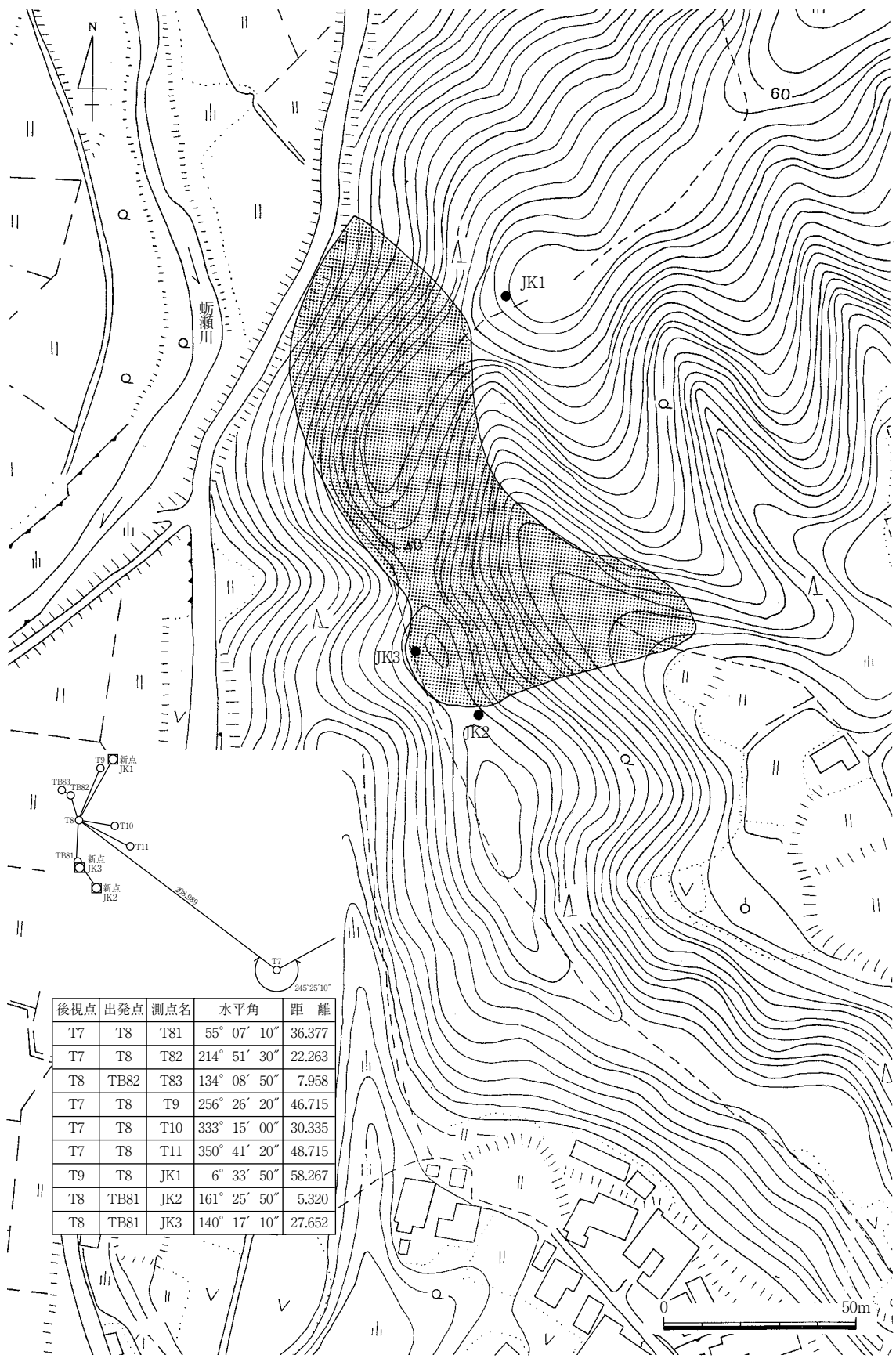


Fig. 6 西本城跡測量基準点設定図



後視点	出発点	測点名	水平角	距離
T7	T8	T81	55° 07' 10"	36.377
T7	T8	T82	214° 51' 30"	22.263
T8	TB82	T83	134° 08' 50"	7.958
T7	T8	T9	256° 26' 20"	46.715
T7	T8	T10	333° 15' 00"	30.335
T7	T8	T11	350° 41' 20"	48.715
T9	T8	JK1	6° 33' 50"	58.267
T8	TB81	JK2	161° 25' 50"	5.320
T8	TB81	JK3	140° 17' 10"	27.652

Fig. 7 西本城跡調査対象範囲

24mである。堀切1は浅く長さも短く、ほとんどの部分が調査区外であるため不明な点が多いが曲輪3と他の部分との区画のために掘られた堀切のようである。堀切2・3・4については、堀切の中央部にベルトを設定して掘り下げた。竪堀1・2・3については、下端部の断面図を作製し、一番深く掘られていた竪堀3については、グリッド杭を利用してベルトを設定して掘り進んだ。曲輪4及び東斜面下の集石遺構については実測図を作図した。調査の進行に応じて、必要な写真撮影及び図面作製等によって記録を残した。また、遺構の現状を正確かつ迅速に把握、保存するための空中写真測量法による遺構図を作成するために、(株)アイシーに航空写真測量を委託した。作成図面は、遺構平面図 S=1:50・S=1:100、オルソコンター図、デジタルモザイク写真、風景写真である。

第2節 調査の概要

西本城跡は大方町上田ノ口字タナダ・テッポウ田に所在し、標高約50~40m前後の北東から南に伸びる尾根上に立地している。西側は上流の馬荷集落から蛸瀬川が南流し、東は対岸の岩倉城とともに

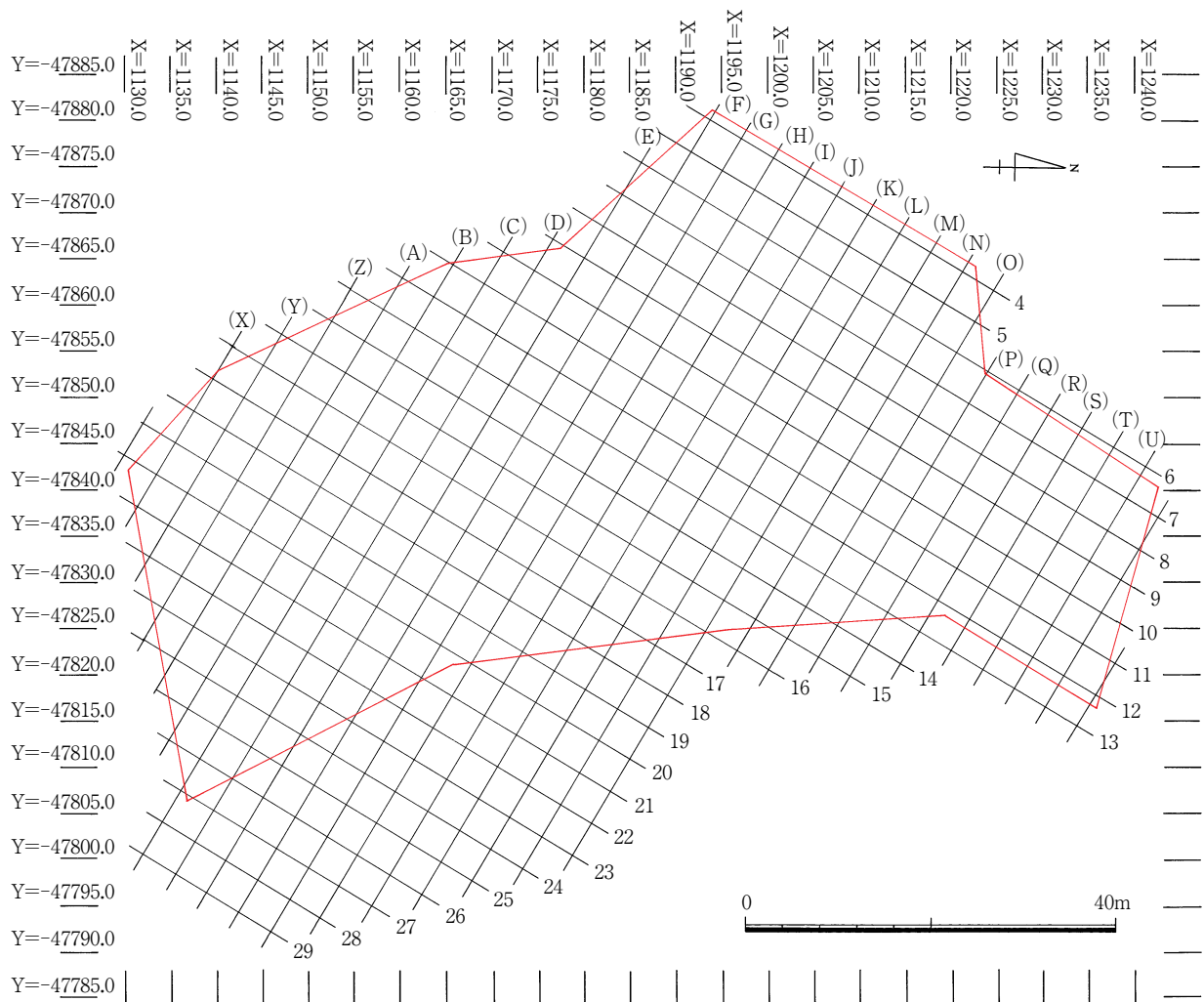


Fig. 8 調査区グリッド設定図

入野～中村間の往還を抑えるとともに、上田ノ口の集落を防御する交通の要衝を抑えている。

調査前の縄張り図作成時の状況を見れば、調査区域外ではあるが主郭と考えられる標高約50mの曲輪1とその北東側も堀切が3条掘られ強固に防御されている。曲輪1の南側には一段低い標高約42mの曲輪2が構築されている。曲輪2の南部には堀切3条を挟んで曲輪3が堀切1条によって区画されている。曲輪2は北東方向の長軸46.8m、東西の最大幅11.4mの不整形の曲輪である。曲輪3は南北方向に長軸をとる不整形の曲輪で、南北17.5m、南西方向の最大幅7.3mで自然地形であると思われる。曲輪1aは南北5.5m、東西4.4mの不整形の曲輪である。この曲輪の西側に一段低く南北に11.7m、東西2.8mの曲輪1bがある。曲輪3と曲輪2の間には3条の堀切が構築され、西斜面曲輪4の下方に縦堀3条が掘られ防御を固めている。

調査は、曲輪2から開始した。北端部では岩盤の露出がみられ岩盤を掘り込んだ柱穴が21個が確認された。南部に行くにしたがって堆積が厚くなり、中央部で土坑3基、柱穴33個、南部で柱穴28個を検出した。曲輪3は、遺構、遺物共に確認されず自然地形と判断されるが、その南側に続く尾根部は堀切により隔絶されており、城としての構造の一環としてとらえられる。曲輪2と曲輪3を隔てる3条の堀切のうち堀切4の尾根部はきわめて急峻な斜面をなしており、曲輪2との比高差4.9mである。曲輪2の西斜面に帯状の曲輪4と集石及び3条の縦堀を検出した。東斜面下にも集石遺構を検出した。出土遺物は、ほとんどが曲輪2と集石周辺で出土しており総点数は1165点である。

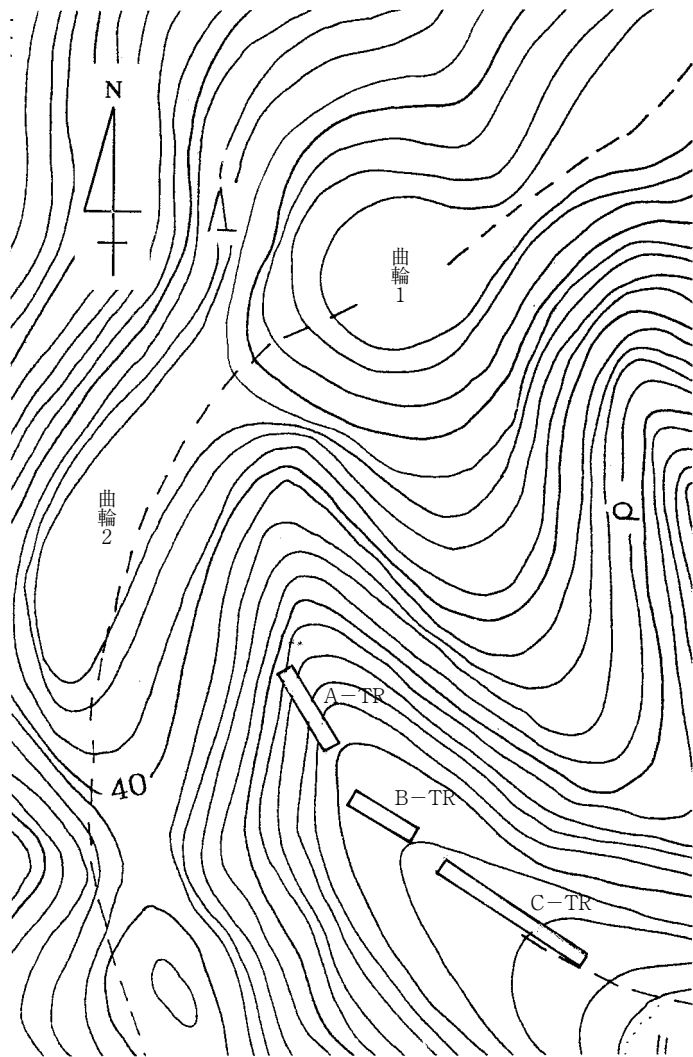


Fig. 9 A・B・C TR平面図

第3節 基本層序

西本城跡における各曲輪の土壌の堆積は薄く、特に曲輪2の北部は岩盤が露出しているが、南部に行くにしたがって堆積が厚くなっていく。東西方向の堆積状況も、中央部が薄く端によるほど厚く

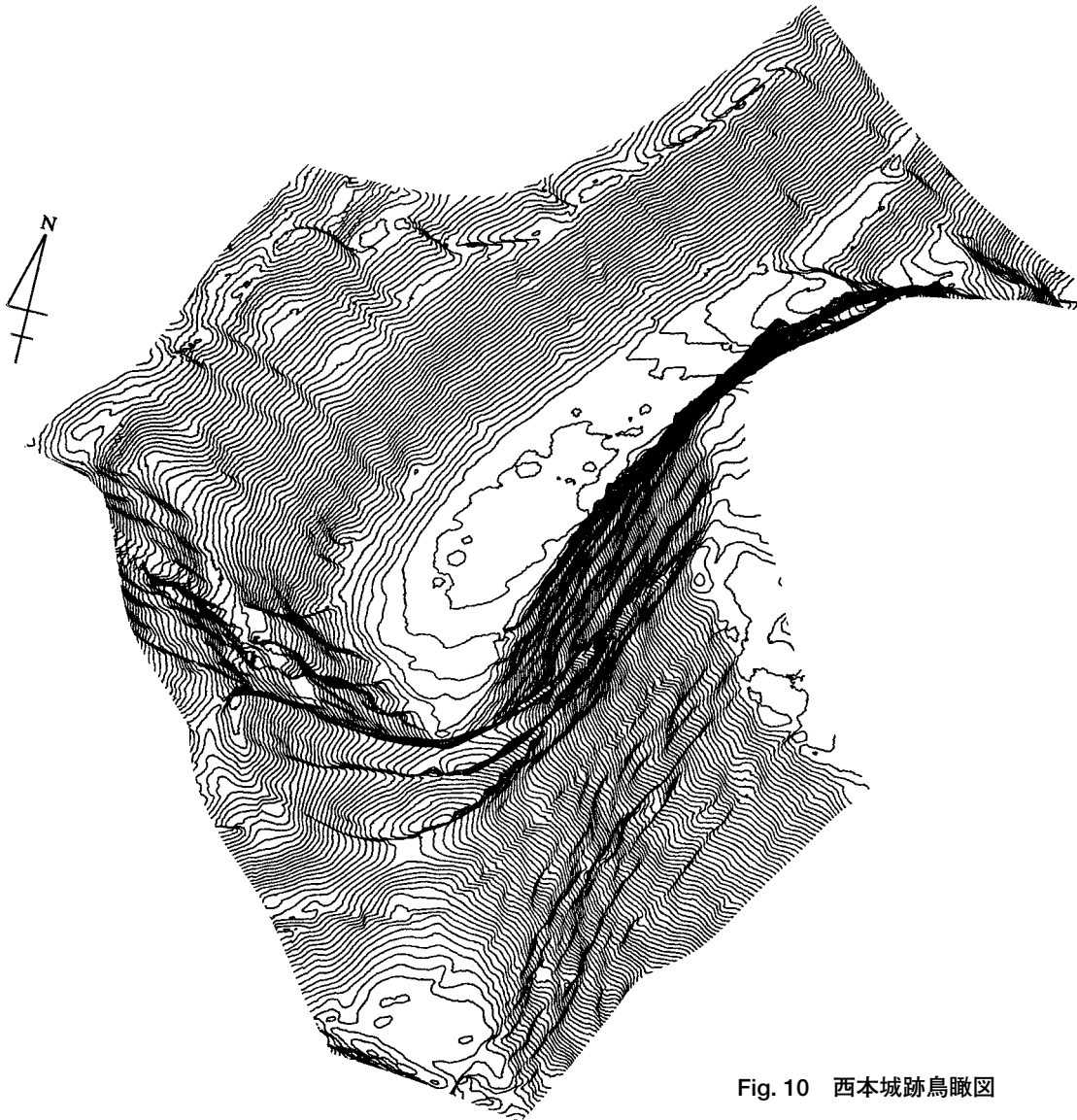


Fig. 10 西本城跡鳥瞰図

なっている。曲輪1a～1bの断面図セクションの層序は、Ⅰ層暗褐色土層であり表土である。Ⅱ層は褐色土層で小礫を含んでいる。Ⅲ層は明褐色土層である。曲輪2の層序は、Ⅰ層暗褐色土層であり表土である。Ⅱ層は褐色土層で全体的に堆積しており遺物を包含している。Ⅲ層はにぶい黄褐色土層である。

曲輪3の層序は、Ⅰ層暗褐色土層で表土である。Ⅱ層明黄褐色土層、Ⅲ層にぶい黄褐色土層、Ⅳ層灰黄褐色土層、Ⅳ'層灰黄褐色土層である。

切岸のセクションは、Ⅰ層暗褐色土層、Ⅱ層にぶい黄褐色土層、Ⅲ層黄褐色土層である。竪堀1・2は、Ⅰ層暗褐色土層、Ⅱ層にぶい黄褐色土層、Ⅲ層明褐色土層である。竪堀3は、Ⅰ層暗褐色土層、Ⅱ層褐色土層、Ⅲ層黄褐色土層、Ⅳ層褐色土層、Ⅴ層オリーブ褐色土層である。

堀切2・3・4セクション (i～jライン) は、Ⅰ層暗褐色土層、Ⅱ層にぶい黄褐色土層である。堀切2・3・4セクション (g～hライン) は、Ⅰ層暗褐色土層、Ⅱ層にぶい黄褐色土層、Ⅱ'層褐色土層、Ⅱ''層にぶい黄褐色土層で締まりがある。Ⅲ層にぶい黄褐色土層で礫を含んでいる。堀切2は、Ⅰ層暗褐色土層、Ⅱ層にぶい黄褐色土層である。堀切3は、Ⅰ層暗褐色土層、Ⅱ層にぶい黄褐色土層、Ⅱ'層黄褐色土層 (小礫多く含む)、Ⅲ層黄褐色土層である。堀切4は、Ⅰ層暗褐色土層 (締まりなし)、Ⅱ層にぶい黄褐色土層 (小礫多く含む) である。

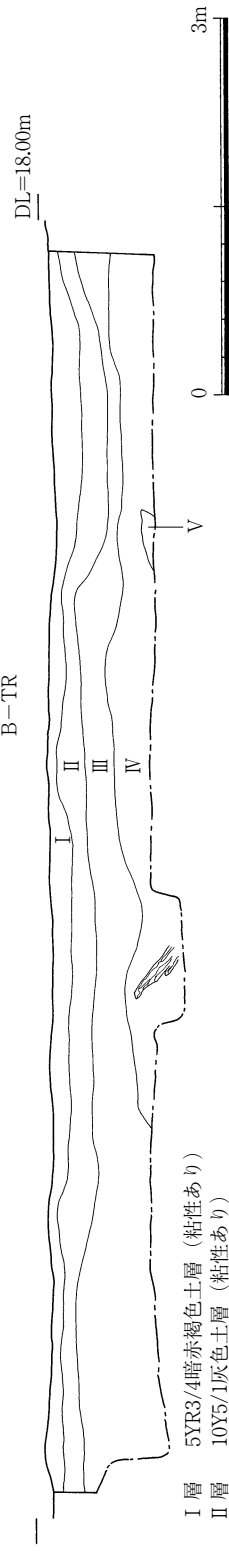
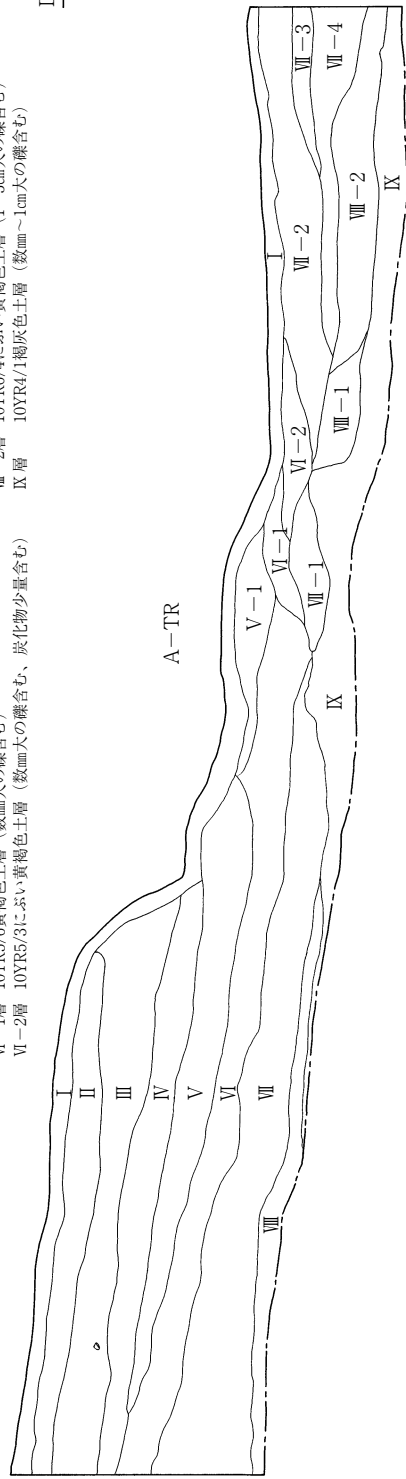
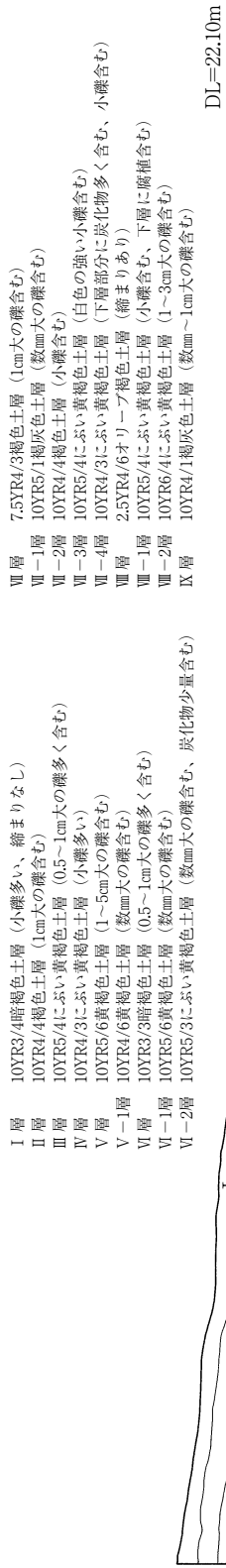


Fig.11 A・B・C TR セクション図

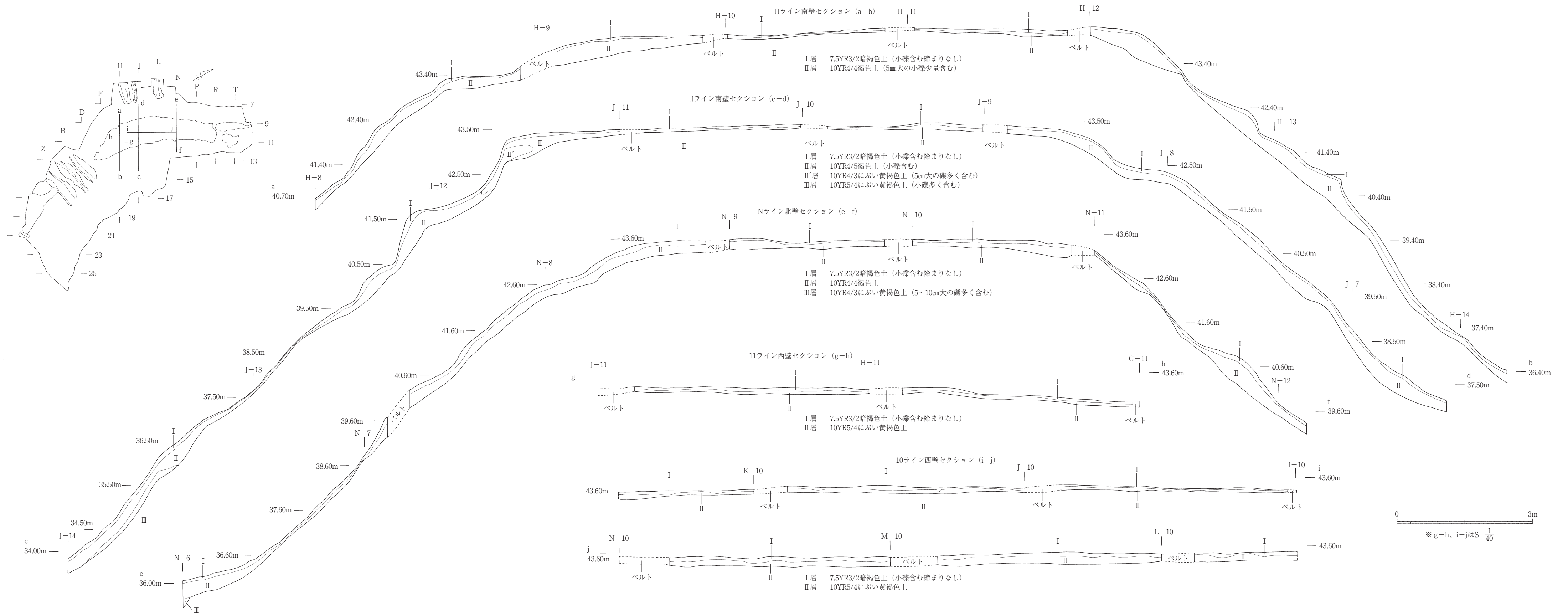


Fig.12 曲輪2及び東西斜面セクション図

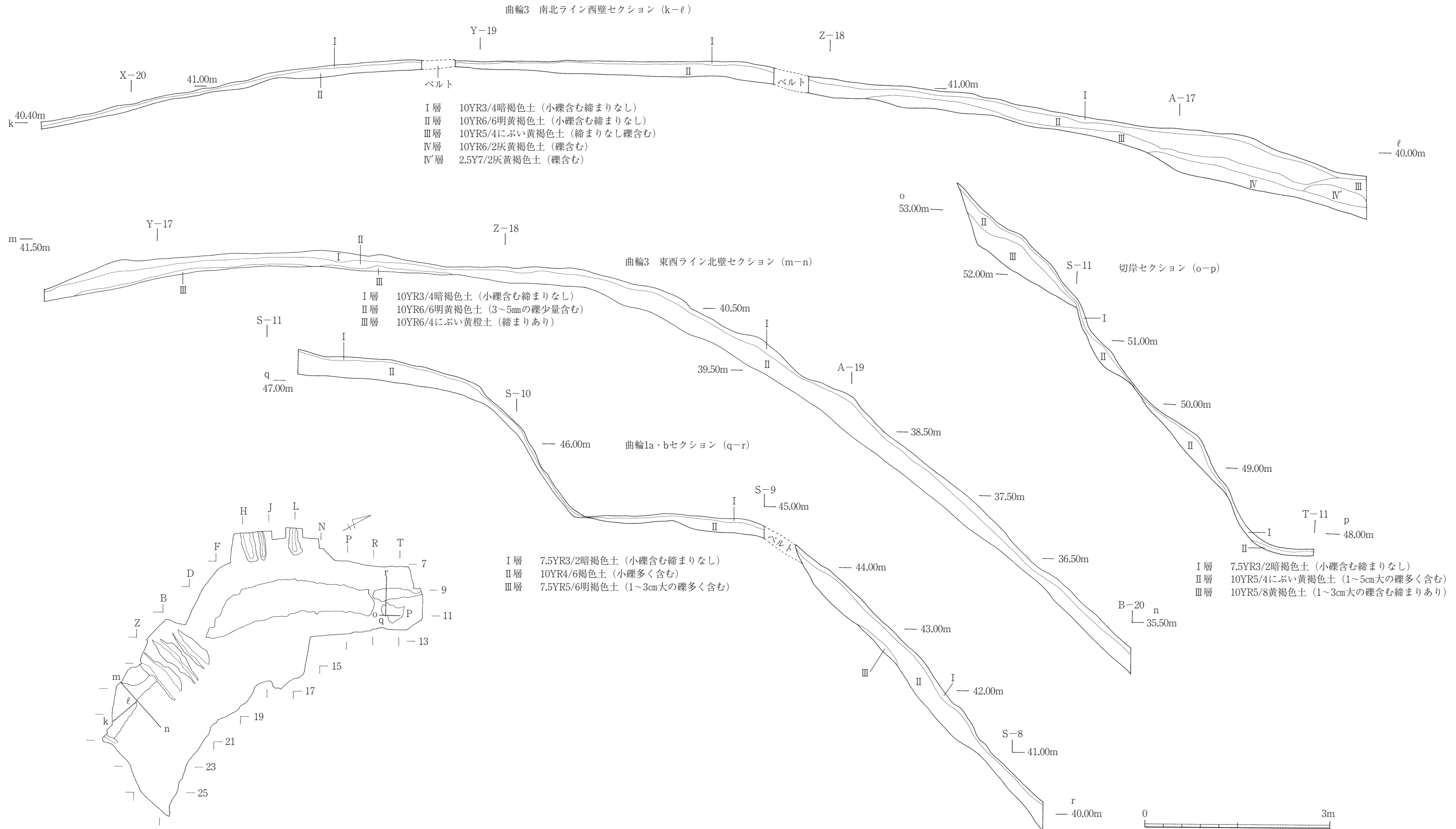


Fig. 13 曲輪1a・b、曲輪3、切岸セクション図

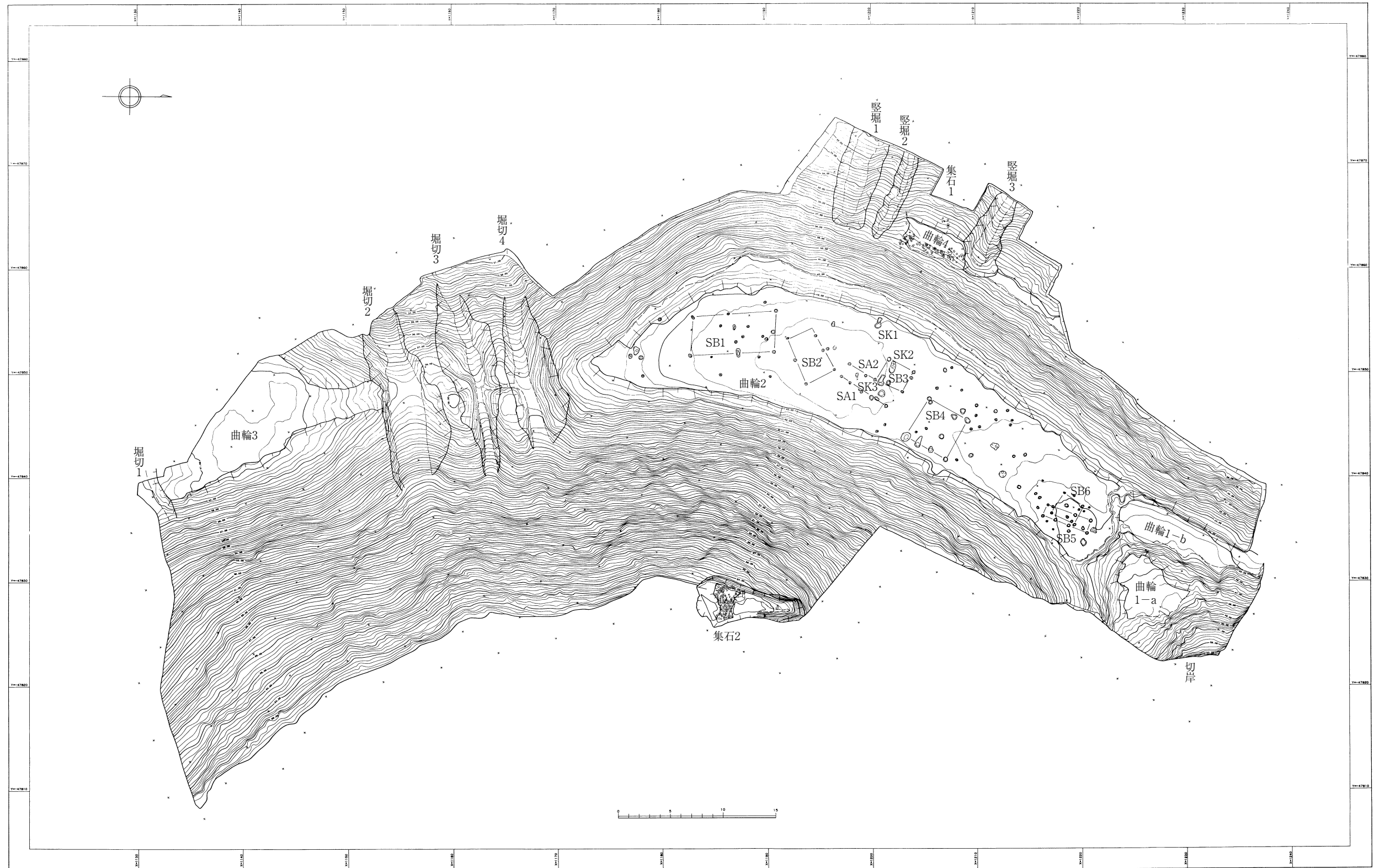


Fig. 14 西本城跡検出遺構全体図

第4章 調査の成果

第1節 検出遺構

曲輪1aと西側に一段低い曲輪1bは面積も狭く遺構としては曲輪1aの北部から詰にかけての切岸だけである。曲輪2の遺構は、掘立柱建物跡6棟（SB）・柵跡2列（SA）・土坑3基（SK）・ピット群等を検出した。曲輪2の南部に堀切を挟んで位置する曲輪3は、自然地形を利用した平場であると考えられる。堀切は調査区内で4条確認できている。特に堀切2、3、4は連続して掘られている。西斜面に帯曲輪状の曲輪4と縦堀3条を検出し、東斜面下に集石遺構を検出した。

1 曲輪1の遺構

1) 切岸

調査区の北側端に断面台形状に詰を防御するために尾根を切り込んでいる。斜面の傾斜は 50° 近くあり急峻である。詰部の長さ約4m、底辺部約16mを測り、曲輪1bとの比高差9m、曲輪1aとの比高差5.5mを測る。

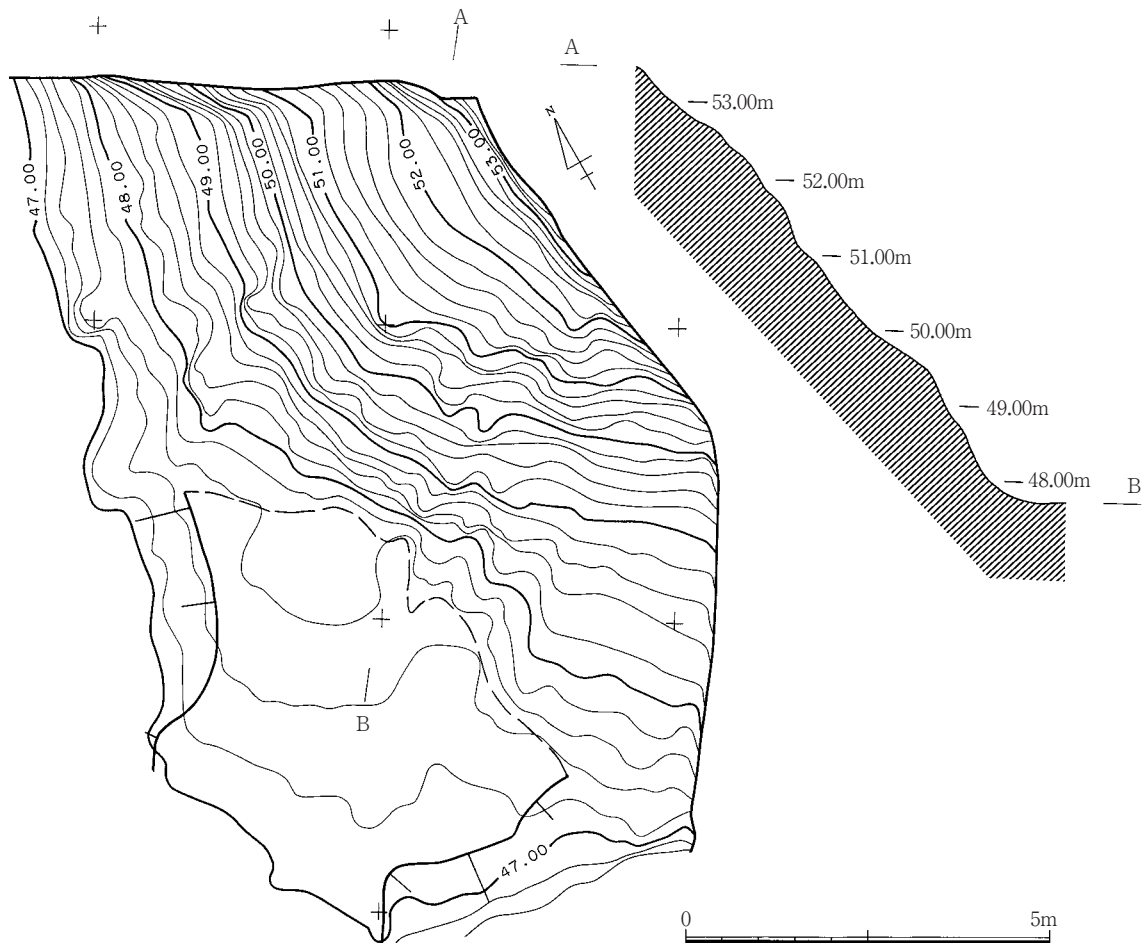


Fig. 15 切岸平面図及びエレベーション図

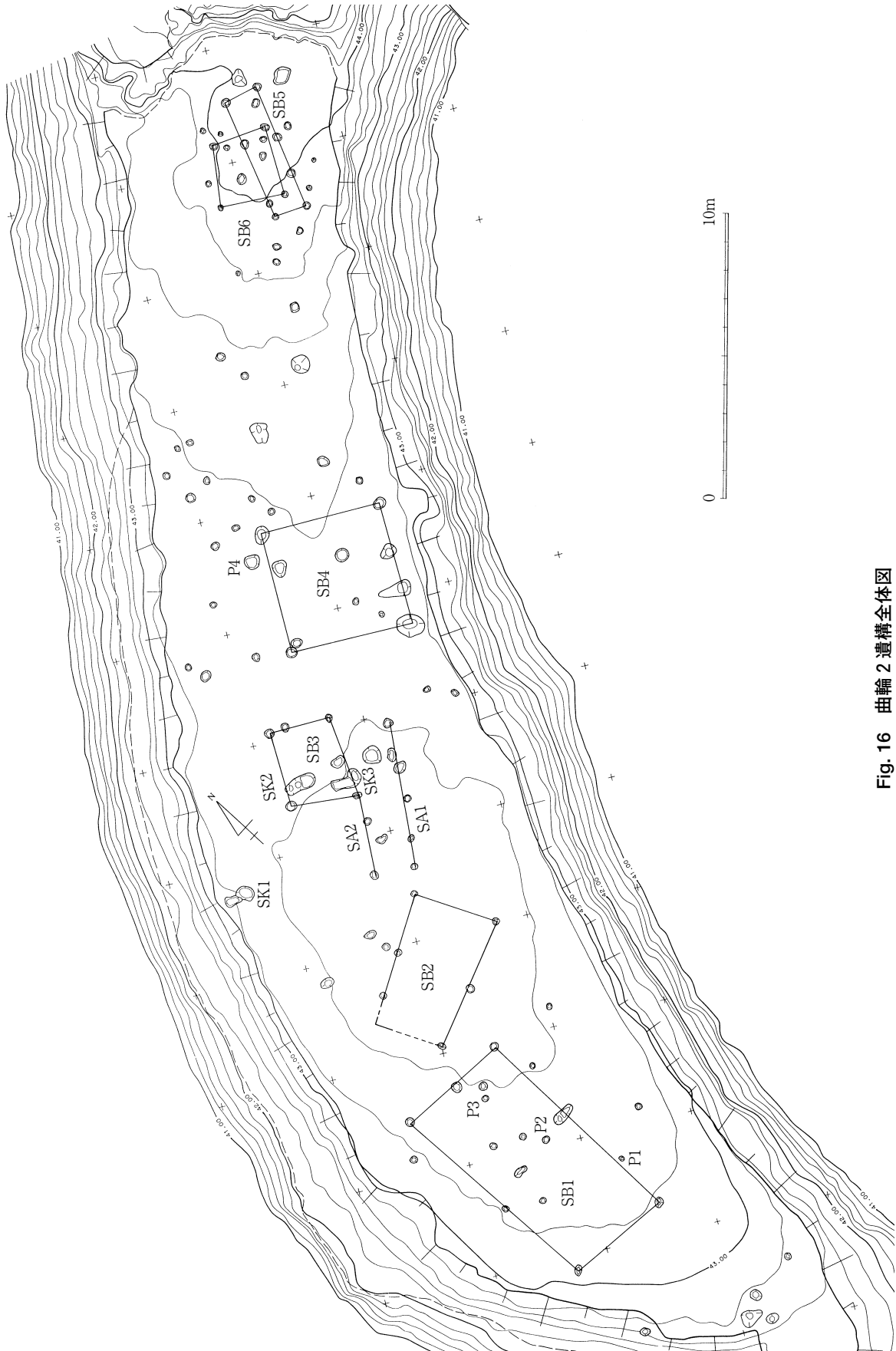


Fig. 16 曲輪 2 遺構全体図

2 曲輪2の遺構

1) SB1

曲輪2の南部I-9・10・11、G-10、H-10・11区の2層下において検出した。建物の規模は1間×2間で、棟方向をほぼ北に方位をとる南北棟である。梁間南側は、3.92m、梁間北側は3.92mを測る。桁行西側列は7.92mで、東側列8.00mを測る。桁行の柱間寸法は、3.36~4.56mである。柱穴の掘り方

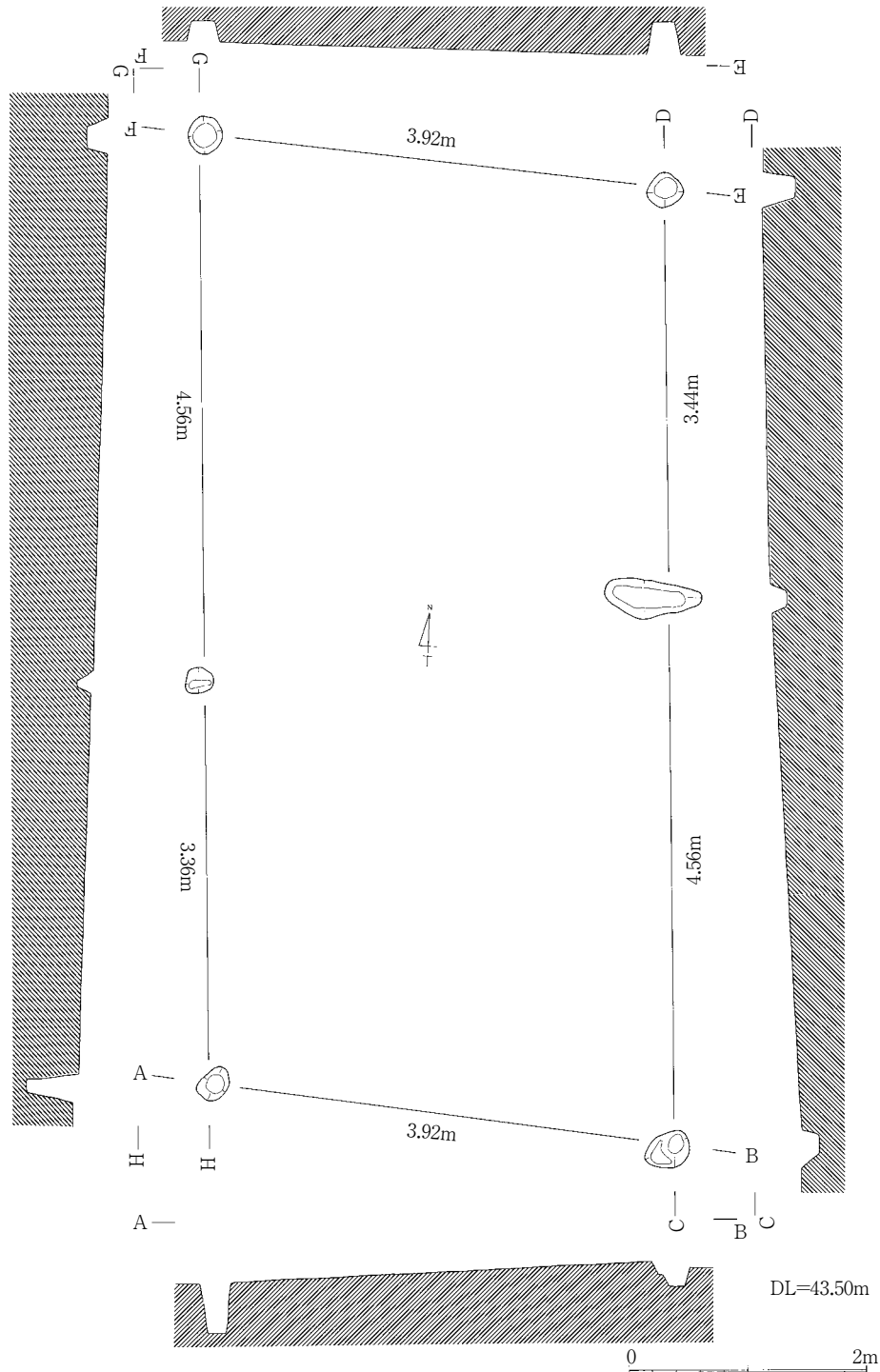


Fig. 17 SB1

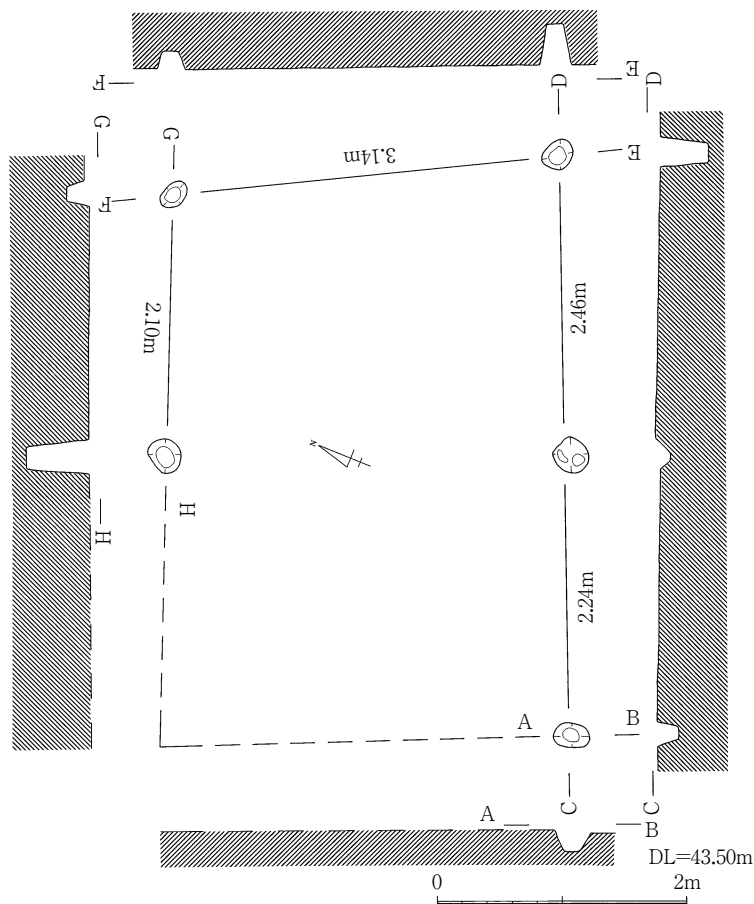


Fig. 18 SB2

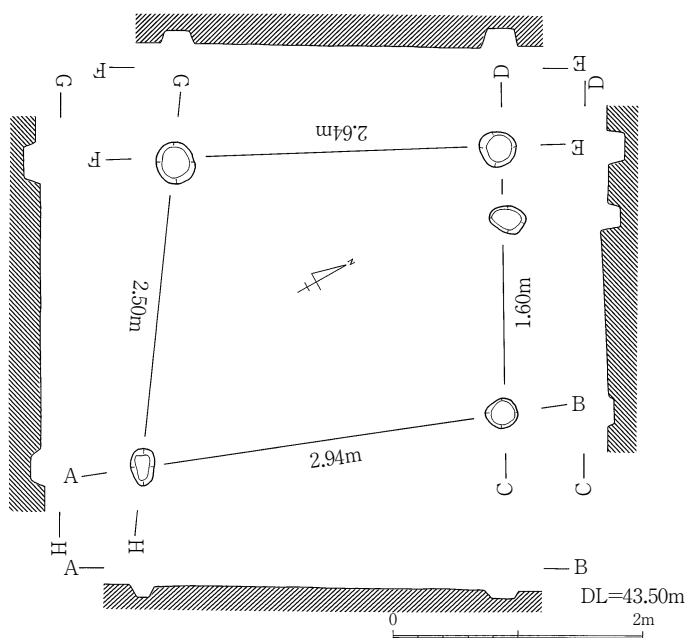


Fig. 19 SB3

は、ほぼ円形と楕円形を呈し円形の直径20~30cmを測り、楕円形の長軸80cm、短軸30cmを測る。検出面からの深さは平均で23cmである。底面の標高は、42.56~43.12mを測る。柱穴の埋土は単層で、褐色土である。出土遺物は認められなかった。

2) SB2

曲輪2の南部SB1の北側に位置する。K-9・10、J-9・10区において2層を除去した段階で検出した。柱穴が1個欠損しているが建物の規模は、1間×2間の建物跡で梁間3.14m、桁行4.70mを測る。棟方向はN-69°-Eを測り大きく東に振っている。柱間寸法は、2.24~2.46mを測る。柱穴の掘り方は、ほぼ円形状を呈し直径20~30cmを測る。検出面からの深さは平均で27cmである。底面の標高は、42.89~43.22mを測る。埋土は単層で、にぶい黄褐色土層である。出土遺物は皆無である。

3) SB3

曲輪2の中央部西側よりに位置する。M-9、L-9区において2層を除去した段階で検出した。建物の規模は、1間×1間の南北棟で南側梁間2.50m、北側梁間2.16mを測る。桁行東側2.94m、西側2.64mを測る方形を呈し、棟方向はN-30°-Eである。柱穴の掘り方は、円形状を呈し柱穴の大きさは直径20~30cmを測り、検出面からの深さは5~16cmを測る。底面

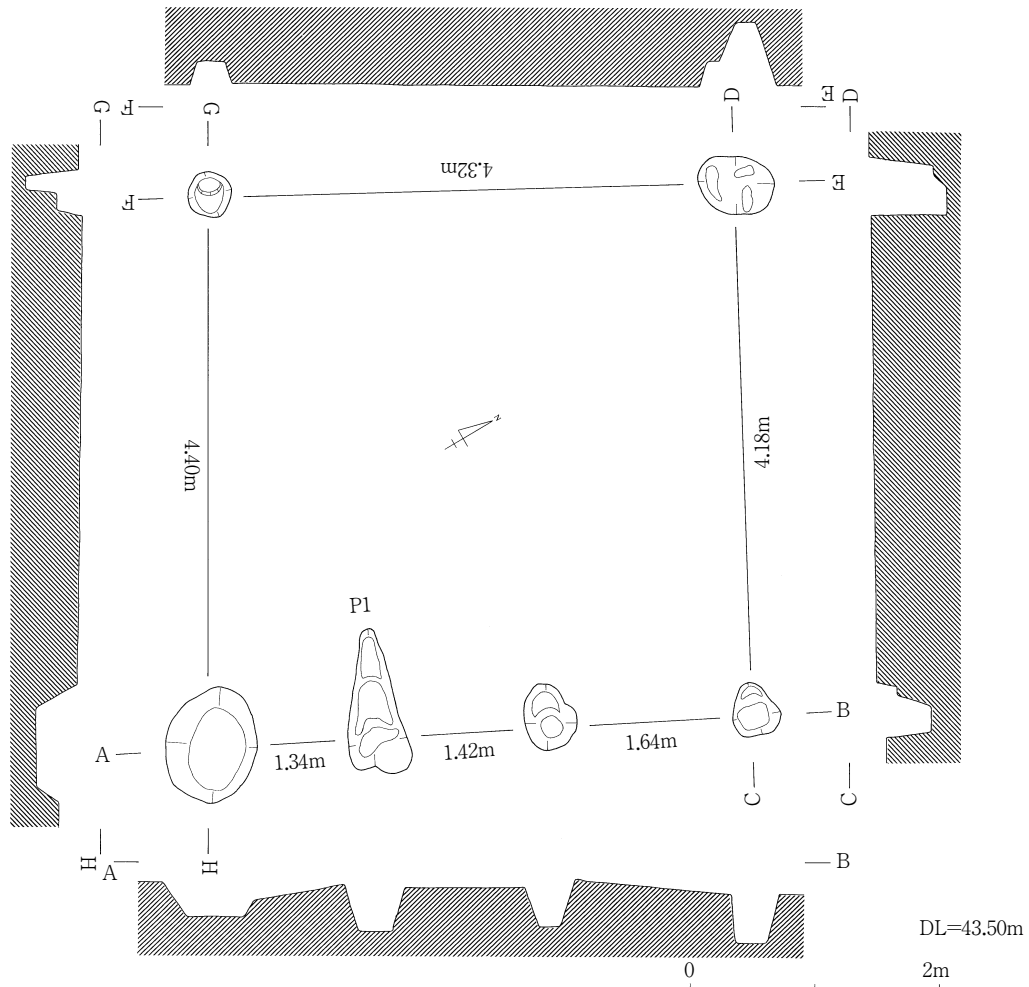


Fig. 20 SB4

の標高は、43.30～43.04mを測る。埋土は1層で、褐色土層である。出土遺物は認められなかった。

4) SB4

曲輪2の中央部東側に位置する。N-9・10、M-9・10区において2層を除去した段階で検出した。建物の規模は1間×1間の方形状の建物であるが、桁行東側列の柱穴はこの建物に伴うと考えられる。梁間は南側4.40m北側4.18m、桁行東側4.32m西側4.40mを測る。棟方向はN-30°-Eである。柱穴の掘り方は、円形状を呈し柱穴の大きさは直径36～90cmを測る。検出面からの深さは、33～62cmを測る。底面の標高は、42.87～42.58mを測る。埋土は1層で、褐色土層である。出土遺物は、P1から備前焼播鉢片が1点出土している。図版番号は59である。

5) SB5

曲輪2の北部に位置する。R-10、Q-10区において2層を除去した段階で検出した。建物の規模は1間×3間の南北棟である。梁間は南側1.30m、北側1.24mを測り、桁行東側4.54m、西側4.48mを測る。棟方向はN-20°-Eである。柱間寸法は、0.5～2.30mと幅がある。柱穴の掘り方は、円形状を呈し柱穴の大きさは直径20～30cmを測る。検出面からの深さは12～37cmを測る。底面の標高は43.68～43.85mを測る。埋土は単層で褐色土である。出土遺物は認められなかった。

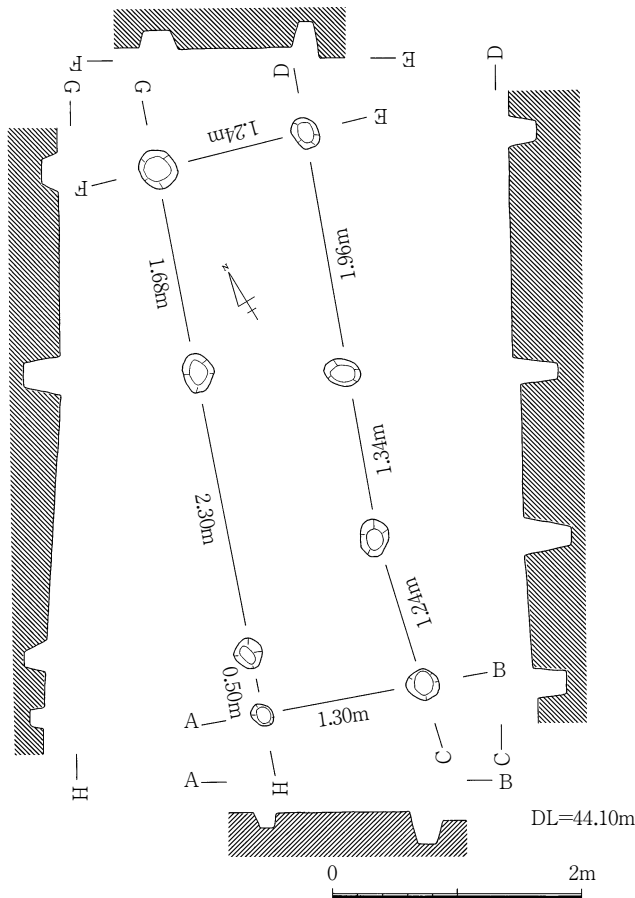


Fig. 21 SB5

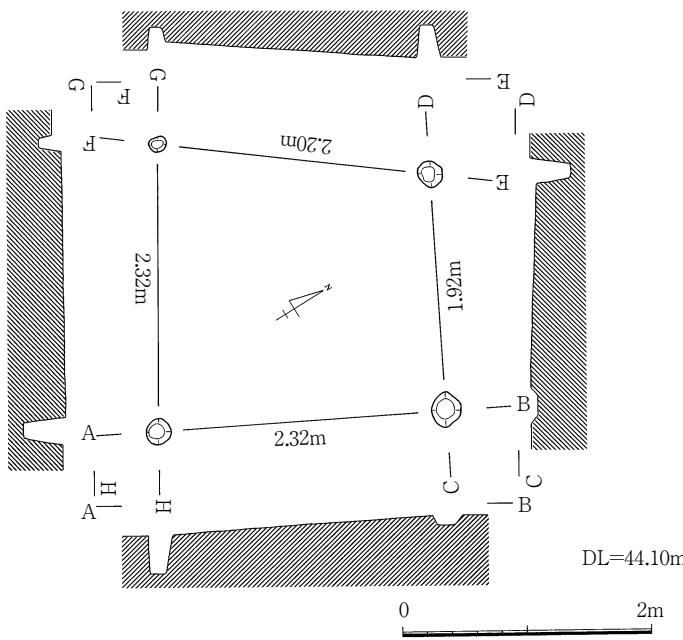


Fig. 22 SB6

6) SB6

曲輪2の北部に位置する。R-9・10、Q-9・10区において2層を除去した段階で検出した。建物の規模は1間×1間の南北棟である。梁間南側は2.32m、北側1.92mを測る。桁行西側2.20m、東側2.32mを測る。棟方向はN-30°-Eである。柱穴の掘り方は、円形状を呈し柱穴の大きさは直径10~30cmを測る。検出面からの深さは7~34cmを測る。底面の標高は43.66~43.93mを測る。埋土は1層で、褐色土である。出土遺物は、認められなかった。

7) SA1

曲輪2の中央部で、SB3の東側に位置し、北東方向にかけて柵列が延びている。4間の規模を持つ柵列で全長5.10mを測り、柱間寸法は0.94m~1.54mを測る。柱穴の掘り方は、円形状と楕円状を呈する。円形は直径20~30cmを測り、楕円状は長径40~50cm、短径20cmを測る。検出面からの深さは、8~26cmを測る。底面の標高は43.14m~43.32mを測る。埋土は1層で、黄褐色土である。出土遺物は認められなかった。

8) SA2

曲輪2の中央部で、SB3の南側SA1の西側に位置する。北東方向にSA1と平行に柵列が延びている。2間の規模を持つ柵列で全長3.00mを測り、柱間寸法は0.94~1.98mである。柱穴の掘り方は、

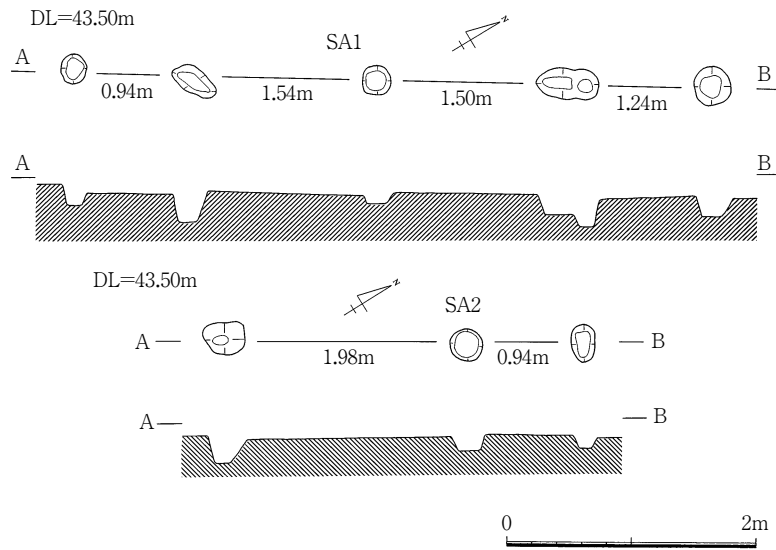
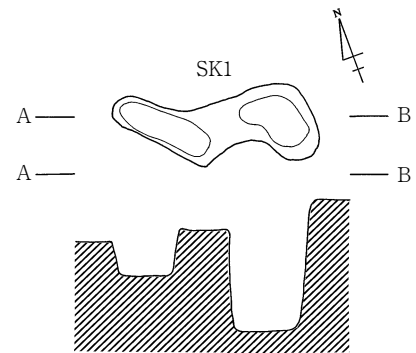


Fig. 23 SA1・2

円形状と楕円状を呈する。円形は直径28cmを測り、楕円状は長径30~37cm、短径20~24cmを測る。検出面からの深さは、10cm~22cmを測る。底面の標高は43.18~43.30mを測る。埋土は単層ののび黄褐色土で、出土遺物は皆無である。

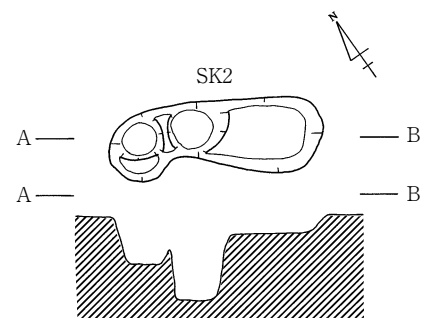
9) SK 1

曲輪2の中央部よりやや南の西端部に位置する。2層除去後、K-8グリッドにおいて検出した。平面プランは、長径1.10m、短径0.24mを測り不正楕円形を呈する。西側に傾斜しているが、検出面からの深さは東側の部分で70cmを測り、断面形は一部ピットに切られているがU字状を呈する。埋土は、褐色土である。埋土中からの遺物は、認められなかった。



10) SK 2

曲輪2の中央部で、SA1の西側に位置する。2層除去後、L-9グリッドにおいて検出した。平面プランは、長径1.10m、短径0.30mを測り不正楕円形を呈する。検出面からの深さは、東部で10cm中央部47cm西部で26cmを測り、断面形はU字状を呈する。底面の標高は42.73~43.10mを測る。埋土は褐色土であり一部焼土化している。出土遺物は皆無である。



11) SK 3

曲輪2の中央部で、SK2の東側に位置する。2層除去後、L-9グリッドにおいて検出した平面プランは、長径1.10m、短径0.32mを測り不正楕円形を呈する。検出面からの深さは、10~41cmを測り、底面はほぼ平面で断面形はU字状を呈する。

底面の標高は、43.30~42.99mを測る。埋土は単層で褐色土である。出土遺物は認められなかった。

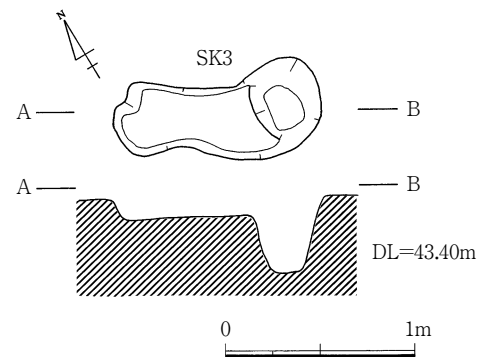


Fig. 24 SK1・2・3

3 曲輪4の遺構

曲輪2の西斜面に、標高36.0m～36.8mの場所に西側に緩く傾斜した帯状の曲輪4が構築されている。曲輪の規模は、南北約6.0m、東西2.5m、面積15㎡を測る。

4 堀切

1) 堀切1

曲輪3の南端部に堀切1が構築されている。小さな堀切で曲輪3を区画するために掘られたようであるが、調査区外が大部分を占めるため詳細は不明である。

2) 堀切2

曲輪2と曲輪3の鞍部に3条の堀切が掘られ、その曲輪3に一番近い堀切である。底部の標高は37.7mを測り、曲輪3との比高差3.3m、上端からは1.6mである。断面U字状に近い底部の幅は約2.7mであり、東西斜面共に標高34mラインまで掘り込みがみられる。底部の埋土は厚さ22cmと浅く、斜面からの崩落土である。

3) 堀切3

連続して3条ある堀切の中間に位置する堀切である。底部の標高は37.7mを測り、上端部との比高差は1.6mである。断面U字状の底部の幅は0.65mを測り、東斜面は標高33mライン、西斜面側は標高32mラインまで掘り込まれている。底部の埋土は厚さ30～75cmを測る。

4) 堀切4

曲輪2の南側に掘られた堀切が堀切4である。底部の標高は38.1mを測り、曲輪2側の傾斜は急斜面をなし、比高差は4.9mを測る。断面U字状の底部の幅は0.75mを測り、東斜面は標高37mラインまで、西側斜面は標高34mラインまで掘り込まれている。底部の埋土は厚さ75cmを測る。

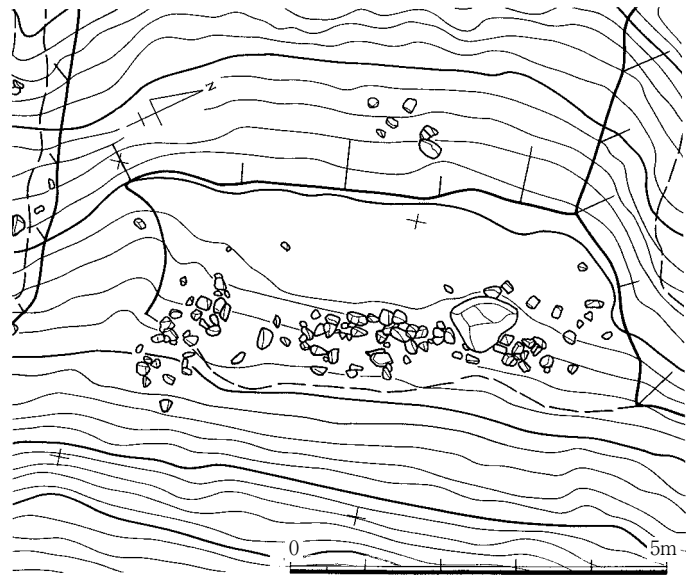


Fig. 25 曲輪4及び集石1 平面図

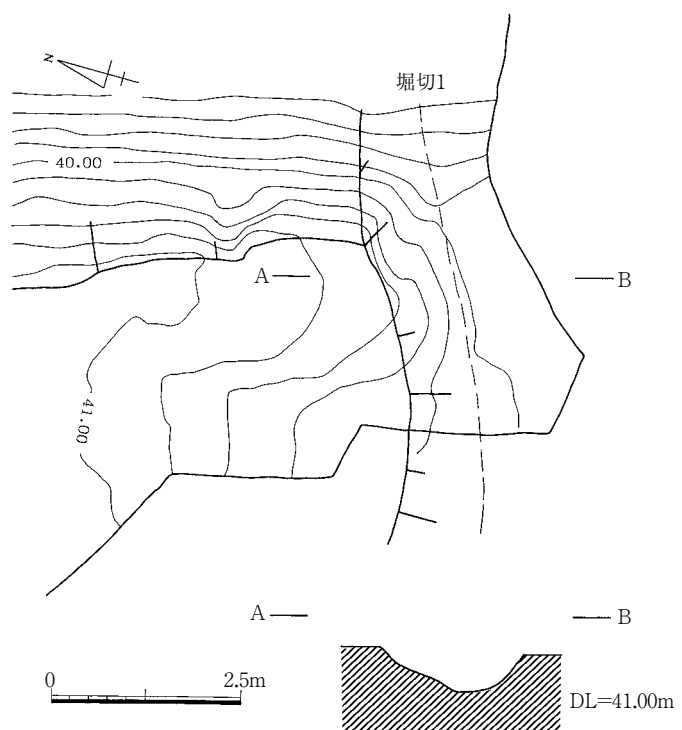


Fig. 26 堀切1 平面図及びエレベーション図

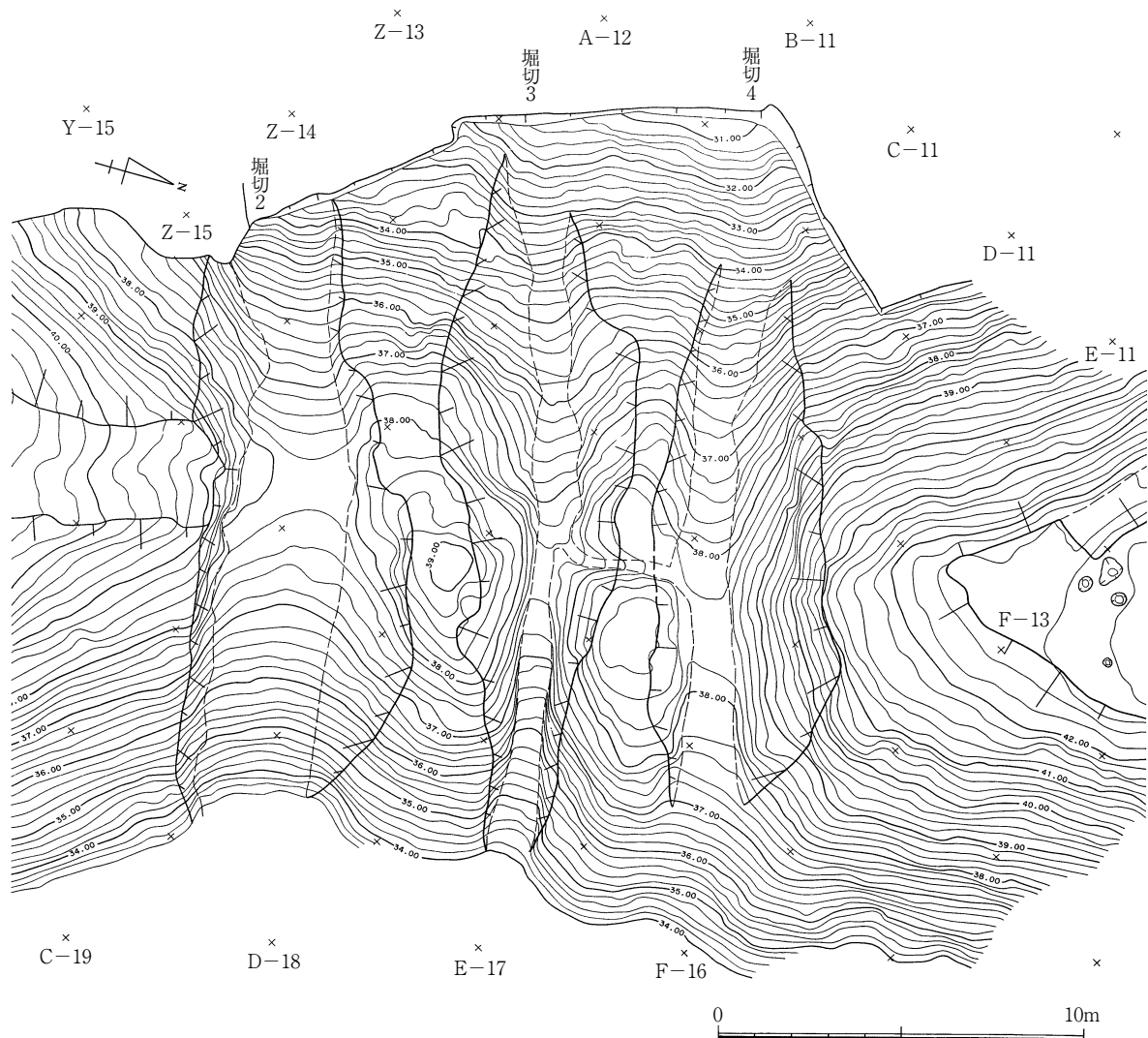


Fig. 27 堀切2・3・4平面図

5 豎堀

1) 豎堀1

曲輪2の西斜面に連続して3条の豎堀が掘られていて、その南端の豎堀である。標高37.4m付近から標高31mまで確認している。それよりも下方は調査区外だが豎堀状の地形は続いている。底部の形状は緩いU字状をなし、上端幅は4mを測る。

2) 豎堀2

3条続いた中間に位置する豎堀である。標高37.4m付近から標高31mまで確認している。それよりも下方は調査区外だが豎堀状の地形は続いている。底部の形状はU字状をなし上端幅は1.5mを測る。

3) 豎堀3

豎堀2から曲輪4を挟んで北側に位置する豎堀で、3条の堀切の中で一番深く掘られている。最深部と上端部の比高差は約1mを測る。底部の形状はU字状を呈し下端幅は約1mを測る。標高37.4mから標高31mまで確認している。それより下方は調査区外だが豎堀状の地形は続いている。

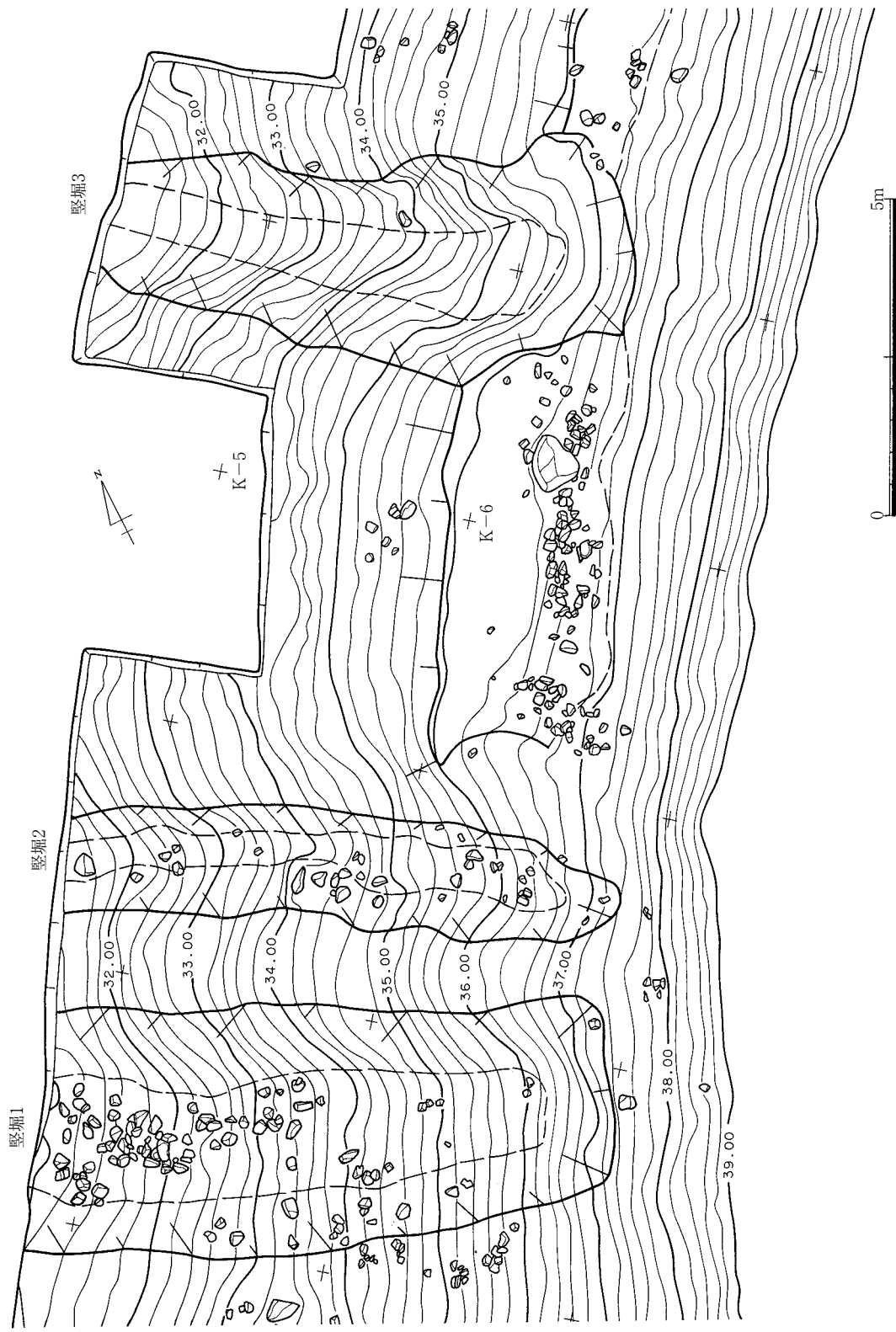


Fig. 28 竖堀 1・2・3 平面图

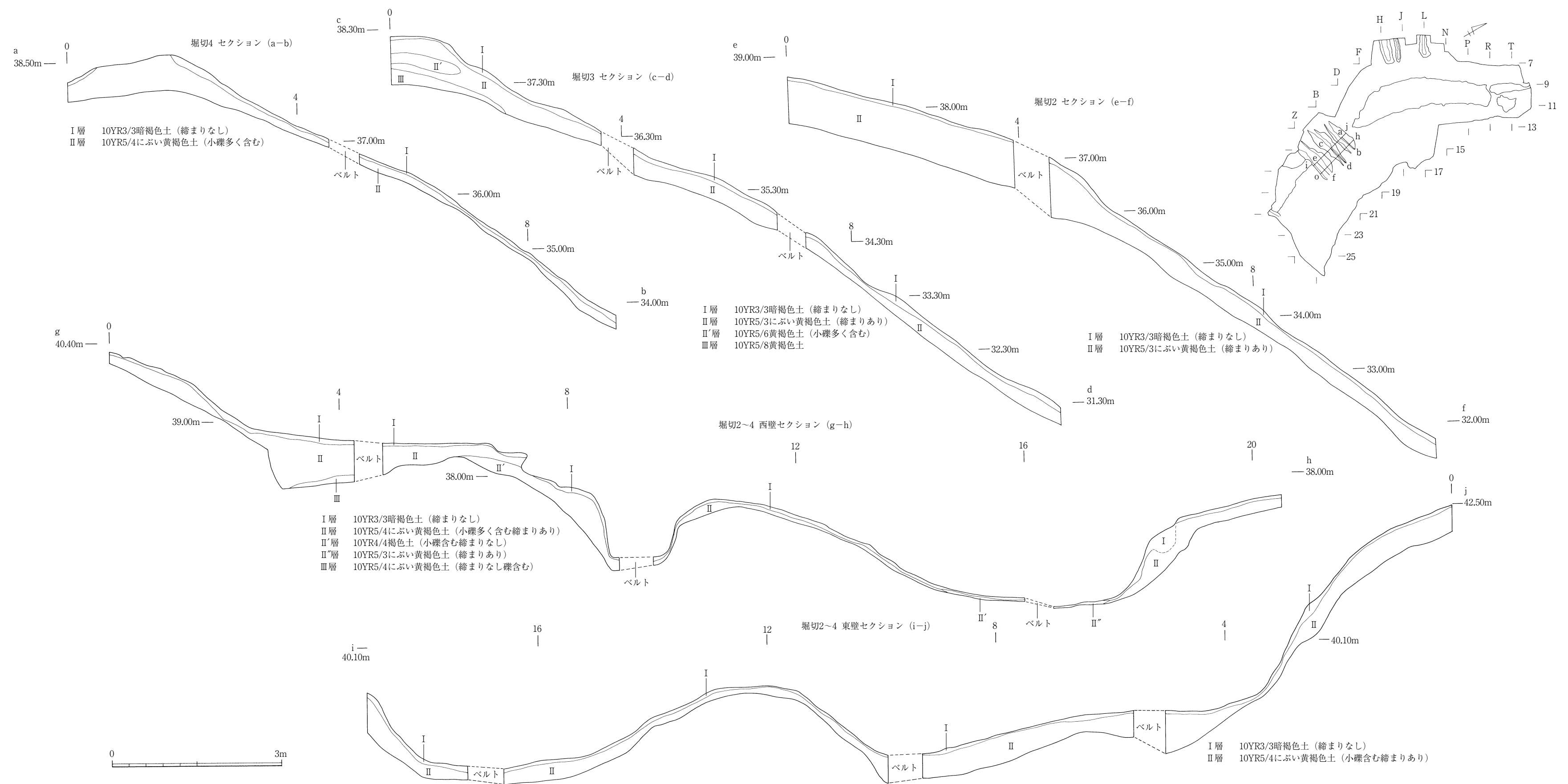


Fig. 29 掘切2・3・4セクション図

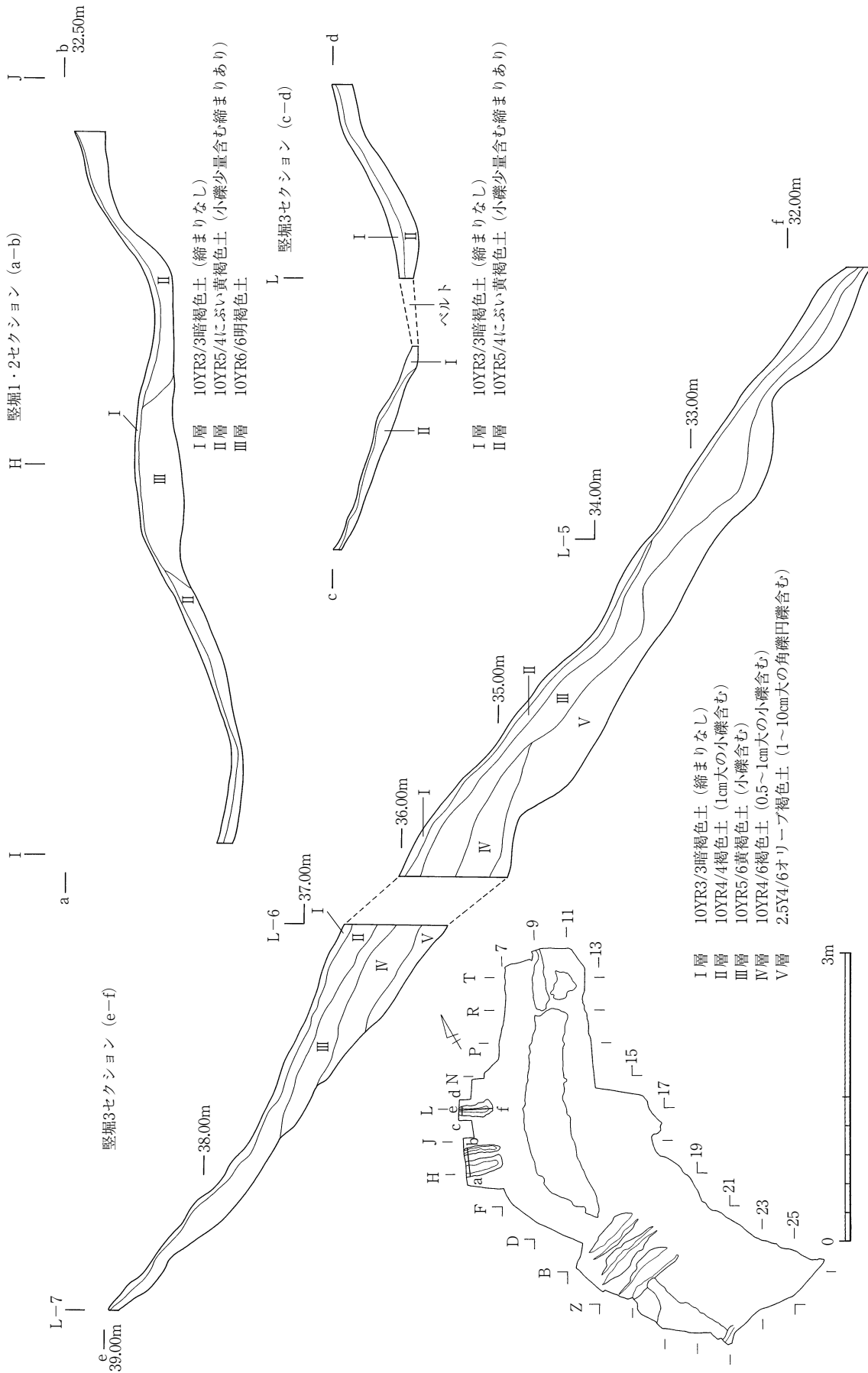


Fig. 30 豎堀セクション図

6 その他の遺構

1) 集石遺構1

曲輪2の西斜面を掘削中に検出した。最大1.2mの方形状の石を中心にして、拳大から人頭大の石が曲輪4に南北方向に並んでいた。曲輪2から落下して曲輪4の平坦部で止まったものと考えられる。豎堀の中にも拳大から人頭大の石が多数認められた。

2) 集石遺構2

曲輪2の東斜面下、Aトレンチの北側で検出した。最大1.6mの台形状の石の周りに、拳大から人頭大の石が斜面を転げ落ちてきたような状態で認められた。これらの石も、何らかの理由で曲輪2から落下して斜面の下に堆積したものと考えられる。(堅田)

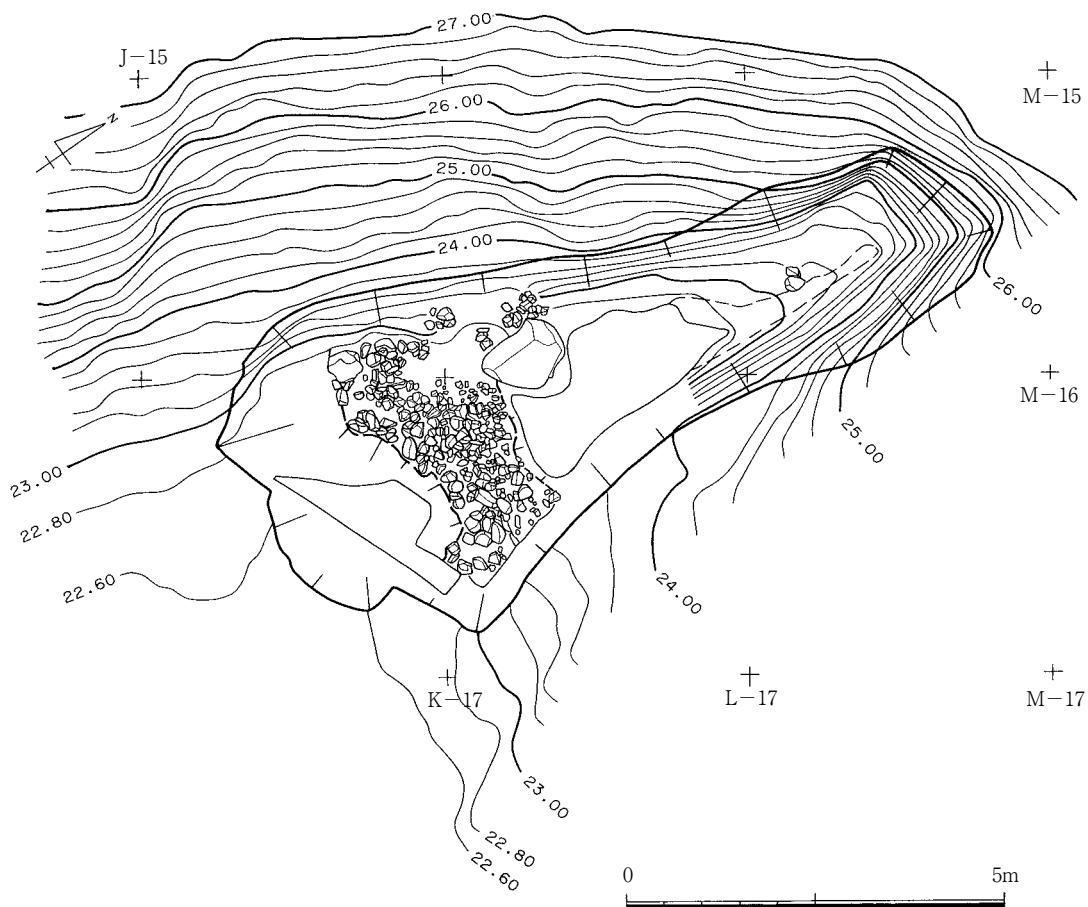


Fig. 31 集石2 平面図

第2節 出土遺物

西本城跡は、小規模な城郭ながら貿易陶磁をはじめ各種の遺物が出土している。県内で発掘調査された小規模城郭と比較しても量的に内容のあるものである。出土遺物の総点数は、1165点である。その内容は、中世遺物が366点で近世遺物が799点である。その中でも貿易陶磁の出土量が最も多く、土師質土器の量を凌いでいる。貿易陶磁は、青磁・青花・白磁が出土しているが、青磁が124点、青花が12点、白磁が11点の内訳で、青磁が最も多く出土している。国産陶器は、備前焼が多く摺鉢がその多くを占めている。土器・陶磁器類以外では土製品で土錘、石製品は砥石、金属製品は釘類や渡来銭などが出土している。今回実測して掲載でき得た土器類の遺物は78点で、出土地点・法量等の詳細は別表出土土器観察表と中世各遺構別出土遺物表を参照願いたい。

1 遺構内出土遺物 (Fig.32)

1) SB4

1は備前焼の播鉢で、底部の一部から口縁部まで残存している。体部はほぼ直線的に立ち上がり口縁部は拡張され内傾して立ち上がる。条線は、6本単位で下から上へ施され、内外面共ロクロナデ調整である。

2) 竪堀1

竪堀1からは、土師質土器片3点と白磁1点、備前焼片4点、土錘2点で計10点が出土している。白磁皿1点と土錘2点が実測可能な遺物である。2は、白磁皿で底部が欠損している。体部は内弯して外上方に立ち上がり口縁でおさまる。外面体部下半まで白濁色釉がかかる。3・4は、小型の土錘である。

3) 竪堀2

竪堀2は、土師質土器片2点、青磁片4点、白磁1点、土錘2点、青花1点の計10点が出土している。実測可能な遺物は、青磁碗片1点と土錘2点である。5・6は小型の土錘である。7は青磁碗の底部で、高台部は削り出しで内面外底共に施釉し、外底は輪状に釉を掻きとり見込に印花文が施される。

4) 竪堀3

竪堀3は、土師質土器片4点、青磁1点、備前焼片2点、金属製品1点の計8点が出土している。実測可能な遺物は、播鉢が1点である。8は体部がほぼ直線的に立ち上がり、7本単位の条線が施され底部外面は未調整である。ロクロによるナデ調整で仕上げられているが、外面に削りの痕跡が残る。

5) 集石2

集石2からは、集石間から比較的多く遺物が出土している。土師質土器5点、青磁1点、備前焼3点、金属製品3点の計13点である。実測可能な遺物は、土師質土器1点と備前焼播鉢が2点である。9は土師質土器片で、体部は内弯して外上方に直線的に立ち上がり、摩耗が著しいが底部回転糸切りが施される。10・11は備前焼播鉢である。10の体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部はやや肥厚し端部は緩く内傾する。内外面ヨコナデ調整である。11は、体部はほぼ直線的に外上方に立ち上がり口縁部は拡張されほぼ上方に直立する。体部外面に重ね焼きによる色調変化が認められ、条線は6本単位で施される。

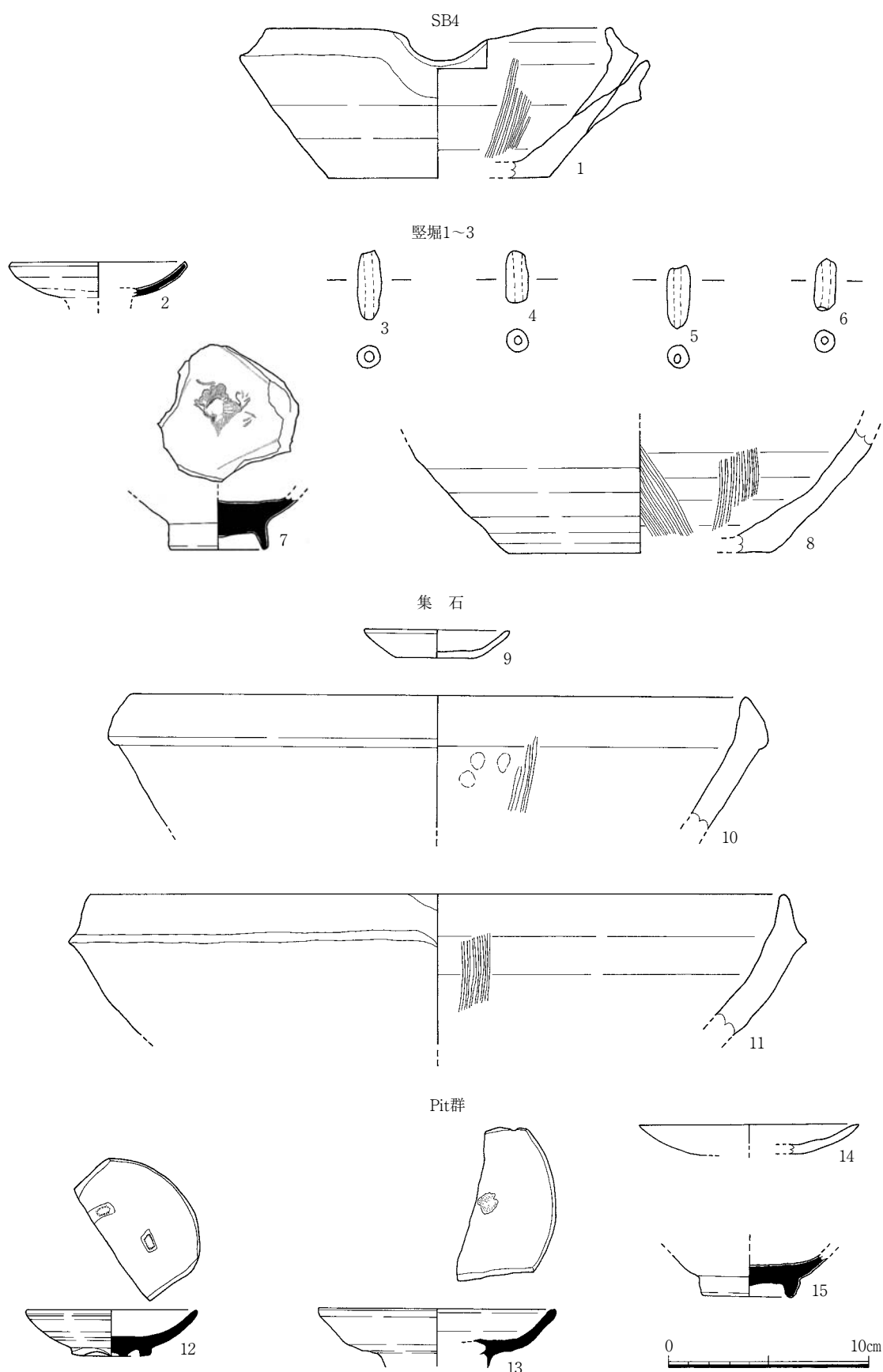


Fig. 32 遺構内出土遺物

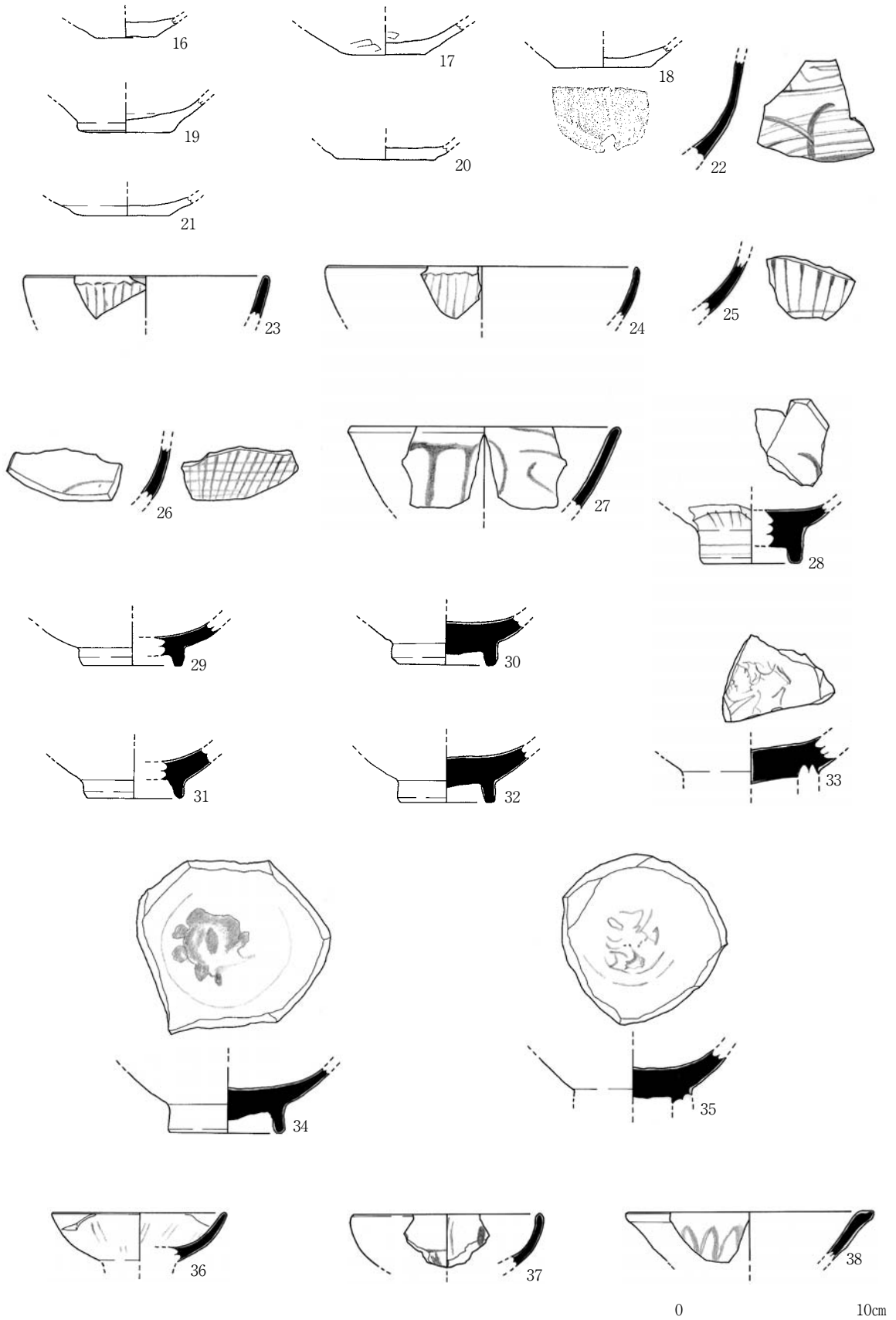


Fig. 33 遺構外出土遺物 1

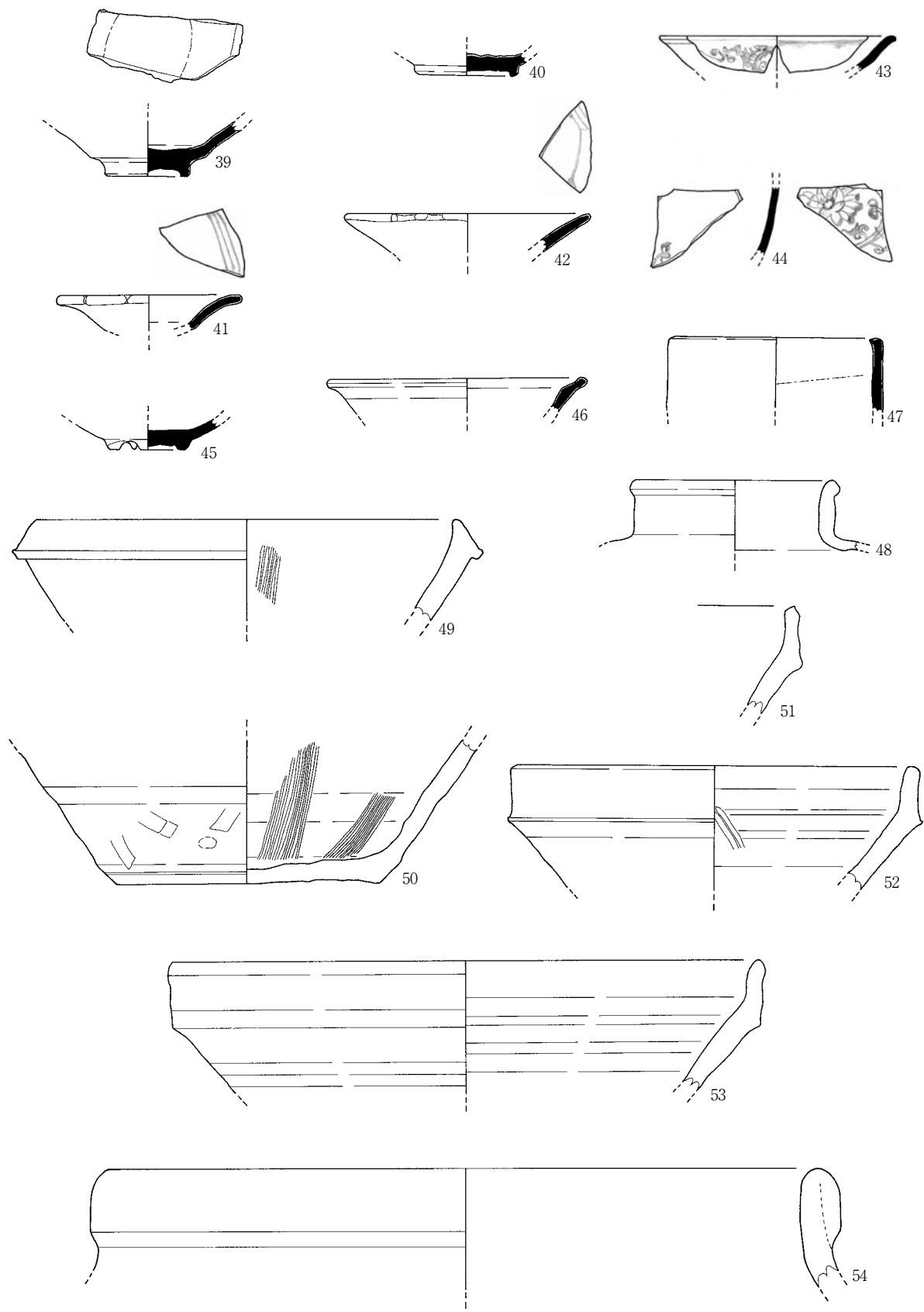


Fig. 34 遺構外出土遺物 2

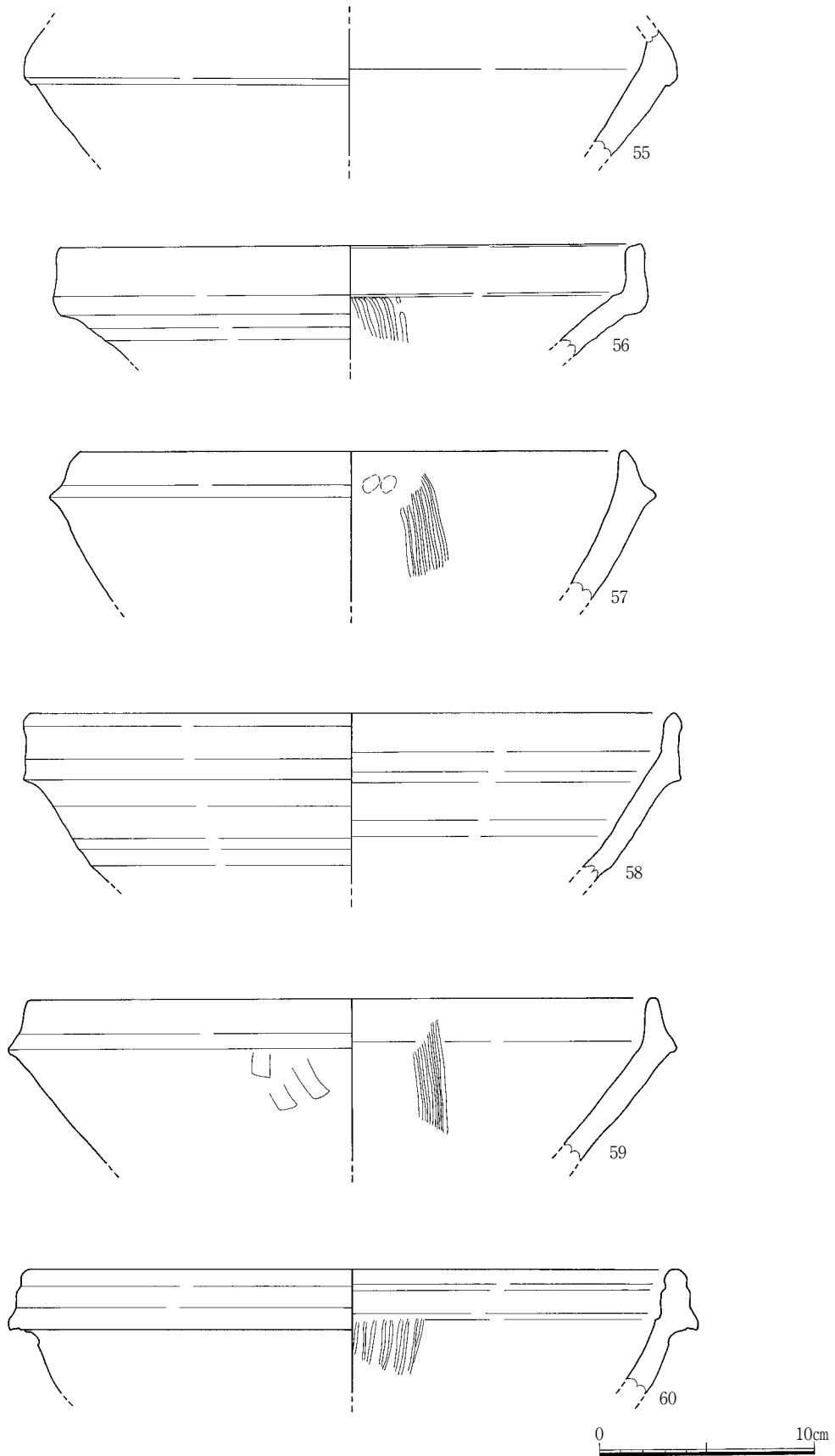


Fig. 35 遺構外出土遺物 3

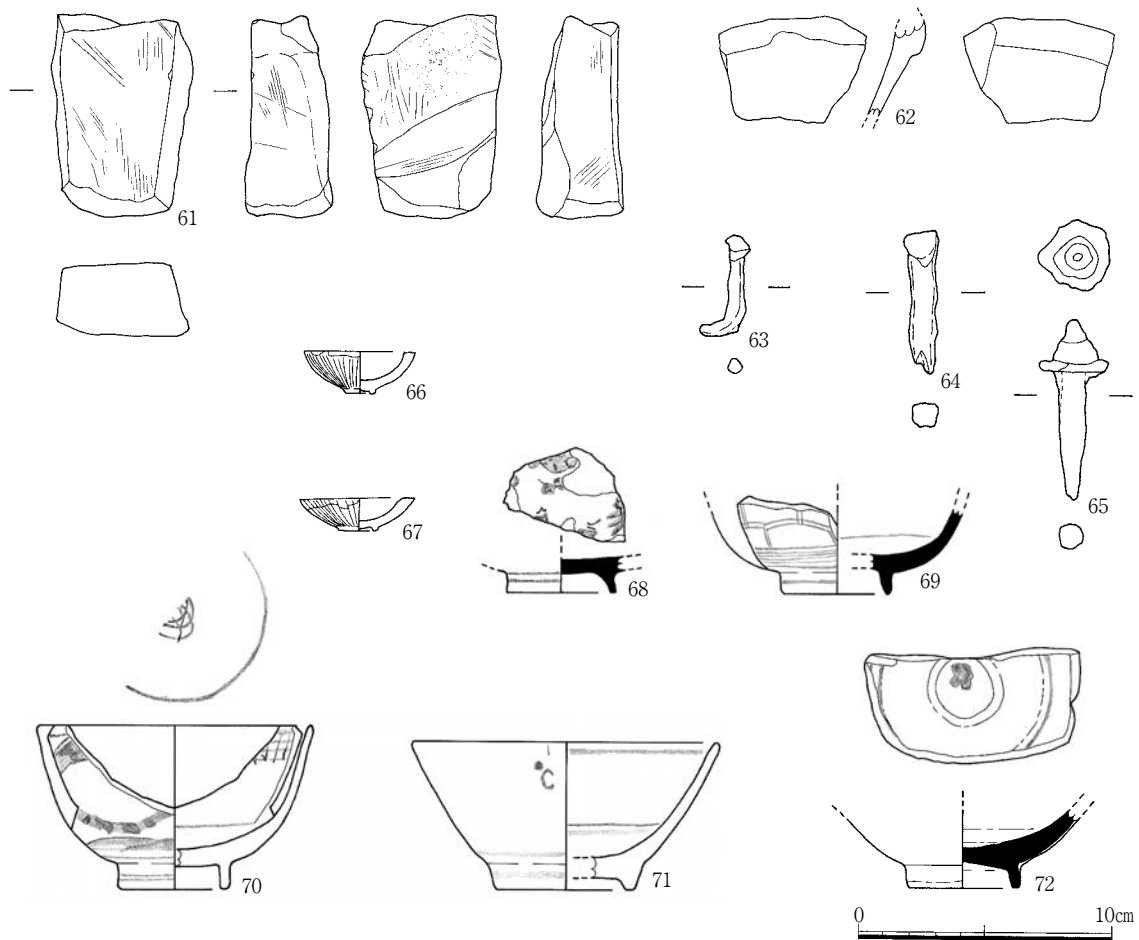


Fig. 36 遺構外出土遺物 4

6) Pit群

P1から12の白磁皿が出土している。高台部がアーチ状を呈し、体部は内湾しておさまる。全面に白濁色釉が施釉され、見込に目跡が残る。P3から13の唐津皿が出土している。体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、端部は丸くおさめ見込に砂目跡が残る。P4から14の土師質土器が出土しており、全体的に磨滅が著しく、体部は内湾気味に外上方に立ち上がる。P2から15の青磁碗が出土し、高台部の釉は畳付けを乗り越えて高台内面まで施釉され、外底部は露胎である。

2 遺構外出土遺物 (Fig.33~37)

1) 土師質土器

土師質土器は、全般的に磨滅が著しく底部破片が多いため器種の判別が困難な製品が多い。実測可能なものは、16から21の6点である。16は小皿で、17から21までは皿と考えられる。18・19・21の底部外面には、底部に底部回転糸切りが残る。色調は全体的に浅黄橙色で、胎土は軟質である。

2) 青磁

西本城跡の出土遺物の中で、貿易陶磁の青磁が最も多く出土している。22から35までは青磁の碗である。22は、体部外面にヘラ状工具による蓮弁文と雷文帯が施され、内外面共に貫入が入る。23

から26までは体部から口縁部の破片であるが、外面にヘラ状工具による線描きの細蓮弁文や、丸ノミ状工具による細蓮弁文が施されている。27は、外面にヘラ状工具による間隔の広い蓮弁文が施されている。28から35は碗の底部破片である。28は、釉が高台部畳付けを乗り越え内面まで施釉され、外底部は露胎である。高台部外面に浅い一本の沈線がある。29は、底部破片で外底部は露胎である。高台は外面を斜めに削り畳付けを狭くしており露胎で、内外面に貫入がはいる。30は、底部破片で外底は露胎。高台外面を斜めに削る。貫入はない。31は、碗の底部破片である。外底は露胎で釉は畳付けを乗り越えて高台内面まで施釉されている。器壁が厚く内外面に薄い貫入がはいる。32は、底部破片で外底部及び畳付けは露胎で、釉は高台内面まで施釉される。内外面に密な貫入がはいる。33は、底部破片で高台は欠損している。外底は輪状に釉を掻きとり内面に貫入がはいる、器壁が厚い。34は、釉が畳付けを乗り越え高台内面まで施釉され、外底部は露胎である。内外面共に密な貫入がはいる。35は、底部破片で高台部が破損しているが、内外面共に施釉される。高台部は露胎である。胎土に酸化と還元の状態が見られる。

36から42までは青磁の皿である。36は、小振りの皿で体部は内弯気味に立ち上がり口縁部は外反しない。37は、体部が内弯気味に外上方に立ち上がり、端部は丸くおさめる。外面下端に丸ノミ状工具による蓮弁状の文様が施される。38は、口縁部が外反する皿で、片切彫りの蓮弁文が施されている。39から42までは青磁稜花皿である。39は、底部破片で見込の釉を輪状に掻きとる。高台外面まで施釉され外底部は露胎で、内外面共に貫入がはいる。40は、外底部が露胎である。41は、口縁部破片で、内面に櫛描きで波状の文様が描かれる。内外面共に貫入がはいる。42の口縁端部は稜花状に刻んであり内面にヘラ描きによる沈線を持つ。

47は青磁の香炉で、口縁端部は内側にやや肥厚し、釉は外面と口縁部の内面に施釉される。

3) 青花

43は、外面上部に青花纏枝蓮紋が施され、内面口縁部に界線。口縁は外反する。44は、外面に青花纏枝蓮紋が施されている。内面にも施文の一部が認められる。貫入はない。

4) 白磁

45は、高台部がアーチ状を呈し、釉は畳付け及び底部外面まで施釉される。

5) 瀬戸・美濃系陶器

46は、灰釉折縁皿の口縁部破片であるが、口縁部で屈曲し大きく外反する。

6) 備前焼

48は壺で、口縁部は上方に立ち上がり小玉縁を呈する。54は甕で、口縁部は楕円形を呈し、折り曲げて玉縁内外面共ロクロナデ調整である。

49～53、55～59は播鉢である。49は、体部がほぼ直線的に外上方に立ち上がり、口縁部はやや肥厚し端部は緩く内傾する。50は、7本単位の条線が下から上に施され、底部は未調整である。51～53は、口縁部が拡張されほぼ直立して上方に立ち上がる。端部は丸くおさめる。内外面共にロクロナデ。55・57は、体部が直線的に立ち上がり口縁部は内傾するものでやや古い様相を持つものである。56・58は、体部が外上方に直線的に立ち上がり、口縁部は拡張され上方に直立して立ち上がる。内外面ロクロナデ調整である。57は、体部がほぼ直線的に外上方に立ち上がり、口縁部はやや肥厚し

端部は緩く内傾する。59は、体部が直線的に外上方に立ち上がり、口縁部はやや肥厚し端部は緩く内傾する。

7) 石製品

砥石片が10点出土しているが、実測可能なものは61の1点のみである。上端部を欠損しているが、断面方形状を呈し上面と両側面を使用しており砂岩製である。残存長8.0cm、幅5.2cm、厚さ2.9cm、重量202gである。

8) 金属製品

金属製品は50片出土しているが、古銭以外実測可能なものは少ない。62は、鉄鍋で口縁部の一部と考えられる。体部から直線的に外上方に立ち上がり、口縁部が肥厚している。残存高が、4.2cmを計る。63・64は釘類で、63は、断面が円形で下端部が曲がっている。全長4.0cm、幅0.6cm、厚さ0.6cm、重量3gである。64は下端部が欠損している。断面方形状で、全長5.6cm、幅1.0cm、厚さ1.0cm、重量10gである。65は不明鉄製品で、全長7.1cm、幅0.9cm、厚さ0.9cm、重量29gである。

渡来銭は、宋から明の時代にかけての太平通宝（976）、元豊通宝（1078）、洪武通宝（1368）、永楽通宝（1408）が出土しており、日本の古銭として寛永通宝が1枚出土している。尚詳細は古銭計測表を参照願いたい。

9) 近世陶磁器

近世陶磁器は、肥前産・瀬戸産の白磁紅皿・碗類と備前産の播鉢類が出土している。60は、備前産の近世播鉢で口縁部が拡張され外面に2条の凹線と体部内面には全面に荒い条線が施される。66・67は肥前産の紅皿である。外面は型押しによる放射状文で、白濁色の釉が高台部を除いて施される。68は、肥前産の染付と考えられるが貿易陶磁の可能性もある。全面に釉が施され、見込みの文様は不明である。高台外面に2条の界線が施され、畳付けのみ無釉である。69・70・72は、肥前産の碗で腰部は丸く体部は直線的に立ち上がるタイプである。69は外面に網目文、70は草花文が描かれる。72は、見込み輪状に削られ見込み中心に五弁花の崩れがスタンプされる。71は瀬戸産の陶胎染付の碗で、広東形のタイプで体部は直線的に立ち上がる。（松田）

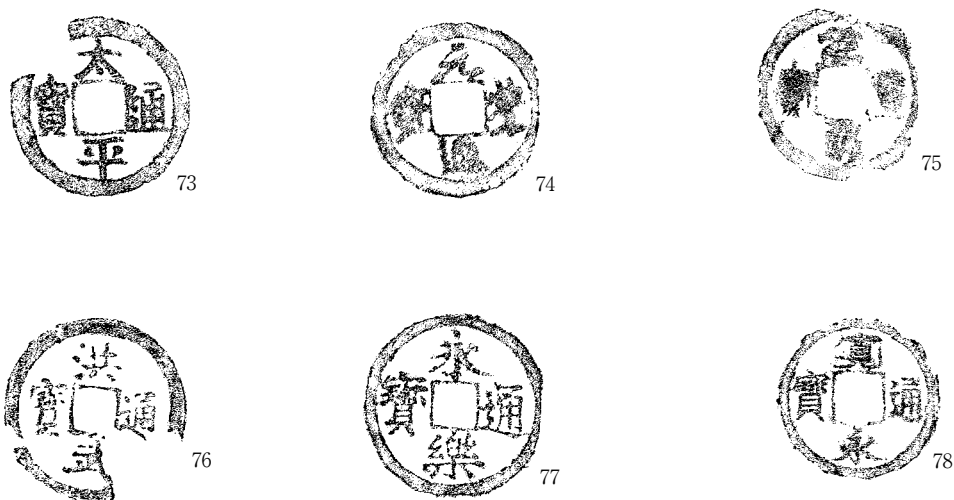


Fig. 37 古銭拓本（実寸大）

Tab. 2 出土遺物観察表1

挿図番号	出土遺構 出土曲輪	出土地点	種別	器種	法量			特徴 (形態・手法等)	色調		
					口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)		内面	外面	断面
1	SB4	N-10 (P中)	備前	播鉢	(17.1)	(7.5)	(11.2)	体部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁部は拡張され内傾して立ち上がる。条線は6本単位で下から上へ。内外面共口コナデ。	2.5YR4/3 にぶい赤褐	2.5YR5/4 にぶい赤褐	N6/1 灰
2	堅掘1	J-6	白磁	皿	(8.8)	(1.8)		体部は内湾して外上方に立ち上がり口縁でおさまる。外面体部下半まで釉がかか る。	7.5Y8/1 灰白	7.5Y8/1 灰白	7.5Y8/1 灰白
7	堅掘2	J-6	青磁	碗	—	(2.6)	(4.7)	高台は削り出しで内面外底共に施釉し、 外底は輪状に釉を掻きとる。見込に印花 文。	7.5Y4/3 暗オリーブ	7.5Y4/3 暗オリーブ	10YR7/1 灰白
8	堅掘3	M-5	備前	播鉢	—	(6.6)	(13.2)	体部はほぼ直線的に立ち上がる。7本単 位の条線。底部外面は未調整。	5Y6/1 灰	5Y6/1 灰	5Y6/1 灰
9	集石2	L-16	土師質 土器	皿	(7.2)	1.4	(4.0)	体部は内湾して外上方に立ち上がり底部 回転糸切り。摩耗が著しい。	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	
10	集石2	L-16	備前	播鉢	(30.7)	(6.6)	—	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口 縁部はやや肥厚し端部は緩く内傾する。 内面コナデ。	5YR5/3 にぶい赤褐	5YR6/4 にぶい橙	7.5YR5/1 褐灰
11	集石2	K-16	備前	播鉢	(34.6)	(7.0)	—	体部はほぼ直線的に外上方に立ち上がり 口縁部は拡張されほぼ上方に直立する。 体部外面に重ね焼きによる色調変化が認 められる。条線は6本単位。	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR4/2 灰黄褐	10YR4/2 灰黄褐
12	Pit 1	H-11	白磁	皿	(8.5)	2.3	4.0	高台部がアーチ状を呈し、体部は内湾し ておさまる。全面に施釉され、見込に目 跡が残る。	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄
13	Pit 3	I-10	近世唐 津	皿	(12.0)	(2.9)	—	体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、 端部は丸くおさまる。見込に目跡。	5Y7/2 灰白	5Y7/2 灰白	10YR7/2 灰白
14	Pit 4	N-9	土師質 土器	皿	(11.0)	(1.5)	—	体部は内湾気味に外上方に立ち上がる。 磨減が著しい。	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白
15	Pit 2	I-10	青磁	碗	—	(2.2)	4.4	釉は墨付けを乗り越えて高台内面まで施 釉される。外底部は露胎である。	5GY6/1 オリーブ灰	5GY6/1 オリーブ灰	5Y7/1 灰白
16	曲輪2	N-10	土師質 土器	小皿	—	(1.0)	3.1	磨減が著しい。	7.5Y7/4 にぶい橙	7.5Y7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙
17	—	—	土師質 土器	小皿	—	(1.6)	4.5	皿底部磨減が著しい。	2.5Y7/3 浅黄	2.5Y7/3 浅黄	2.5Y7/3 浅黄
18	—	ATR	土師質 土器	小皿	—	(1.1)	(5.0)	底部回転糸切り。摩耗が著しい。	2.5YR6/6 橙	2.5YR6/6 橙	2.5YR6/6 橙
19	西斜面	O-11	土師質 土器	皿	—	(1.7)	5.0	体部は内湾して外上方に立ち上がる。底 部は回転糸切り。磨減が著しい。	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙
20	—	排土	土師質 土器	皿	—	(0.85)	(5.0)	皿底部磨減が著しい。	2.5Y7/4 浅黄	2.5Y7/4 浅黄	2.5Y7/4 浅黄
21	西斜面	R-7	土師質 土器	皿	—	(0.95)	4.5	底部回転糸切り。磨減が著しい。	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙
22	西斜面	L-15	青磁	碗	—	(5.0)	—	体部外面にヘラ状工具による蓮弁文と雷 文帯が施される。内外面共に貫入あり。	2.5GY6/1 オリーブ灰	2.5GY6/1 オリーブ灰	10YR7/2 にぶい黄橙

() は復元値又は残存値

Tab. 3 出土遺物観察表 2

挿図番号	出土遺構 出土曲輪	出土地点	種別	器種	法量			特徴 (形態・手法等)	色調		
					口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)		内面	外面	断面
23	東斜面	O-6	青磁	碗	(12.4)	(2.2)	—	口縁部破片で外面に細蓮弁文が、丸ノミ状工具で施されている。貫入はない。	2.5GY6/1 オリーブ灰	2.5GY6/1 オリーブ灰	7.5Y7/1 灰白
24	曲輪2	L-9	青磁	碗	(13.8)	(2.7)	—	口縁部破片で、外面に線描きの細蓮弁文が描かれる。山形の剣先を持つ。	5Y5/2 灰オリーブ	5Y5/2 灰オリーブ	5Y7/1 灰白
25	—	—	青磁	碗	—	(3.1)	—	体部外面にヘラ状工具による細蓮弁文が施される。内外面共に貫入あり。	10Y6/2 オリーブ灰	10Y6/2 オリーブ灰	7.5Y8/1 灰白
26	東斜面	H-8	青磁	碗	—	(2.7)	—	体部外面にヘラ状工具による細蓮弁文が施され、内面にヘラで削ったような一条の沈線を持つ。	5Y5/3 灰オリーブ	5Y5/3 灰オリーブ	5Y7/1 灰白
27	—	排土中	青磁	碗	(13.65)	(4.2)	—	外面に丸ノミ状工具による間隔の広い細蓮弁文が施されている。内面の文様は不明。	10Y6/2 オリーブ灰	10Y6/2 オリーブ灰	2.5Y8/2 灰白
28	東斜面	H-6	青磁	碗	—	(3.0)	(5.0)	釉は高台部畳付けを乗り越え内面まで施釉される。外底部は露胎である。高台部外面に浅い一本の沈線がある。	7.5Y5/2 灰オリーブ	7.5Y4/2 灰オリーブ	7.5Y8/1 灰白
29	曲輪2	J-8	青磁	碗	—	(2.2)	(5.0)	底部破片で外底部は露胎である。高台は外面を斜めに削り畳付けを狭くしており露胎である。内外面に貫入がはいる。	2.5GY6/1 オリーブ灰	2.5GY6/1 オリーブ灰	7.5Y6/1 灰
30	集石	L-16	青磁	碗	—	(2.55)	4.6	底部破片で外底は露胎。高台外面を斜めに削る。貫入はない。	7.5GY6/1 緑灰	7.5GY6/1 緑灰	10YR7/1 灰白
31	—	ATR	青磁	碗	—	(2.55)	(4.7)	碗の底部破片である。外底は露胎で釉は畳付けを乗り越えて高台内面まで施釉されている。器壁が厚く内外面に薄い貫入がはいる。	10YR5/2 オリーブ灰	10YR5/2 オリーブ灰	5Y7/1 灰白
32	曲輪4	N-6	青磁	碗	—	(2.9)	4.8	底部破片で外底部及び畳付けは露胎である。釉は高台内面まで施釉される。内外面に密な貫入がはいる。	10Y5/2 オリーブ灰	10Y5/2 オリーブ灰	10Y5/1 オリーブ灰
33	曲輪1a	V-9	青磁	碗	—	(2.3)	—	底部破片で高台は欠損している。外底は輪状に釉を掻きとる。内面に貫入がはいり、器壁が厚い。	5GY5/1 オリーブ灰	5GY5/1 オリーブ灰	7.5Y7/1 灰白
34	東斜面	O-6	青磁	碗	—	(3.3)	5.6	釉は畳付けを乗り越え高台内面まで施釉される。外底部は露胎である。内外面共に密な貫入がはいる。	10Y6/2 オリーブ灰	10Y6/2 オリーブ灰	2.5Y7/1 灰白
35	々	H-4	青磁	碗	—	(2.8)	—	底部破片で高台部が破損しているが、内外面共に施釉される。高台部は露胎である。胎土に酸化と還元の状態が見られる。	2.5Y6/3 にぶい黄	2.5Y6/3 にぶい黄	2.5Y6/1 黄灰
36	—	ATR	青磁	皿	(9.0)	(2.5)	—	小振りの皿で底部は欠損している。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反しない。	10Y6/2 オリーブ灰	10Y6/2 オリーブ灰	10Y7/1 灰白
37	—	排土中	青磁	皿	(9.55)	(3.05)	—	体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。端部は丸くおさめる。外面下端に丸ノミ状工具による細蓮弁文が施される。	10Y5/2 オリーブ灰	10Y5/2 オリーブ灰	10YR7/1 灰白
38	曲輪4	N-6	青磁	皿	(12.6)	(2.5)	—	口縁部が外反する皿で、外面に山形の剣先を持つ片切彫の蓮弁文が施されている。	7.5GY6/1 緑灰	7.5GY6/1 緑灰	7.5Y8/1 灰白
39	々	K-6	青磁	皿	—	(2.8)	(4.2)	底部破片で見込の釉を輪状に掻きとる。高台外面まで施釉され外底部は露胎である。内外面共に貫入がはいる。	5Y4/2 灰オリーブ	5Y4/2 灰オリーブ	5Y7/1 灰白
40	東斜面	E-11	青磁	皿	—	(1.2)	(4.65)	削り出し高台で施釉。外底部は露胎である。	7.5Y5/2 灰オリーブ	7.5Y5/2 灰オリーブ	10YR7/1 灰白

() は復元値又は残存値

Tab. 4 出土遺物観察表3

挿図番号	出土遺構 出土曲輪	出土地点	種別	器種	法量			特徴 (形態・手法等)	色調		
					口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)		内面	外面	断面
41	曲輪4	M-6	青磁	皿	(9.3)	(1.85)	—	稜花皿口縁部破片で、内面に櫛描きで波状の文様が描かれる。内外面に貫入がはいる。	7.5Y5/2 灰オリーブ	7.5Y5/2 灰オリーブ	5Y6/1 灰
42	ク	K-6	青磁	皿	(12.4)	(2.0)	—	稜花皿口縁部破片で、端部は稜花状に刻んであり内面にヘラ描きによる沈線を持つ。	5Y5/2 灰オリーブ	5Y5/2 灰オリーブ	5Y7/1 灰白
43	—	ATR	染付	皿	(12.0)	(1.8)	—	外面上部に青花纏枝蓮紋が施され、内面口縁部に界線。口縁は外反する。	5GY8/1 灰白	5GY8/1 灰白	7.5Y8/1 灰白
44	西斜面	G-14	染付	碗	—	(3.45)	—	外面に青花纏枝蓮紋が施されている。内面にも施文の一部が認められる。貫入はない。	5GY8/1 灰白	5GY8/1 灰白	2.5GY8/1 灰白
45	東斜面	A-18	白磁	皿	—	(1.6)	3.6	高台部がアーチ状を呈し、軸は壘付け及び底部外面まで施釉される。	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR7/1 灰白	10YR7/1 灰白
46	曲輪2	M-10	瀬戸美濃	折縁皿	(13.8)	(1.8)	—	灰釉折縁皿。	5Y6/3 オリーブ黄	5Y6/3 オリーブ黄	10YR7/3 にぶい黄橙
47	曲輪2	P-10	青磁	香炉	(10.4)	(3.8)	—	口縁端部は内側にやや肥厚し、軸は外面と口縁部の内面に施釉される。	5GY7/1 明オリーブ灰	5GY7/1 明オリーブ灰	2.5Y7/1 灰白
48	—	ATR	備前	壺	(10.0)	(3.6)	—	口縁部は上方に立ち上がり小玉縁を呈する。	10YR5/1 褐灰	2.5YR4/3 にぶい赤褐	10YR5/1 褐灰
49	曲輪4	ATR	備前	擂鉢	(21.6)	(5.3)	—	体部はほぼ直線的に外上方に立ち上がり、口縁部はやや肥厚し端部は緩く内傾する。内外面ヨコナデ。	10YR4/2 灰黄褐	10YR4/2 灰黄褐	2.5YR5/4 にぶい赤褐
50	曲輪4	M-6	備前	擂鉢	—	(7.3)	(13.4)	体部はほぼ直線的に外上方に立ち上がる。7本単位の条線が下から上に施され、底部は未調整。	7.5Y6/1 灰	7.5Y5/1 灰	7.5Y5/1 灰
51	—	ATR	備前	擂鉢	—	(5.5)	—	体部は直線的に立ち上がり、口縁部は拡張されほぼ直立して上方に立ち上がる。	5YR4/2 灰褐	5YR4/2 灰褐	5YR4/2 灰褐
52	曲輪4	I-7	備前	擂鉢	(20.2)	(6.3)	—	体部はほぼ直線的に外上方に立ち上がり口縁部は拡張され上方に直立して立ち上がる。端部は丸くおさめる。内外面共にロクロナデ。	2.5YR4/2 灰赤	2.5YR4/2 灰赤	
53	東斜面	K-15	備前	擂鉢	(30.0)	(6.7)	—	体部はほぼ直線的に外上方に立ち上がり口縁部は拡張され、上方に直立して立ち上がる。端部は丸くおさめる。内外面共にロクロナデ。	2.5YR4/2 灰赤	2.5YR4/2 灰赤	
54	—	ATR	備前	甕	(36.0)	(6.1)	—	口縁部は楕円形を呈し、折り曲げて玉縁を呈し、内外面共ロクロナデ。	5YR3/3 暗赤褐	5YR3/3 暗赤褐	2.5YR5/1 赤灰
55	—	ATR	備前	擂鉢	—	(6.0)	—	体部は直線的に立ち上がり口縁部は内傾する。内外面共ロクロナデ。	5YR6/4 にぶい橙	5YR6/4 にぶい橙	
56	曲輪4	M-6	備前	擂鉢	(27.0)	(5.3)	—	体部は外上方に直線的に立ち上がり、口縁部は拡張され上方に直立して立ち上がる。内外面ロクロナデ。条線は6本単位で下から上へ。	10YR5/2 灰黄褐	10YR5/1 褐灰	
57	—	ATR	備前	擂鉢	(25.4)	(7.0)	—	体部はほぼ直線的に外上方に立ち上がり、口縁部はやや肥厚し端部は緩く内傾する。内外面ヨコナデ。	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR5/3 にぶい黄褐
58	—	排土	備前	擂鉢	(30.0)	(7.9)	—	体部はほぼ直線的に外上方に立ち上がり口縁部は拡張され上方に直立して立ち上がる。端部は丸くおさめる。内外面ともにロクロナデ。	10Y4/2 灰赤	10Y4/2 灰赤	

() は復元値又は残存値

Tab. 5 出土遺物観察表 4

挿図番号	出土遺構 出土曲輪	出土地点	種別	器種	法量			特徴 (形態・手法等)	色調		
					口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)		内面	外面	断面
59	—	排土	備前	播鉢	(29.2)	(7.6)	—	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部はやや肥厚し端部は緩く内傾する。内外面ヨコナデ。	10YR5/4 にぶい黄褐	10YR5/4 にぶい黄褐	10YR5/4 にぶい黄褐
60	曲輪1b	T-9	備前	播鉢	(30.3)	(5.8)	—	体部は直線的に立ち上がり、口縁部は上方に拡張され内外面に2本の凹線が入る。内面条線が連続して入る。	5YR4/2 灰褐	5YR3/2 暗赤褐	10R5/6 赤
66	曲輪2	K-9	近世磁器	紅皿	(4.5)	(2.1)	(1.2)	外面型押し放射線状の文様と、白濁色の釉が高台部を除いて施される。	7.5Y8/1 灰白	7.5Y8/1 灰白	7.5Y8/1 灰白
67	竪堀3	L-6	近世磁器	紅皿	(4.5)	(1.3)	(1.6)	外面型押し放射線状の文様と、白濁色の釉が高台部を除いて施される。	2.5GY8/1 灰白	2.5GY8/1 灰白	2.5GY8/1 灰白
68	西斜面	J-7	近世磁器	小碗	—	(1.4)	(4.4)	全面に釉が施され、畳付けのみ露胎である。高台外面に一条の界線。見込文様不明。	5GY8/1 灰白	5GY8/1 灰白	5GY8/1 灰白
69	西斜面	K-7	近世染付	碗	—	(3.4)	(4.1)	腰が丸く、体部は内湾して立ち上がる形態である。外面に網目紋が染めつけられる。高台は比較的高い。	5GY8/1 灰白	5GY8/1 灰白	10YR6/2 灰黄褐
70	曲輪2	R-9	近世染付	碗	(10.8)	6.5	(6.2)	腰が丸く、体部は内湾して立ち上がる形態である。外面に草文が染めつけられる。高台は比較的高い。	5GY8/1 灰白	5GY8/1 灰白	N8/1 灰白
71	竪堀3	L-6	近世瀬戸美濃系	碗	(12.0)	5.85	(5.4)	高台部から直線的に立ち上がる形態で、広東碗タイプである。	5Y6/1 灰	5Y6/1 灰	10YR7/2 灰白
72	堀切4	E-14	近世磁器	碗	—	(3.1)	(4.4)	高い削り出し高台で、広く内湾して立ち上がる形態をする。見込みは、輪状に掻きとられ見込み五弁花のスタンプが施される。	N7/1 灰白	2.5GY6/1 オリーブ灰	N7/1 灰白

() は復元値又は残存値

Tab. 6 出土古銭計測表

挿図番号	銭種	初鑄年次		銭径(mm)		両目(g)	出土地点	
		王朝名	西暦	外径	内径		グリッド	層
73	太平通宝	宋	976	24	20	1.7	K5	II
74	元豊通宝	宋	1078	23	19	2.1	M6	II
75	元豊通宝	宋	1078	23	19	1.6	N6	II
76	洪武通宝	明	1368	24	20	1.5	N9	柱穴
77	永楽通宝	明	1408	25	21	2.4	N5	I
78	寛永通宝	日本	1636	21	19	1.3	G11	I

第5章 考察

第1節 四国西南部の中世城郭

高知県の中村市や幡多郡、愛媛県では宇和郡を中心とする四国西南地域は、遠隔地ながら九州との重要な流通拠点として、一条・西園寺氏の荘園として発展してきた。一条氏は、中村市街地の小森山周辺に居館を構え、為松城跡を中心とした城跡を手中におさめ、西園寺氏は下松葉・永長周辺と考えられる地点に居館を構築し、その東背後の丘陵上に構築された松葉城跡を拠点として活動している。このように四国西南部を二分する形で中村・宇和に拠点を構え公家から戦国大名として勢力を持ったこれら一族がいる。この四国西南部における2大勢力は、長宗我部氏が土佐統一や四国制覇を成し遂げるまで勢力を持っている。ここでは、愛媛県側で、三瓶町・宇和町・野村町・城川町の一部から北・南宇和郡・宇和島市を中心とした城跡、さらに高知県側では、幡多郡や中村市・宿毛市・土佐清水市を中心とした城跡の立地及び境目の城としての特色ある城跡の概要を俯瞰していくことにする。

四国西南部で現在確認できている中世城郭分布図を作成してみた。さらに、各城跡の立地や戦国期の勢力範囲を含め、AからIまでの9グループに大きく地域分けしてみた。愛媛県側では、西園寺氏の居城した松葉城跡や黒瀬城跡をはじめ明浜町・吉田町・宇和島市にかけて海岸線に構築された城郭の一群をAグループとしてみた。このAグループは、宇和町全域の城跡ドットを落とすことができなかつたが、宇和町全体で91城跡確認されており西園寺氏が拠点とした地域にふさわしい城郭数である。またこのグループの特徴として明浜町や吉田町にかけての海岸線に多く城郭が構築されている。これらは在地土豪の小規模城郭と考えられるが、背後には西園寺氏の支配下におかれ瀬戸内流通も視野に入れた広域支配の重要な拠点地域であった可能性がある。

Bグループは四万十川上流域の愛媛県側にあたる、三間町・広見町・松野町にかけて所在する城郭である。この地域は、三間川・広見川が広見町内で合流し吉野川となり、四万十川に流れ込んでおりこの流域に多く城郭が構築されている。土居清良が居城した大森城跡をはじめ、境目の城として重要な河後森城跡がある。海岸線を重視したAグループとは異なり、河川流通を意識したように河川流域に城郭が構築されている特徴がある。西園寺氏と一条氏が抗争を繰り返した地域のひとつでもあり、一条氏が四万十川を遡り攻めてくる流域沿いに構築された城が多いと考えられる。ここ数年で河後森城跡の発掘調査が進んできており、出土遺物も15～16世紀の貿易陶磁が多く出土しており機能した時期が想定できる。

Cグループは、Aグループと同様海岸線を重視した城の配置をしている。中でも津島町内は、天ヶ森城をはじめとする土豪の越智氏の支配下にある城郭が多いが、岩松川流域に城郭が集中している。内海村の由良半島の良港をもった集落に所在する串ヶ岡城跡などは、海岸線の見張台的な機能を持った小規模城郭である。これらと同じ機能を有したと考えられる小規模な城郭が海岸線に数城跡みられる。

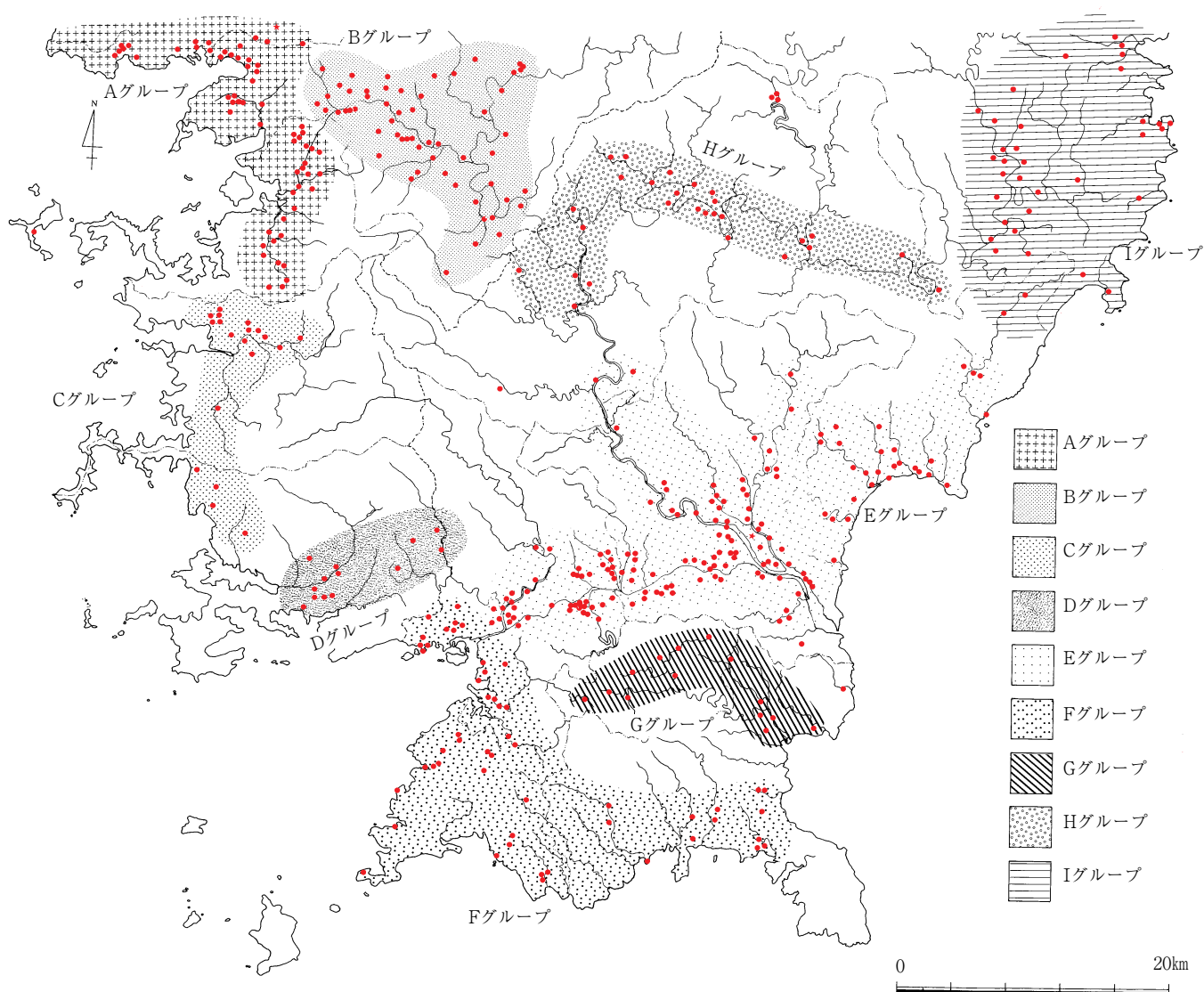


Fig. 38 四国西南部の中世城郭地域別分布図

Dグループは、城辺町・御荘町・一本松町に所在する城郭である。この地域に構築されている城郭は、在地土豪の勧修寺氏により築城された城が多い。勧修寺氏の居城である常盤城跡などは、城辺町の中心部に構築されており、僧都川と蓮乗寺川に挟まれ両河川を堀としている。この僧都川を上流に遡る地点に、川を挟んで丘陵先端部に諸城跡が構築されている。B・C・Dグループは、西園寺氏と一条氏の勢力争いに巻き込まれた地域であり、勧修寺氏などは天正3年の四万十川合戦にも参戦しており、豊後の大友氏との関連も見逃すことはできない。

EグループからIグループは、高知県側で一条氏の勢力範囲である。まず一条氏が居館を構えた中村市内の城跡をみると、四万十川を中心にその支流である中筋川、後川流域に約70城跡確認されている。流域ごとにみると、四万十川流域は26城跡、中筋川流域は23城跡、後川流域は21城跡となっている。このEグループとした地域は、これら四万十川流域と中村市に隣接する大方町・佐賀町の諸城跡を含めている。ここでの大きな特徴は、一条氏が拠点とした四万十川流域を含め各河川沿い

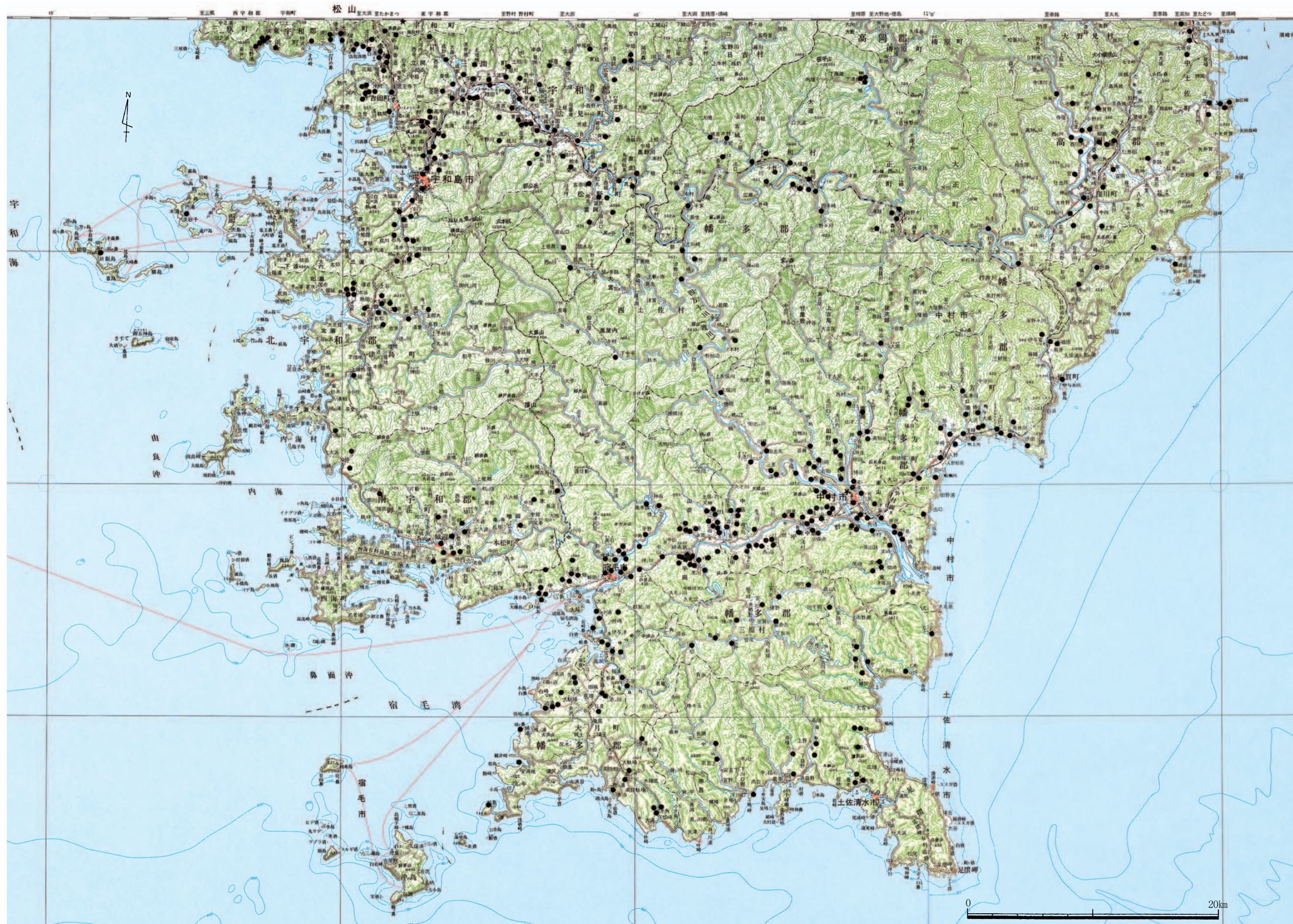


Fig. 39 四国西南部の中世城郭分布図

に城が構築されている点である。中村市に隣接する宿毛市分を含めると中筋川流域が最も集中して城郭が構築されていることがわかる。中村市をはじめ大方町で城跡の発掘調査が多く実施されている。中村市では、中村城跡・栗本城跡・扇城跡・塩塚城跡・チシ古城跡・ハナノシロ城跡・江ノ古城跡等が調査されている。大方町では、曾我城跡や今回の西本城跡が調査されている。

Fグループは、宿毛市分の一部と、大月町・土佐清水市の一部を含めた。ここでの特徴は、地形的なものに制約されるが、小河川の上流地域と海岸線に城郭が分布している点である。大月町柏島に構築されている柏島城跡などは、離島の沖ノ島との関連で豊後水道を往来する舟の見張りの機能をもっている城郭とも考えられる。さらに海岸線の小集落を守る役割も果たしていたのであろう。この地域の城郭分布を見ると、大方町内の城跡分布と類似していることがわかる。

Gグループは、土佐清水市の一部と三原村に所在するグループとした。土佐清水市の下ノ加江地域は、下ノ加江川が流れておりこの河川沿いに城郭が構築されている。さらに三原村に入ると長谷川に沿った狭い平野部に上長谷城跡を中心に数城構築されている。平野部で上長谷遺跡が調査されており15世紀から16世紀にかけての貿易陶磁が多く出土している。これらの搬入経路は前述した下ノ加江川を遡り搬入されていることが想定され、上流の急流部分は馬借の利用も考えられるが頻繁に河川が利用され、その流域に城跡が構築されている。

Hグループは、西土佐村から十和村・大正町にかけて四万十川中流域に分布する城郭である。もちろん一条氏の支配下に置かれ在地小土豪の構築した城郭群である。この地域は幡多地方の中でも山岳地域で四万十川沿いに集落が開けている。地形的な制約によるものと考えられるが、集落の背後に構築される城跡も存在するが、四万十川沿いに構築されている城跡が多い。十和村奈路遺跡では、中世後期の集落跡が調査されており16世紀前半に編年される貿易陶磁の青磁や青花が出土している。中村から四万十川沿いに搬入されたと考えられ、この地域にも15世紀後半から16世紀前半頃までには貿易陶磁を持ち得ることが出来る勢力が存在したことになる。

Iグループは、四万十川中流域から上流域の窪川町や久礼城跡が構築されている中土佐町の範囲を設定した。窪川町では、仁井田五人衆の一人である窪川氏の居城である茂串城跡が市街地の南の標高372mの丘陵上に構築されている。窪川町内の諸城跡は、縄張り調査が進んでおらず詳細な内容は不明である。その中で窪川城跡は、縄張り調査が行われており土塁跡や堅堀・堀切等が確認されている。中でも特徴的な遺構は、南から西側斜面にかけて14条の畝状堅堀群が確認されていることである。この窪川城跡は、この四万十川中・上流域の中でも拠点的な城郭と考えられる。その他は、Hグループと同様小規模な城郭が流域沿いに構築されている。

中土佐町に所在する城跡群は、佐竹氏の居城久礼城跡がこの地域の拠点的な城郭である。詰の部分の発掘調査が実施されており礎石建物跡が検出されている。その他の城跡は、上ノ加江の集落や海岸沿いに小規模な城郭が構築されている。

大きく西南四国の中世城郭をAからIまでグルーピングし、各地の城郭をおおまかに俯瞰してみたが城郭が多く構築されているその中心は、高知県側では中村市を中心とした四万十川流域と、愛媛県側では宇和町をはじめ瀬戸内の海岸沿いに多く認められる。これらの分布から、現段階で四国西南部における中世城郭構築の歴史的意義を導き出すことは困難であるが、今後の展望として一条氏

と西園寺氏の動向と地域支配のあり方を模索していくことが重要と考える。さらにその方法論として発掘資料の検討のみだけでなく、縄張り調査の進展や歴史地理学・文献面での総合的な研究が望まれるところである。

第2節 大方町中世城郭の検討

大方町では、中世の城館跡が25ヶ所確認されている。第2章では、大方町という小地域での中世城郭を各流域ごとに見てきたが、そのほとんどが小規模な山城である。大規模城郭のような地域支配の核となる城を「拠点的城郭」と位置付けると、対する特徴の乏しい城郭を「小規模城郭」と捉えることができる。西本城跡をはじめ、その多くの山城が小規模城郭であることは認識されており、民衆との係わりの中で小規模城郭が構築されていった点など全国的に研究が進んでいる。町内では、25城跡について簡単な測量調査が実施されており、これらを援用し立地及び城郭の規模等の検討から大方地域に構築されている中世城郭を各流域ごとにみていき特徴を抽出していきたい。

伊田川流域は、海岸集落の東端に一城のみ構築されている。もちろん入野郷の最東端に位置しており海岸路と山手路の合流地点で東西の交通の要所に位置している。縄張りは、詰と二ノ段の平坦部2ヶ所と詰の西側に連続堀切4条が構築されている。その他の遺構は確認されていないが、連続堀切が4条確認されていることは重要である。立地も海岸線に近く、陸・海・川の往来監視及び集落の守りの両機能を有している城郭であると考えられる。

有井川流域では、2城跡が確認されている。有井川城跡は、海岸線に近く下流に位置し、海に向かってのびる舌状の段丘上に構築されている。有井川の集落を見渡せることができる。遺構としては、詰の周りに階段状の帯曲輪と堀切1条が確認されており、遺構の残りは悪い。北有井川城跡は、1km程遡ったところに位置する。遺構としては、詰を中心に南側に2ヶ所の平坦部と北側に1ヶ所の平坦部が確認でき、北側の平坦部のさらに北側に1条の堀切が構えられている。城跡からは、集落の奥の一部が望めるだけで集落を防御する役割で構築されたとは考えられない。しかし川の対岸には「土居屋敷」の地名がみられ中流域の小集落をまとめる役割を果たしていたのであろうか。

蜷川流域は、4ヶ所の城跡が確認されている。最も下流に位置する上川口城跡は、天然の良港を古代からもった地域を見下ろす丘陵に構築されており、この良港を守る機能を有していたと考えられる。遺構も詰と二ノ段を防御するように南と北にそれぞれ堀切2条と1条を配し、西斜面には3条の堅堀を構築している。高山城跡も上川口城跡に隣接して位置し、同様な立地で同じ機能を持っていたと考えられる城跡である。詰とその西側に二ノ段の平坦部を持ち、詰の北と西側に堀切1条と2条を配する。上川口城跡と比較するとやや規模が小さい。河口から上流に1kmほど遡ると浮津城跡がありさらに遡ると蜷川城跡が構築されている。蜷川城跡は、現蜷川集落の背後の丘陵に構築されており、小集落を防御するのみの役割を持った城と考えられる。浮津城跡は、他の3城跡と比べ標高が高く、浮津や蜷川の集落や港まで見渡せる高所に構築されている。詰と二ノ段の平坦部2ヶ所と詰の西部端には土塁が残る。堀切と堅堀が1条ずつ確認されており、詰から備前焼の破片が表採されている。こ

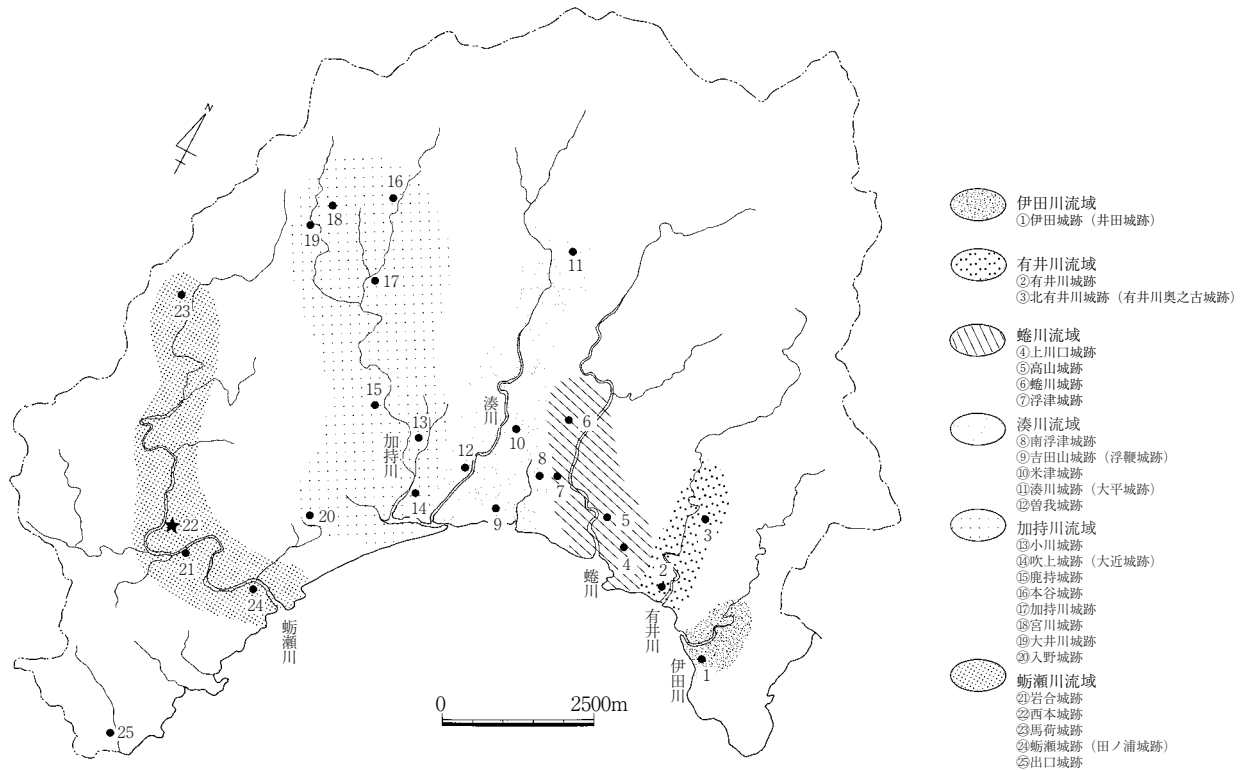


Fig. 40 大方町河川流域別中世城郭分布図

Tab. 7 大方町中世城郭観察表

地図番号	城跡名	住所	地目	流域	標高(比高)	備考
1	伊田城跡	大方町伊田字古城	山林・墓地	伊田川流域(下流)	40m(30)	詰、二ノ段、堀切1条
15	鹿持城跡	大方町加持川字古城	山林	加持川流域(下流)	50m(40)	詰、二ノ段、堀切1条、 堅堀1条
20	入野城跡	大方町入野字城山	山林・畑	加持川流域(下流)	25m(15)	詰、二ノ段
14	吹上城跡	大方町浮漣字南田城	山林・ 荒蕪地	加持川流域(下流)	23m(13)	詰、二ノ段・堀切
16	本谷城跡	大方町加持川字ケンギウ・ ケンキウロ	山林	加持川流域(上流)	119m(59)	詰、堀切1条
17	加持川城跡	大方町加持川字城山・ 北汐水・東汐水	山林	加持川流域(上流)	90(40)	詰、堀切1条
13	小川城跡	大方町加持川字平見	山林	加持川流域(上流)	40m(30)	詰、二ノ段、土塁
18	宮川城跡	大方町大井川字クサイガ峠	山林	加持川流域(上流)	150m(70)	詰、二ノ段、堀切2条
19	大井川(二重)城跡	大方町大井川字城ノ谷	畑・ 道路	加持川流域(上流)	97m(27)	詰、堀切2条
22	西本城跡	大方町下田ノ字タナダ・ テッポウ田	山林	蜷瀬川流域(下流)	50m(40)	発掘調査
21	岩合城跡	大方町下田ノ字ツボノソト	山林	蜷瀬川流域(下流)	30m(20)	詰、二・三ノ段、堀切4条、 堅堀1条
24	蜷瀬城跡	大方町田ノ浦字古城・ 古城東平・古城西平	山林	蜷瀬川流域(下流)	90m(40)	詰、二～四ノ段
23	馬荷城跡	大方町馬荷字城山	山林	蜷瀬川流域(上流)	100m(35)	詰、二ノ段、堀切3条、 堅堀1条
10	米津(口湊川)城跡	大方町口湊川字城山	山林	湊川流域(下流)	80m(70)	詰、一～四ノ段、堀切3条
8	南浮津城跡	大方町字漣字小城山	山林	湊川流域(下流)	55m(45)	詰、一～四ノ段
12	曾我城跡	大方町浮漣字城ノ谷口	山林	湊川流域(下流)	40m(30)	詰、一～四ノ段、堀切1条
9	浮漣城跡(吉田山城跡)	大方町浮漣字田城	畑・ 荒蕪地	湊川流域(下流)	18m(8)	詰、二ノ段、堀切1条(海に 突き出た立地の城)
11	大平城跡(湊川城跡)	大方町奥湊川字地蔵ノ上	山林	湊川流域(上流)	80m(40)	詰、堀切2条
3	北有井川城跡	大方町有井川字シロクビ・ ヌタノダバ	山林	有井川流域(下流)	55m(35)	詰、一～四ノ段、堀切1条
2	有井川城跡	大方町有井川字ホキノ畝	山林	有井川流域(下流)	60m(40)	詰、一～四ノ段
4	上川口城跡	大方町上川口字岡野地山	山林	蜷川流域(下流)	65m(45)	詰、一～四ノ段、堀切2条、 堅堀2条
5	高山城跡	大方町上川口字高山	山林	蜷川流域(下流)	65m(55)	詰、一・二ノ段、堀切3条
7	浮津城跡	大方町浮漣字城山・上城山	山林	蜷川流域(下流)	106m(86)	詰、二ノ段、堀切1条、 堅堀1条
6	蜷川城跡	大方町蜷川字3599-1・5・ 11-13	山林	蜷川流域(下流)	70m(40)	詰、二～四ノ段、堀切1条
25	出口城跡	大方町出口字寺田・寺田谷	山林		35m(25)	詰、二・三ノ段、堀切2条

の城跡だけ表採遺物を見るとやや古くなる可能性がある。

湊川流域は、5城跡確認されている。下流域では、発掘調査された曾我城跡や対岸の丘陵にある南浮津城跡がある。さらに海岸に近い吉田山城跡（浮鞭城跡）がある。曾我城跡は詰の平坦部から丘陵先端部にかけて段状の平坦部を造りだしており、詰は1条の堀切や堅堀で防御されている。出土遺物から15世紀後半から16世紀前半代に機能した城郭であることがわかっている。さらに対岸に位置する南浮津城跡も堀切や堅堀は確認できていないが、平坦部の造りだしは曾我城跡と類似している。浮鞭城跡は、標高18mの低いところに構築されているが、海に突出した城で東・南・西側は断崖と

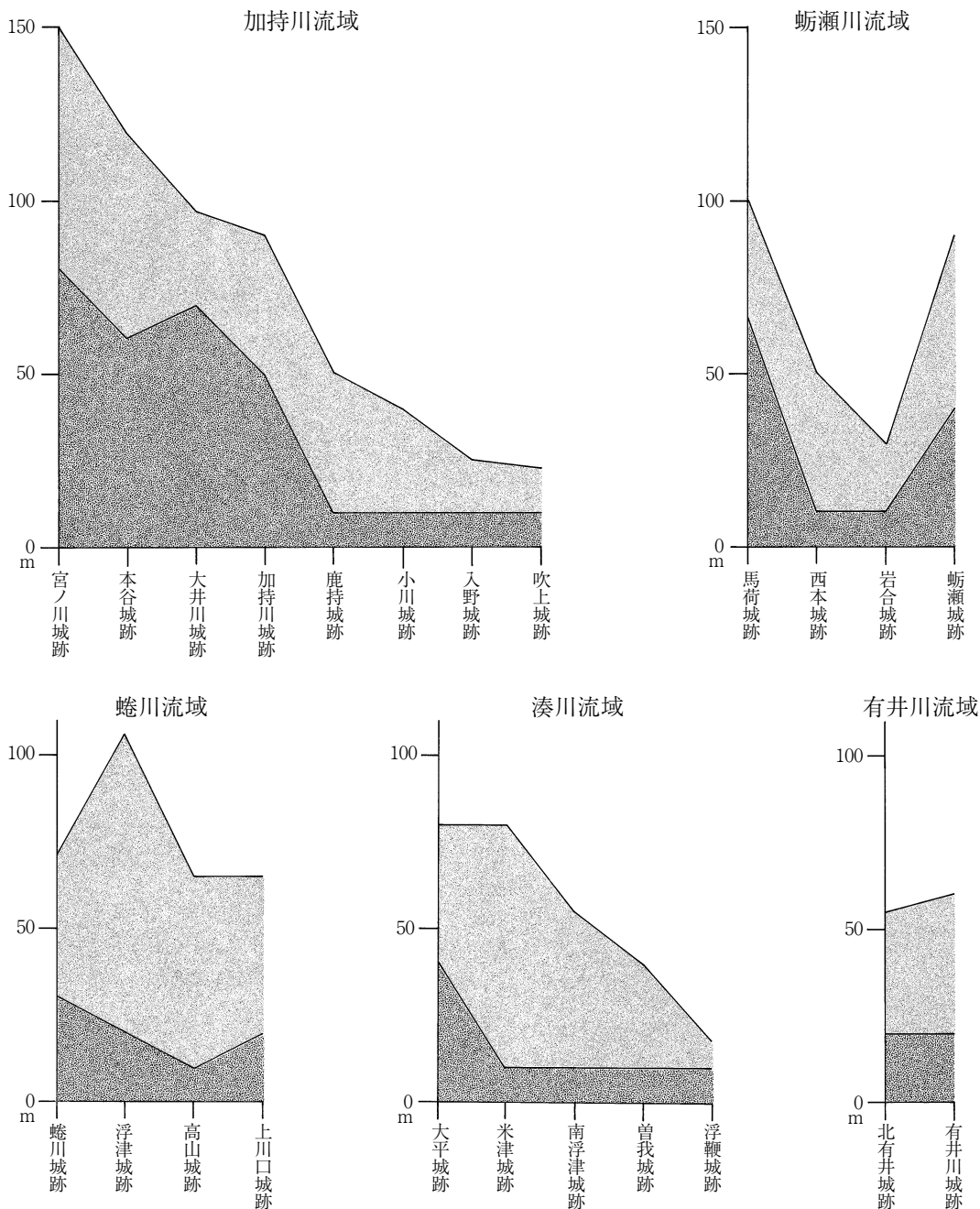


Fig. 41 大方町中世城郭流域別比高差グラフ

なっている。さらに詰の北側は土塁と堀切で防御されている。湊川の中流に位置する米津城跡は、詰とその両端に平坦部を構成している。北側では3条の連続堀切で防御されている。町史では、南北朝期の山城とされているが、連続堀切を持つことから戦国期の城郭と考えられる。最上流域に所在する湊川城跡は、築城者が大平弾正とされており大方町内で最も古い城郭とされている。縄張りを見ると詰と見られる平坦部の東側尾根を2条の堀切で防御している。

加持川流域は、7城跡が確認されており他の流域と比べ最も多く城郭が構築されている。この下流域には大方町内で最も広い加持・入野平野をひかえている理由によるかもしれない。吹上城跡は、最下流に位置し標高25mの台地上の地形に構築されている。遺構の残存状況は悪く、現在堀切1条しか確認できない。やや川を遡ると小川城跡や加持城跡がある。両城跡は前面に加持平野を望め、重要な役割を果たした城跡と考えることができる。小川城跡の遺構は、畑地に開墾され残りが悪く、加持城跡は詰から二ノ段が残り堀切と堅堀がそれぞれ1条確認されている。上流域に構築されている本谷城跡、加持川城跡、宮川城跡、大井川城跡はいずれも小さい詰の平坦部と1条から2条の堀切で防御する遺構を残している。

今回発掘調査した西本城跡も含まれる蛸瀬川流域であるが、最下流に蛸瀬城跡が位置する。標高が90mと高く、北側は蛸瀬川が流れ断崖となり東から南は海で要害の地に構築されている。入野平野を一望でき、蛸瀬川口は船着き場であり海から蛸瀬川に入る舟の監視的役割を果たしていたと想定できる。上流に遡ると岩合城跡が構築されている。対岸の西本城跡とともに入野～中村間の逢坂越の路をおさえる場所に立地している。さらに西本城跡は上田ノ口集落や中村・馬荷方面からの路もおさえる役割を果たしている。岩合城跡の遺構は、詰の平坦部と堀切3条が確認されている。最上流に馬荷城跡が構築されている。馬荷の集落及び中村からの路をおさえる役割を持っていたと考えられる。

以上各流域に構築されている城跡を簡単に俯瞰してきたが、大方町内で確認された城郭はいずれも小規模なものが多く、詰や二・三ノ段の平坦部を持ち1条から3条の堀切で防御している城跡が多く認められる。斜面部の堅堀は、調査段階で見逃している城跡があると考えられるが数城跡は、西本城跡のように堅堀を掘削していると考えられる。さらに大きな立地の特徴として、河口近くで海岸沿いに構築されている城、下流域で集落の背後に構築されている城、上流域に構築されている城と大きく3パターンに分けることができる。しかしいずれも河川の近くで常に河川を見渡すことが出きる地点に構築されていることは共通項として挙げられる。

各流域ごとに詰の標高と城跡下の集落標高の比高差をFig. 41にグラフとして示している。ここで浮津城跡や米津城跡は、比高差が大きく他の城跡と異なる数値がでている。さらに蛸瀬城跡は下流域に位置しているながら標高も高く比高差もある。これらのデータからなにが言えるかは、今後詳細な縄張り調査や研究が必要である。予察として許されるならば、時期的な差かあるいは城郭が構築された役割や性格の差があるとしか考えざるを得ない。

第3節 西本城跡出土遺物の検討

西本城跡から出土した遺物は、主に貿易陶磁、国産陶器、土師質土器、古銭、土錘等である。中世出土遺物の詳細点数は、Tab.8のとうりであるが、総数366点の内訳をFig. 42にグラフ示した。出土点数で大きな特徴は、貿易陶磁の青磁がその多くを占めている点である。県内で岡豊城跡をはじめ中村城跡、姫野々城跡、芳原城跡等拠点的な城郭では土師質土器が圧倒的に多数を占めている。扇城跡では土師質土器が377点で貿易陶磁が286点と土師質土器がやや多めであるが圧倒的な数値ではない。その貿易陶磁の中でも青磁がその多くを占めている。小規模城郭のハナノシロ城跡では、土師質土器が211点と全体の38%を占め貿易陶磁は106点と19%である。扇城跡と同じ傾向を窺うこ

Tab. 8 中世出土遺物出土地点表

出土遺物/出土曲輪・遺構	曲輪1-a	曲輪1-b	曲輪2	曲輪3	曲輪4	SB4	ピット群	堅堀1	堅堀2	堅堀3	堀切4	集石2	Aトレ	Bトレ	東斜面	西斜面	表採	計	総数
土師質土器	2		45		7			3	2	4		4	31	1	7	1	1	108	
実測遺物			1				1					1	1			2	2	8	116
青磁			70		6				3	1		1	8		4	2	5	100	
実測遺物	1		4		5		1		1				2		6	1	3	24	124
青花			7						1				2					10	
実測遺物												1				1		2	12
白磁			5					1								1	1	8	
実測遺物							1		1						1			3	11
瀬戸・美濃系陶器																			
実測遺物			1															1	1
備前			7					4		1		1	6		1	1		21	
実測遺物		1			3	1				1		2	6		1		2	17	38
土錘									2	2								4	4
実測遺物																			
金属製品			21	1	3					1	1	3	2		4		5	41	
実測遺物			4		2								1		2			9	50
石製品			7												1		1	9	
実測遺物			1															1	10
計	3	1	173	1	26	1	3	10	10	8	1	13	59	1	27	9	20	366	366

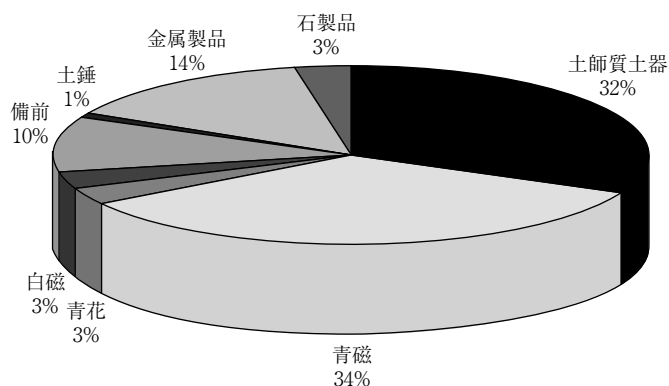


Fig. 42 中世遺物出土量グラフ

出土遺物	総数
土師質土器	116
青磁	124
青花	12
白磁	11
備前	38
土錘	4
金属製品	50
石製品	10
計	365

(瀬戸・美濃系陶器1点除く)

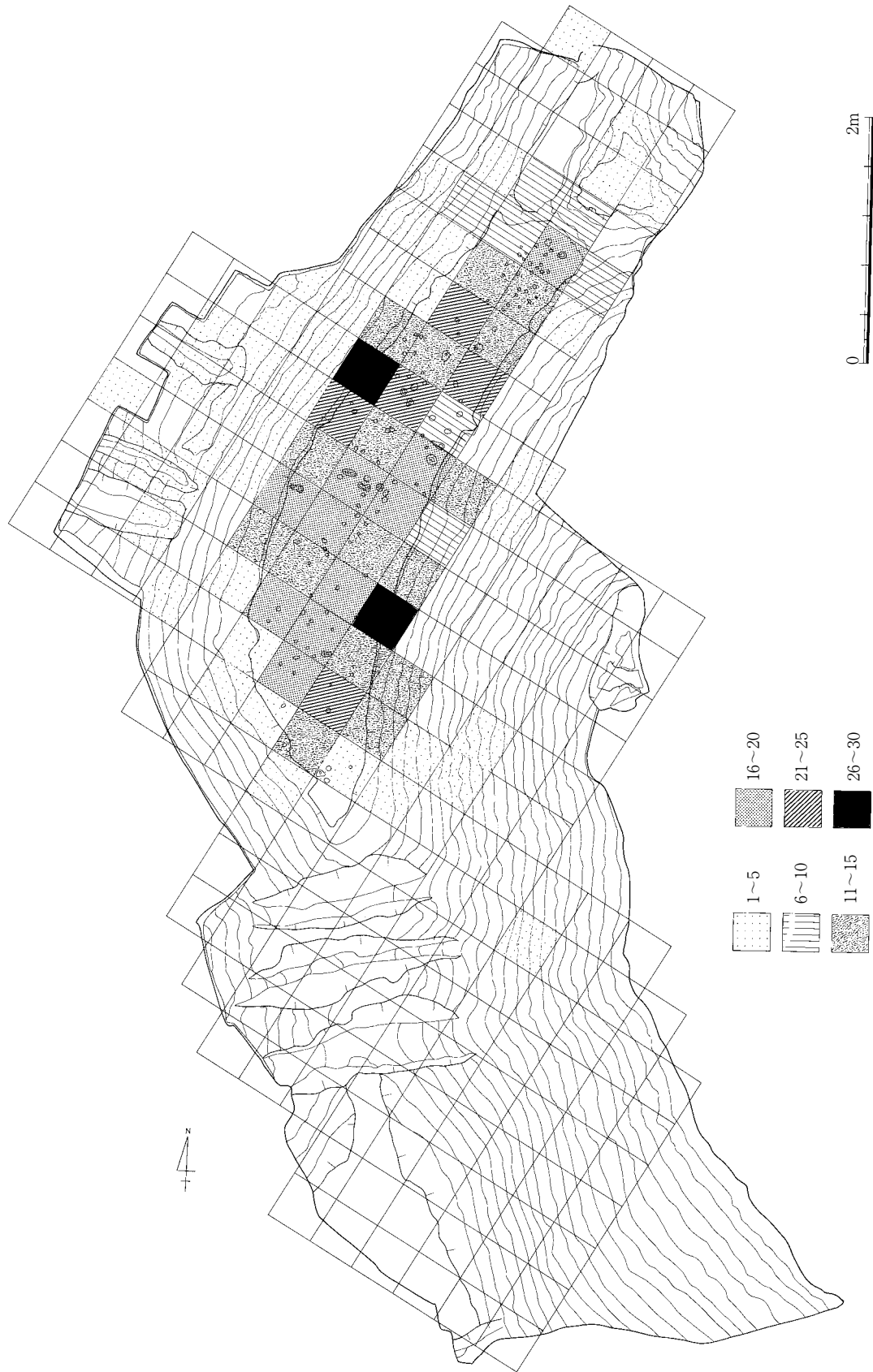


Fig. 43 西本城跡遺物出土分布図

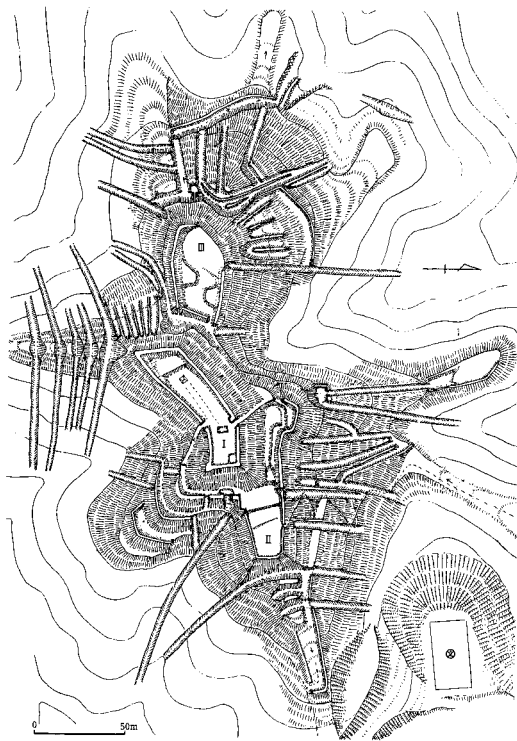
とができる。高知県全体で現段階の調査成果から言えることは、拠点的城市では遺物全体量の多くを土師質土器が占め、土師質土器を山城で多く使う行為が行われていることが確認できる。対照的に小規模城郭では、土師質土器片数が全体の半分以下で細片が多く拠点的城市で使用し行われた行為は認められない。所謂山城内で「ハレ」の行為が小規模城郭では行われていないことの証明になる。さらに貿易陶磁の中で幡多地方の城郭で青磁が多く出土している点は、時期的なことや階層的な問題、さらに貿易を支えた一条氏の支配関係にも問題が波及してくるものと考えられる。これらのことから、出土遺物の内容で城郭の性格・時期的な特徴を掴むことがある程度可能である。ここでは時期決定に最も研究が進んでいる貿易陶磁、国産陶器を中心に抽出し、城跡の機能した時期を検討していきたい。

西本城跡は、貿易陶磁の中でも青磁類が多く、国産陶器の備前焼を見てもその特徴からある程度時期を推定することができる。出土状況もその多くは、Fig. 43で見られるように曲輪2からの出土が多い。西本城跡の出土遺物で、青磁を見るとFig. 33の22のように上田編年のC-II類で、外面雷文帯で下部には片切彫の幅の広い蓮弁をもつものや、27のB-III類で片切彫によって蓮弁を表現するものがある。さらに白磁を見ても、Fig32-12・Fig34-45は森田編年のD類で切り高台の皿である。これらの遺物をみると、15世紀前半から中頃までに編年されている遺物である。その他青磁類は、細蓮弁文碗で占められている。さらに青花が数点出土していることや白磁の端反り皿E類が出土していないことから、構築から使用された時期を大きく見ても15世紀中頃から16世紀前半代の約100年以内の間をある程度想定することができる。国産陶器でも、備前焼の甕や播鉢が多く出土している。備前焼編年のIV期の製品が多く前述した時期にあてはめることができる。16世紀後半（天正年間に実施）の長宗我部地検帳をみると、小字でも残っているように「古城」と記載され既にこの時期には廃城になっているようである。遺物を見てもこの時期のものは出土しておらず、城跡の構築・使用された時期を裏打ちすることができる。

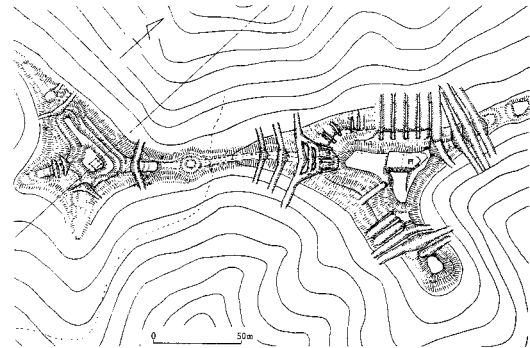
第4節 連続堀切・連続縦堀群について —検出遺構の検討から—

縦堀を密集して斜面に築き並べ、群として面を被ってしまう遺構として畝状空堀群がある。畝状空堀群は、畝形阻塞とも連続縦堀とも呼ばれ、バラエティーに富んでいて評価が一定ではない。しかし最近では、この畝状空堀群の出現が城郭の時期決定の大きな指標となっている。全国的に確認されている遺構で、16世紀の中頃（正確には16世紀第2四半期）に出現すると認識されている。縦堀の伝統的な使い方を打ち破る手法として全国的な城に多用された遺構であるが、濃密の差はあり北九州・高知県・広島県南部・秋田県南部・新潟県などに多く認められているようである。

西本城跡では、斜面部で調査できた連続縦堀を3条検出することができ、未調査部分や崩壊部分を合わせると、5~6条の縦堀が構築されている。これらの遺構が畝状空堀群として捉えられるか今後の問題であるが、全国の研究成果をみると時期的に西本城跡が機能した最終段階に構築されたと考えられることができる。今回検出した連続した縦堀は、畝状空堀群の出現期でも草創期に当てはめるこ



久礼城跡 (池田誠作図)



岡本城跡 (池田誠作図)

連続堀堀を多用する城

城名	城主(主家)	所在地	攻城戦歴	長宗我部氏の支配
1 大野見	戸田氏(津野氏)	高岡郡大野見	?	有(姻戚)
2 久礼	佐竹氏	高岡郡中土佐	無	有(姻戚)
3 針木	松岡、北川、三本氏	高岡郡須崎	?	?
4 神崎	田原氏(大平氏)	高岡郡宇佐	?	有(?)
5 岡本	堅田氏(津野氏)	高岡郡須崎	対南朝方	有(番城)
6 畦田	中原氏	高岡郡須崎	?	?
7 麓	波川氏(波川氏)	吾川郡波川	対長宗我部氏	有(姻戚)
8 音竹(伊野)	音竹氏	吾川郡伊野	無	有

堀切と竅堀を多用する城

城名	城主(主家)	所在地	攻城戦歴	長宗我部氏支配・城主(関係)
1 万々	吉松氏	高知市万々	無	有・吉松氏(姻戚)
2 朝倉	木山氏	高知市朝倉城山	対長宗我部氏	有・細川宗桃(重臣)
3 泰泉寺	吉松氏	高知市泰泉寺	対長宗我部氏	有・中島大和守(重臣)
4 行川	大黒氏(本山氏)	高知市行川城山	?	?
5 安泰寺山(久万)	久万氏	高知市久万	対長宗我部氏	有・久武内藏助(重臣)
6 亀岩	小笠原氏	南国市亀岩	?	?
7 魁の森	下田氏	南国市魁の森	?	?
8 菊	?	須崎市吾井郷越後谷	?	?
9 中平	?	須崎市浦ノ内東分城山	?	?
10 八田	吉良氏	吾川郡伊野八田平次ヶ森	?	?
11 山田	高畑氏	宿毛市山田山田	?	有・(?)
12 平田	平田氏(平氏)	宿毛市平田黒川字二重	?	兼松氏
13 鶴ヶ	前野氏	宿毛市芳奈	対長宗我部氏	有・細川宗桃(重臣)
14 兼松	兼松氏	宿毛市平田黒川	?	?
15 四手	中平隠岐守重胤	幡多郡十和村昭和	?	?
16 圃豊	長宗我部氏	南国市圃豊山	対本山氏他	有・長宗我部氏

(中世城郭事典三 抜粋)

Fig. 44 連続堀切、竅堀を多用する城郭縄張り図

とができ、全国的に普及する畝状空堀群の先駆的な構築技術手法と考えられる。県内でも畝状空堀群は、岡豊城跡、吉良城跡、久礼城跡、姫野々城跡など拠点の城郭やそれ以外の音竹城跡、有岡城跡、岡本城跡などにもみられる。これら城郭に多用される城郭構築技術の解明に重要な資料を提供することができた。

尾根上の防御的役割をはたす堀切について、今回曲輪1・2の両端に3重の連続した堀切を構築していることがわかった。曲輪2の東側では、調査前では2条しか明確に確認することができなかったが、調査の結果連続した3重の堀切であることを確認した。堀切の掘り方は、西本城跡の場合箱堀であることが確認された。堀切は防御遺構として重要であるが、立て籠る方は下の集落との通路を確保しなければならず、堀切を越えるには堀底を通るか土橋か木橋を渡る方法しかなく、今回は土橋は確認できなかったため、木橋か堀底を通る方法をとっていたと想定される。堀切での防御及び一定の通路の確保をするため掘り方を箱堀にしたとも考えられる。

2~3重の連続した堀切・竅堀は、これまでの土佐の城郭研究で長宗我部氏系統の構築技術(Fig.44)ではないかと考えられていた。しかし西本城跡では、廃城の時期が16世紀前半頃と考えられ、この時期には、長宗我部勢力は幡多地域までおよんでいない。さらに四万十川流域の支流にも小規模城郭が構築されており、伊予側においても2重の連続堀切が認められることから、一条氏の愛媛県南予支配のための城郭造りが同じ手法で行われたとも考えられる。

今回の西本城跡の調査成果で、一条氏の地域支配のあり方が城郭の構築技術から読み取れる貴重な資料を提供できたし、今後土佐の城郭を考えていく上で大きな問題点を指摘できたと考える。

(松田)

引用・参考文献

- 伊藤 晃「備前焼の流れ」『木村コレクション古備前図録』1984年
石岡ひとみ「河後森城跡出土の陶磁器について」『研究紀要』第3号 愛媛県歴史文化博物館 1998年
上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究No2』日本貿易陶磁研究会 1982年
大方町『大方町史』
愛媛県教育委員会『愛媛県中世城館跡一分布調査報告書一』1987年
岡本健児「波川城跡の発掘調査」『土佐史談』137号 1974年
木村剛朗他『栗本城跡』中村市教育委員会 1985年
小野正敏「城館出土の陶磁器が表現するもの」『中世の城と考古学』新人物往来社 1991年
小野正敏「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究No2』日本貿易陶磁研究会 1982年
千田嘉博「中世城館研究の構想」『中世の城と考古学』新人物往来社 1991年
千田嘉博「戦国期城郭・城下町の構造と地域性」『ヒストリア』第129号
宅間一之・出原恵三「芳原城跡発掘調査報告書」高知県教育委員会 1984年
宅間一之『久礼城跡』中土佐町教育委員会 1984年
宅間一之『古井の森城跡』土佐山村教育委員会 1980年
多田暢久「城郭分布と在地構造－戦国期大和国東山内の動向－」『中世城郭研究論集』新人物往来社 1990年
中井 均「織豊系城郭の画期－礎石建物跡・瓦・石垣の出現－」『中世城郭研究論集』新人物往来社 1990年
松田直則他『中村城跡』中村市教育委員会 1985年
松田直則「高知県における中世土器の様相」『中近世土器の基礎研究Ⅲ』日本中世土器研究会 1989年
松田直則「四万十川流域出土の貿易陶磁」『貿易陶磁研究No16』日本貿易陶磁研究会 1996年
松田直則『奈路遺跡』幡多郡十和村教育委員会 1993年
松田直則『和田城跡』高岡郡梶原町教育委員会 1990年
松田直則・竹村三菜「ハナノシロ城跡」『中村・宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1993年
真壁忠彦・藍子「備前焼研究ノート(1)～(3)」『倉敷考古館研究集報』1.2.3 倉敷考古館 1966.1967年
宮地森城「土佐国古城略史全」土佐史談復刻業書(1) 1989年
村田修三「城郭概念再構成の試み」『中世城郭研究論集』新人物往来社 1990年
村田修三「中世の城館」『講座・日本技術の社会史』6巻・土木、日本評論社 1984年
村田修三編『中世城郭事典』2 新人物往来社 1987年
森田 勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究No2』日本貿易陶磁研究会 1982年
森田尚宏『岡豊城跡Ⅱ－第6次発掘調査報告書一』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1992年
森田尚宏・松田直則・岡本桂典『岡豊城跡第1～5次発掘調査報告書』高知県教育委員会 1989年
森田尚宏『扇城跡』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1992年
武藤致和編「南路志」下巻 文化十年 1960年12月活字本
前川要・千田嘉博・小島道裕「戦国城下町研究ノート」『国立歴史民俗博物館研究報告』第32集 1991年
小林健太郎『戦国城下町の研究』大明堂 1985年
山本雅靖「城館研究の視点と方法の展開」『中世の城と考古学』新人物往来社 1991年
山上雅弘「戦国時代の山城－西日本を中心とする15世紀後半～16世紀前半の山城について－」『中世城郭研究論集』新人物往来社 1990年
山本 大『高知県の歴史』山川出版社 1972年
横山勝栄「山間地域の小型城郭」『中世の城と考古学』新人物往来社 1991年
山崎正明・武吉真裕『曾我城跡』大方町教育委員会 1997年
大方町教育委員会『大方の中世城跡－調査記録報告書一』1990年

写真図版



西本城跡遠景（東より）



曲輪2調査前

PL.2



曲輪2・切岸調査前



曲輪2伐採風景



斜面部土留め作業風景



切岸ベルト設定状況

PL.4



曲輪2西斜面調査前



Cトレンチ設定状況



A・B・Cトレンチ完掘



Aトレンチ完掘

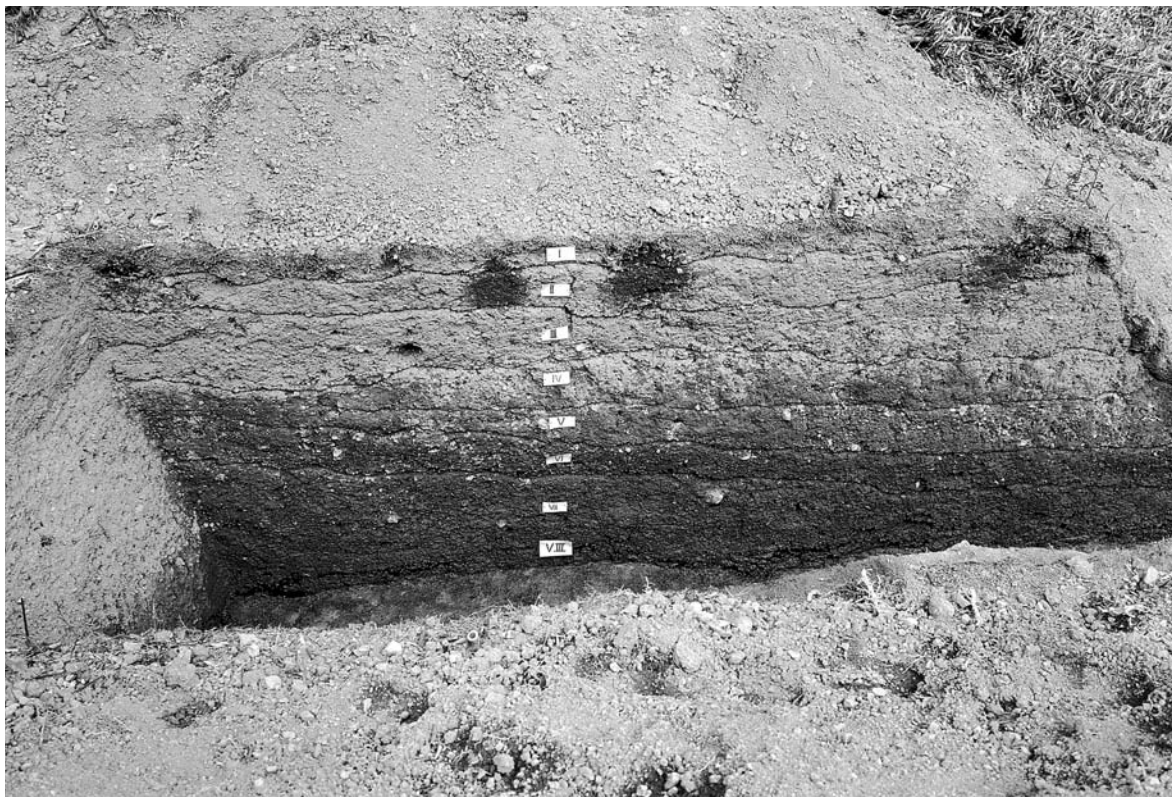
PL.6



B・Cトレンチ完掘



Aトレンチセクション



Aトレンチセクション

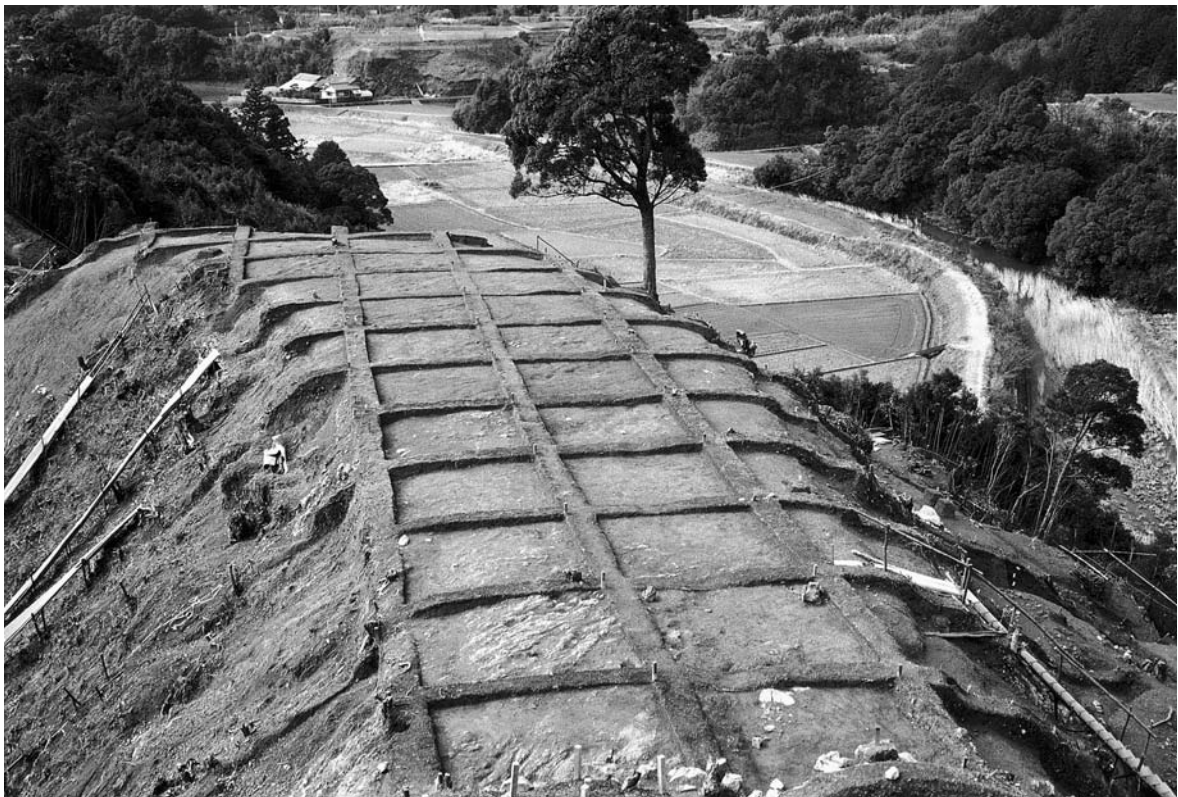


曲輪2作業風景

PL.8



曲輪2



曲輪2



曲輪2作業風景



曲輪2セクション

PL.10



切岸作業風景



堀切（北東から）



堀切4セクション



堀切3セクション

PL.12



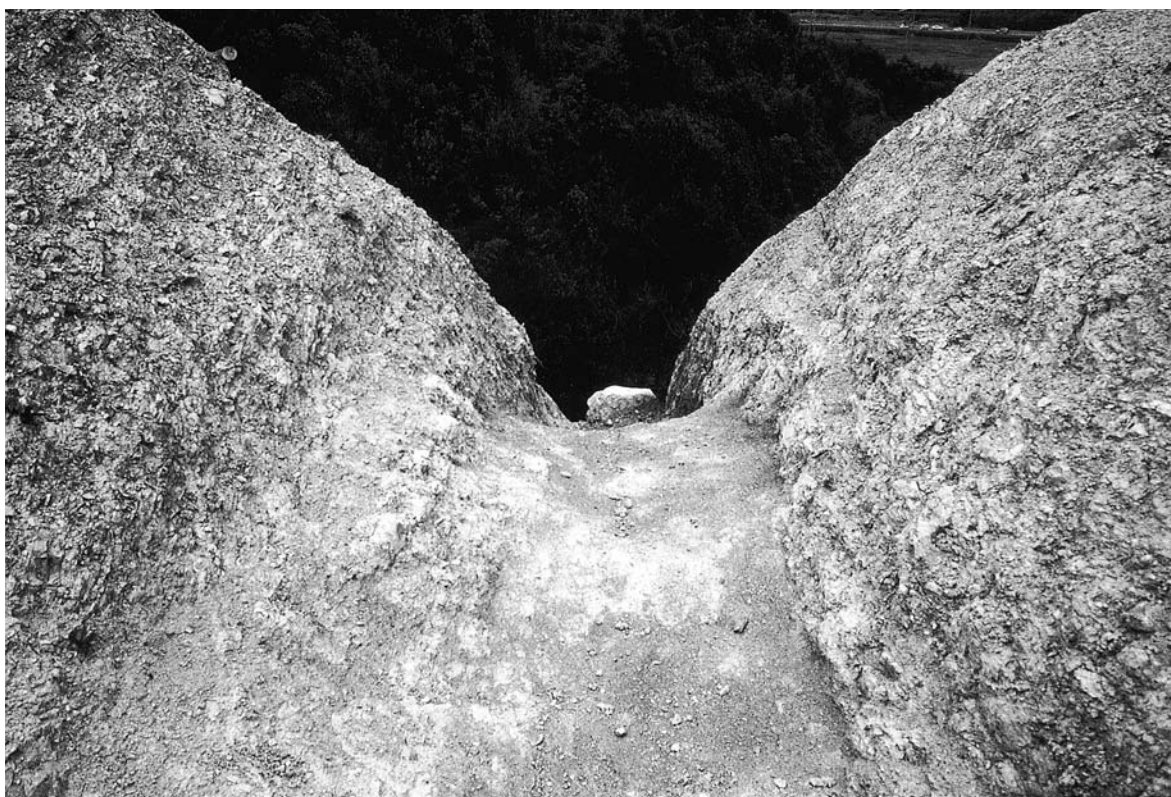
堀切2・3・4（東下方から）



堀切2・3・4完掘



堀切1完掘（東から）



堀切4完掘（西から）

PL.14



堀切2完掘（東から）



曲輪4作業風景



豎堀1・2



豎堀3南北セクション

PL.16



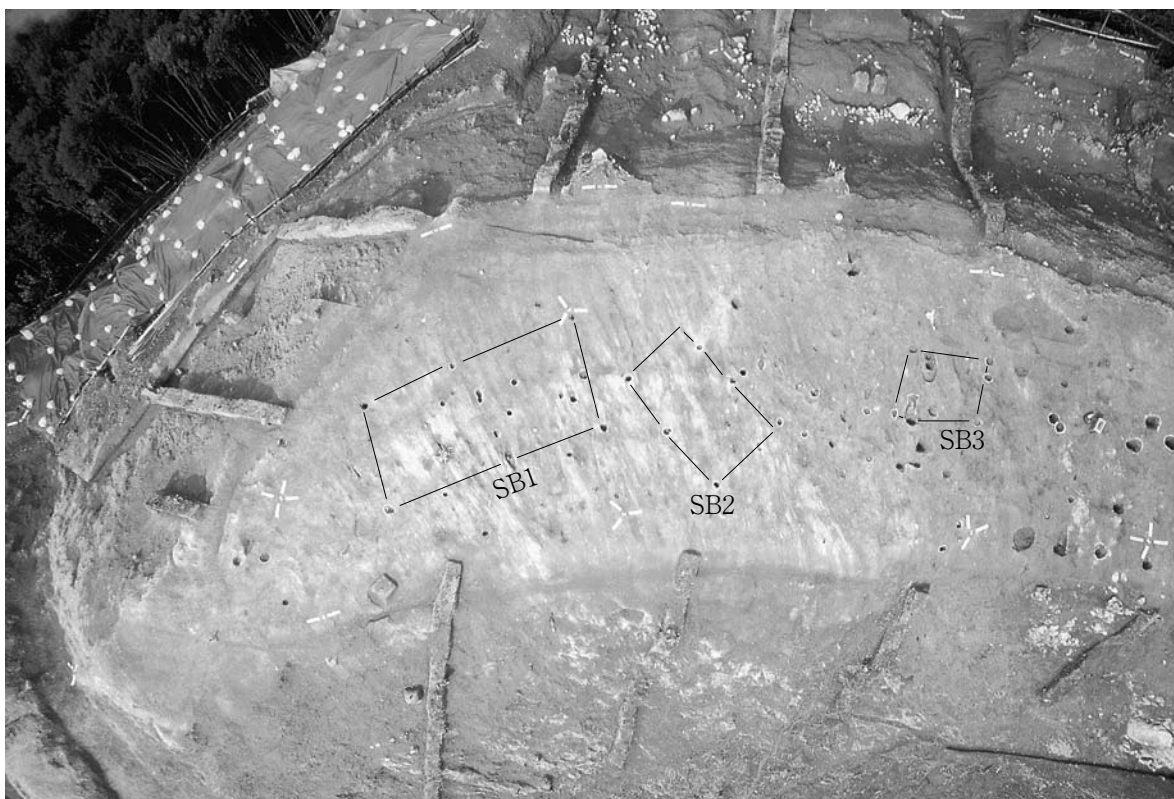
豎堀3東西セクション



豎堀1集石



豎堀3



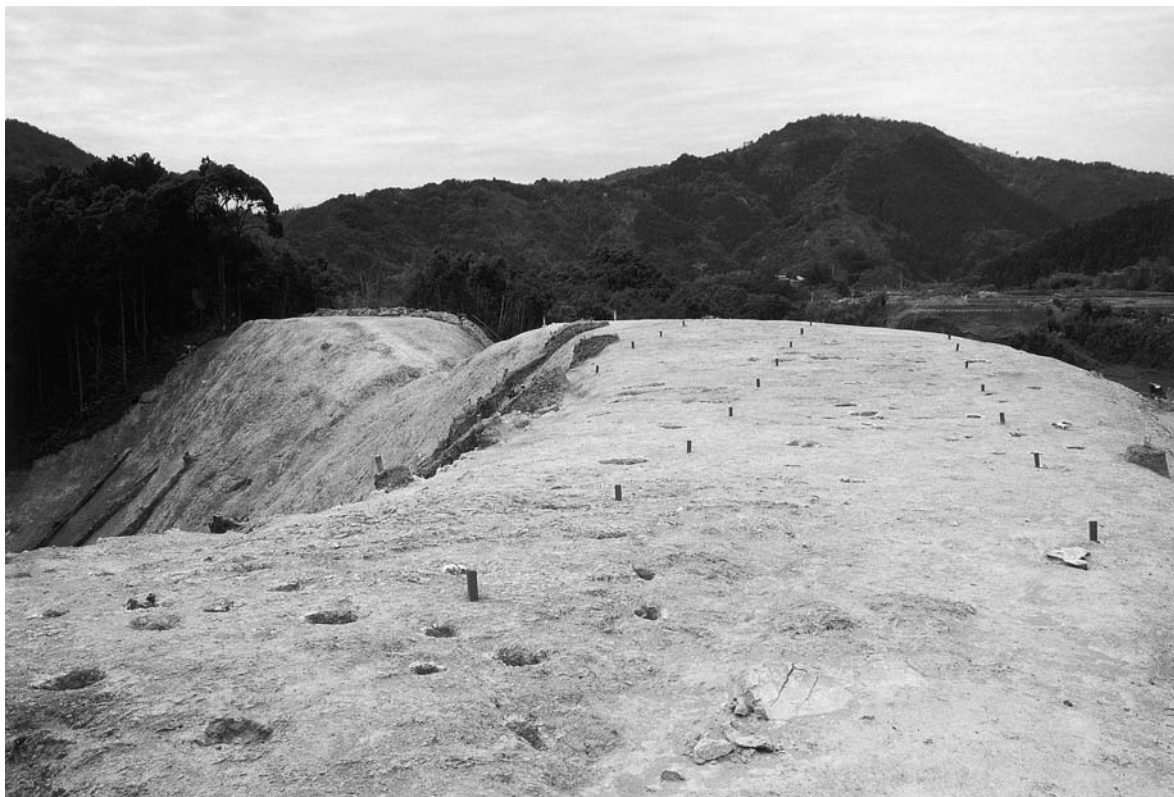
曲輪2、SB1・2・3



曲輪2、SB4・5・6



堀切部・曲輪2



曲輪2・3

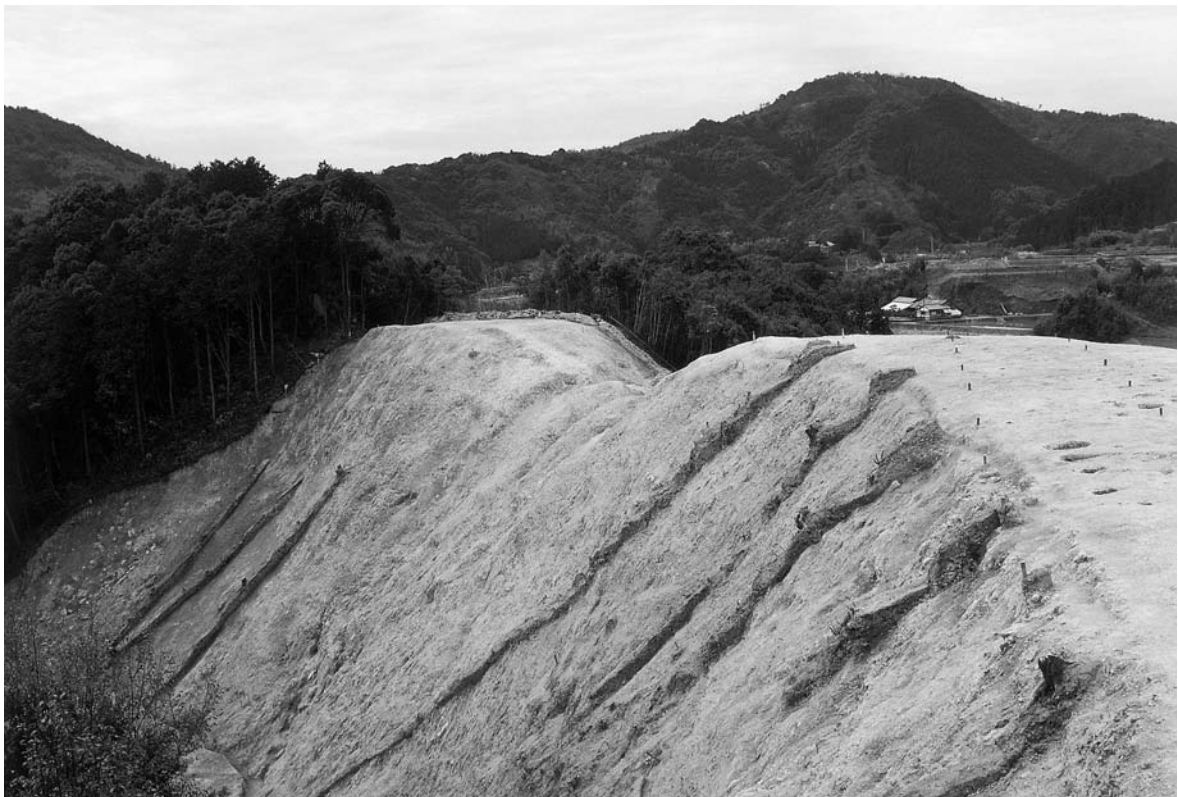


曲輪2・Pit群

PL.20



曲輪4集石1



曲輪2・3東斜面



曲輪3作業風景



堀切・曲輪3東斜面

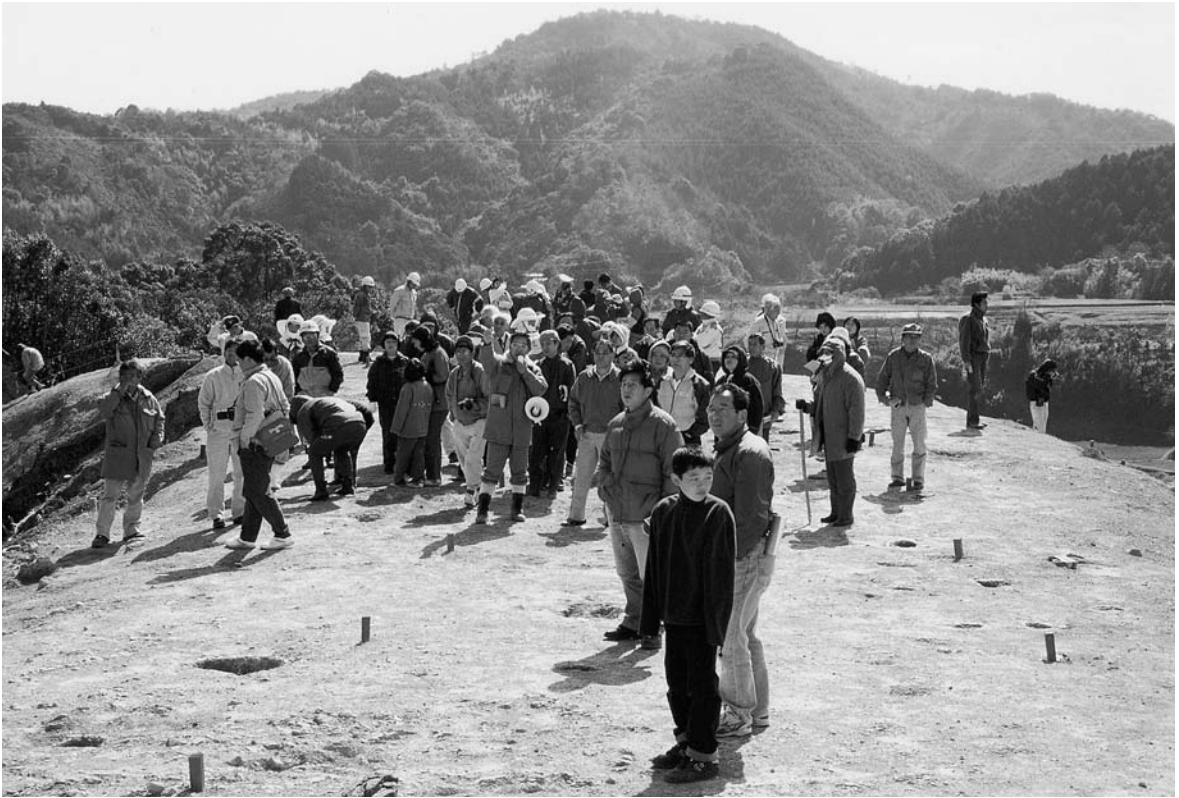
PL.22



曲輪2東斜面



東斜面下集石2

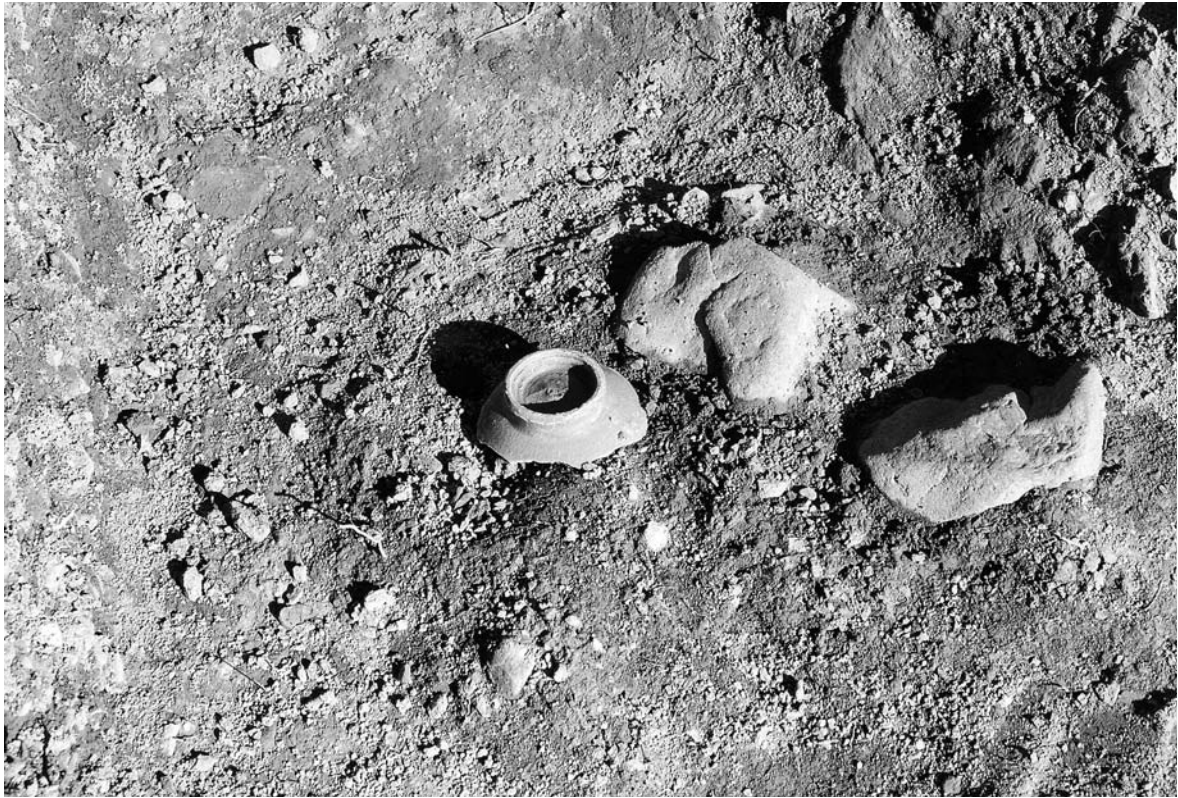


現地説明会風景



同上

PL.24



曲輪2青磁碗出土状況



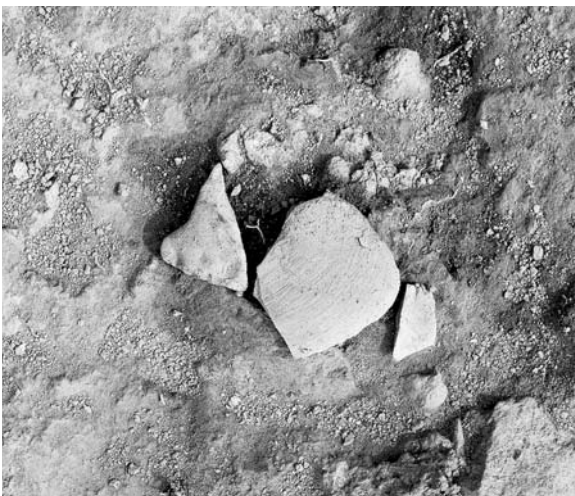
曲輪2備前播鉢出土状況



青磁



青磁



備前



唐津

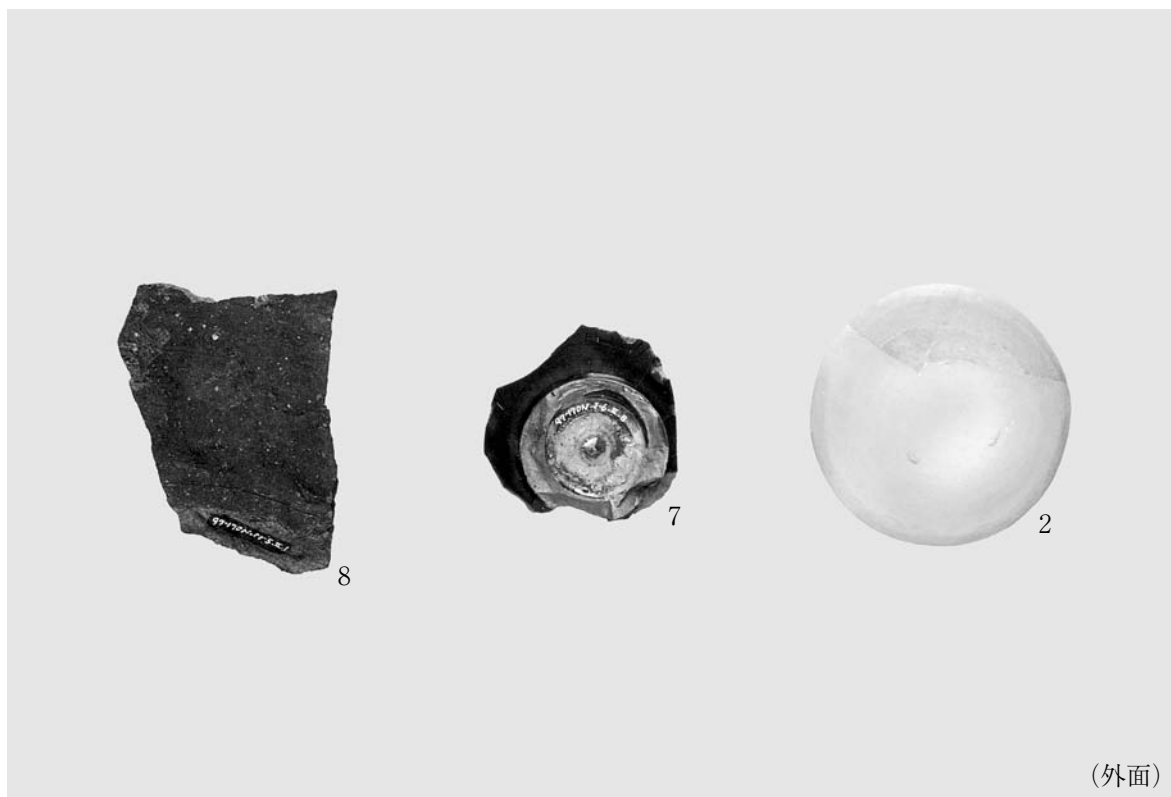
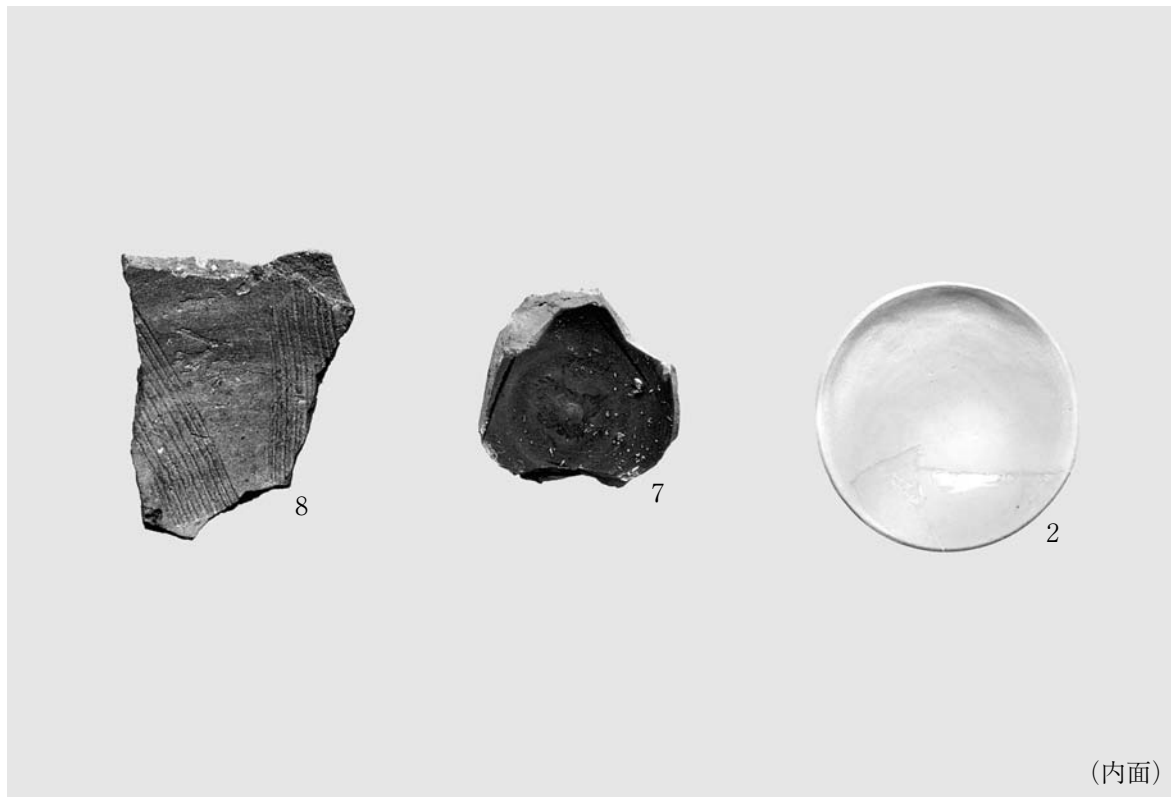


備前

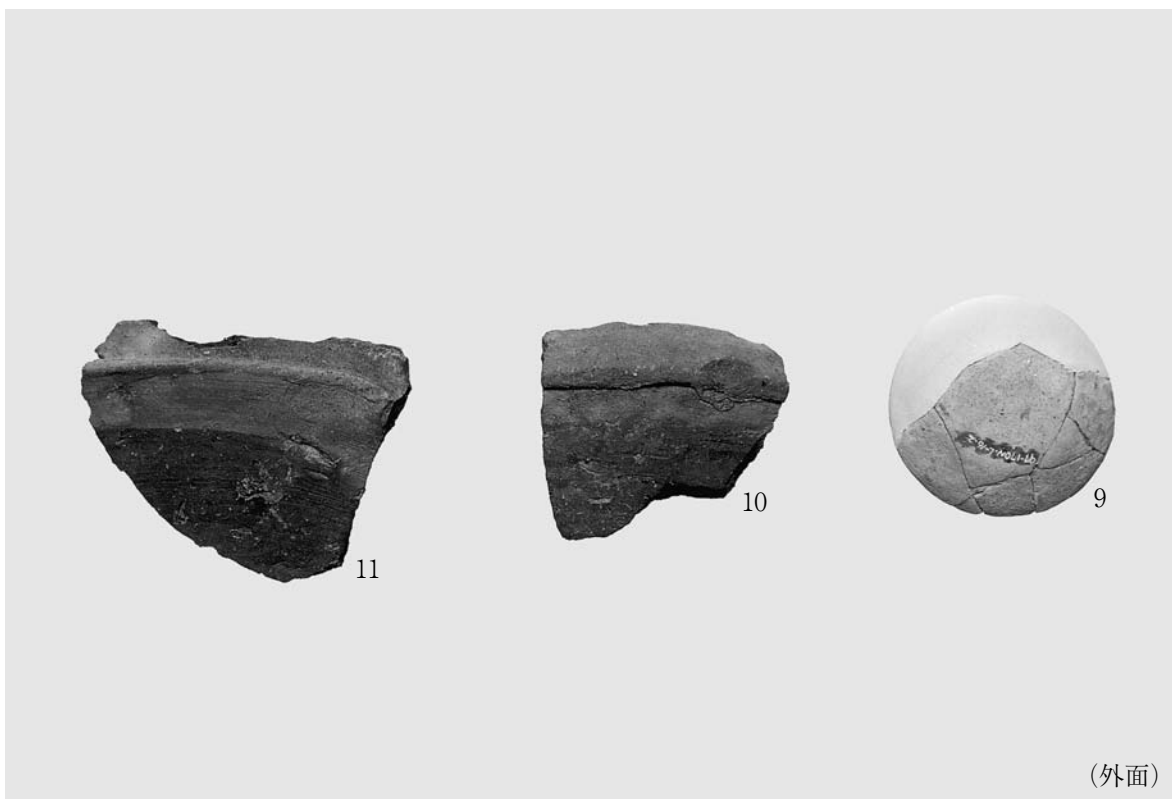
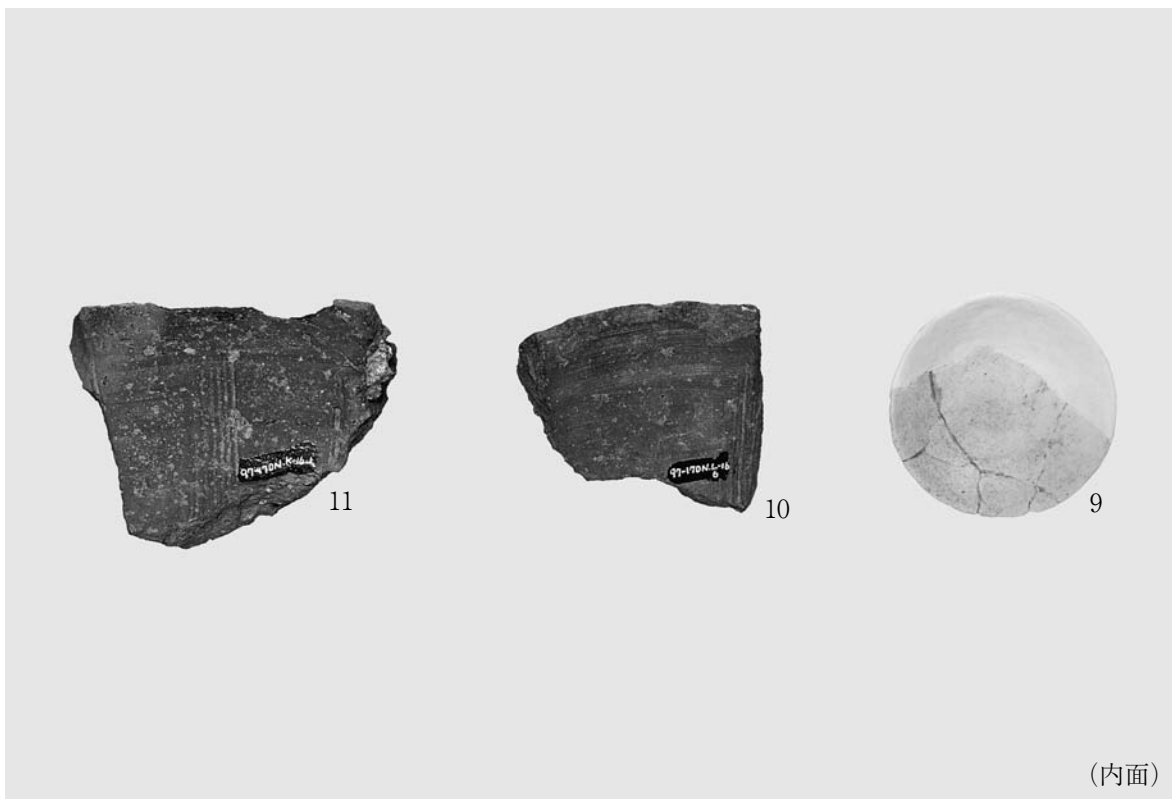
遺物出土状況



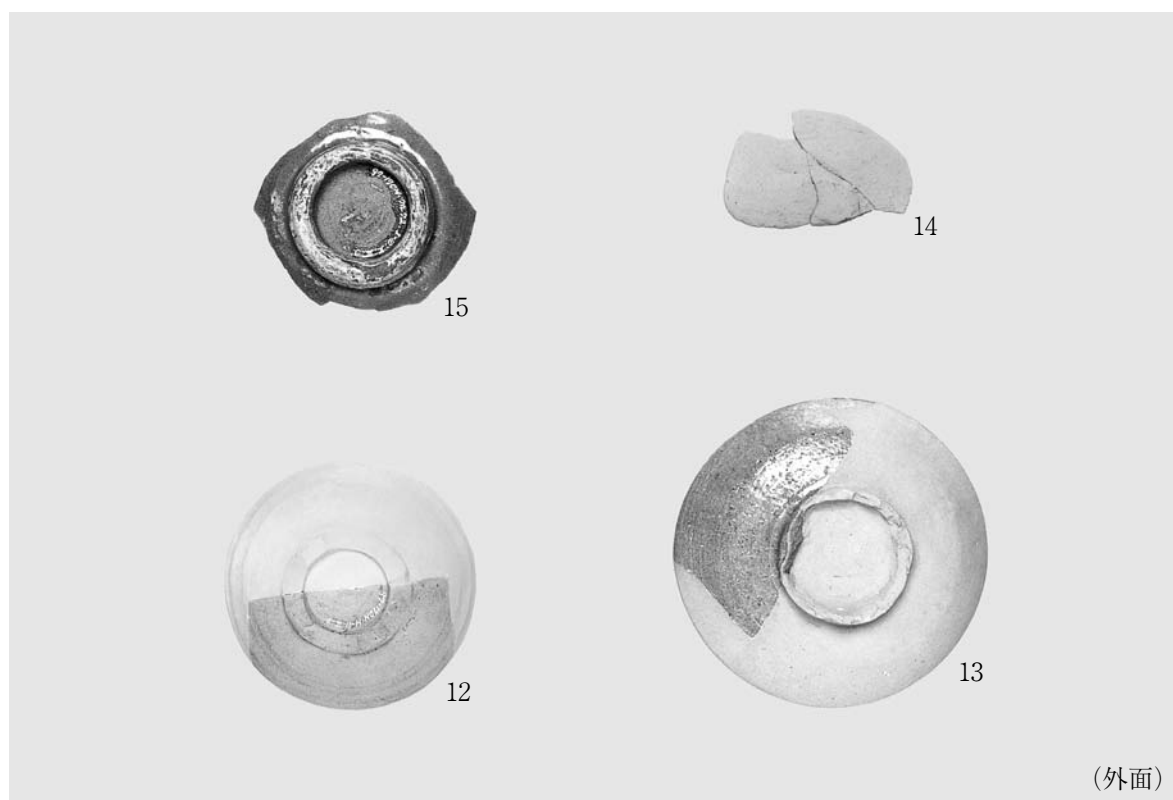
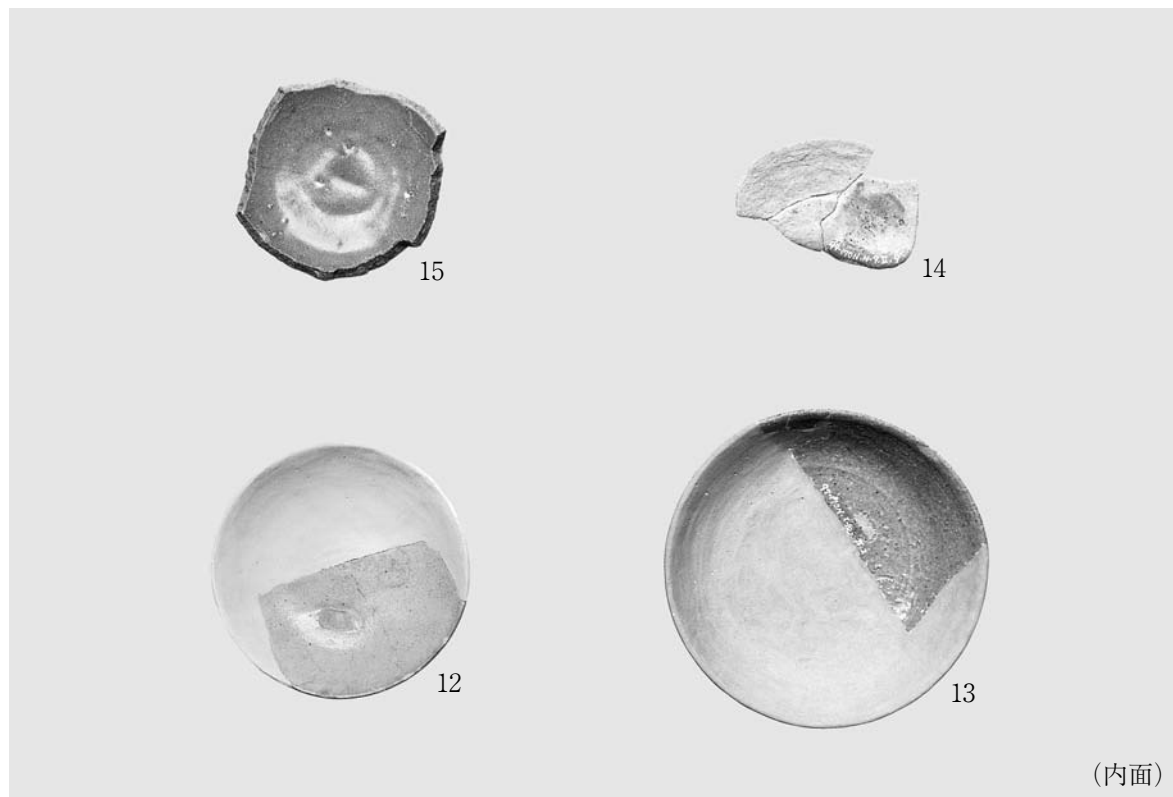
白磁 (Pit内)

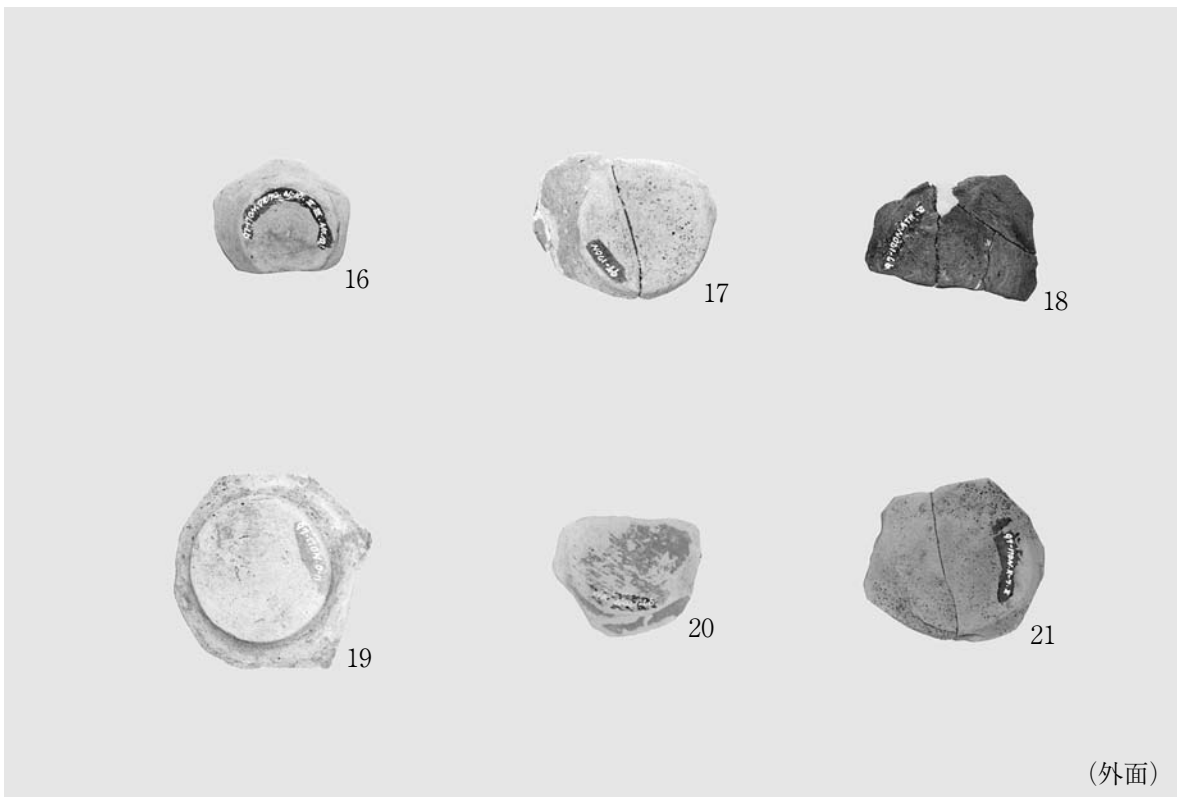
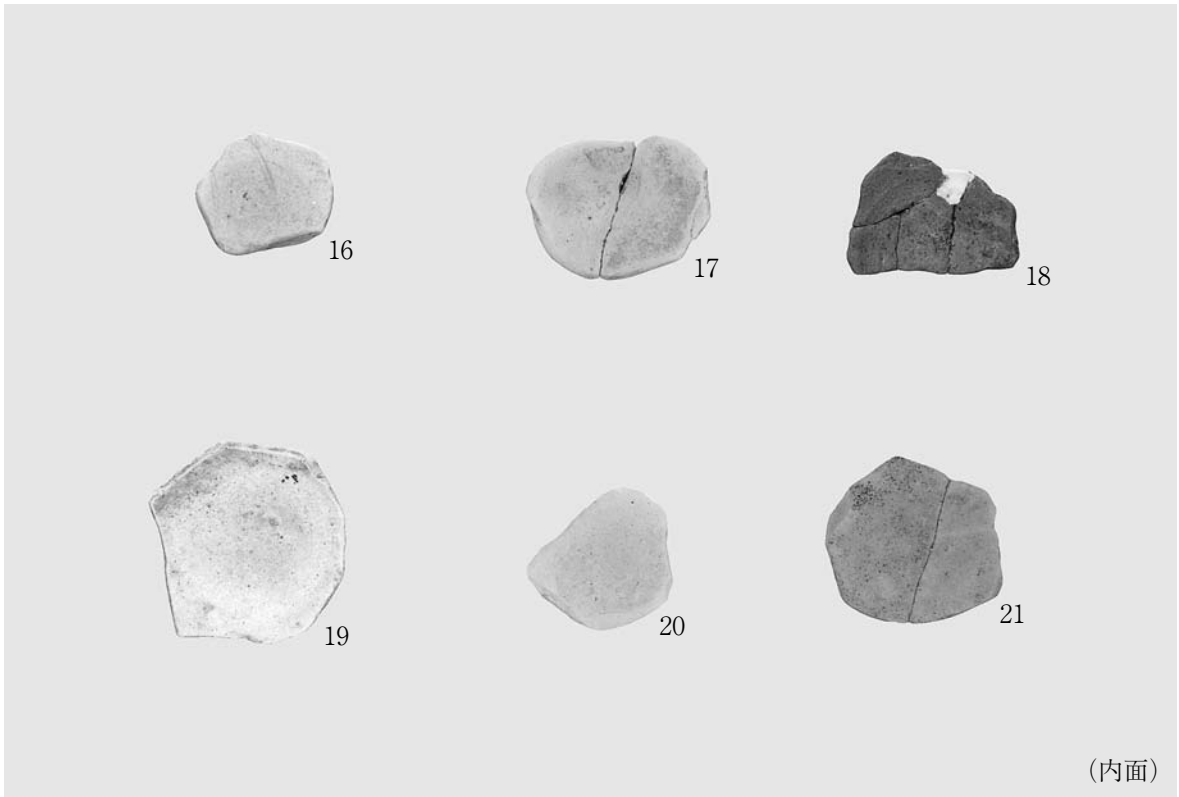


出土遺物1

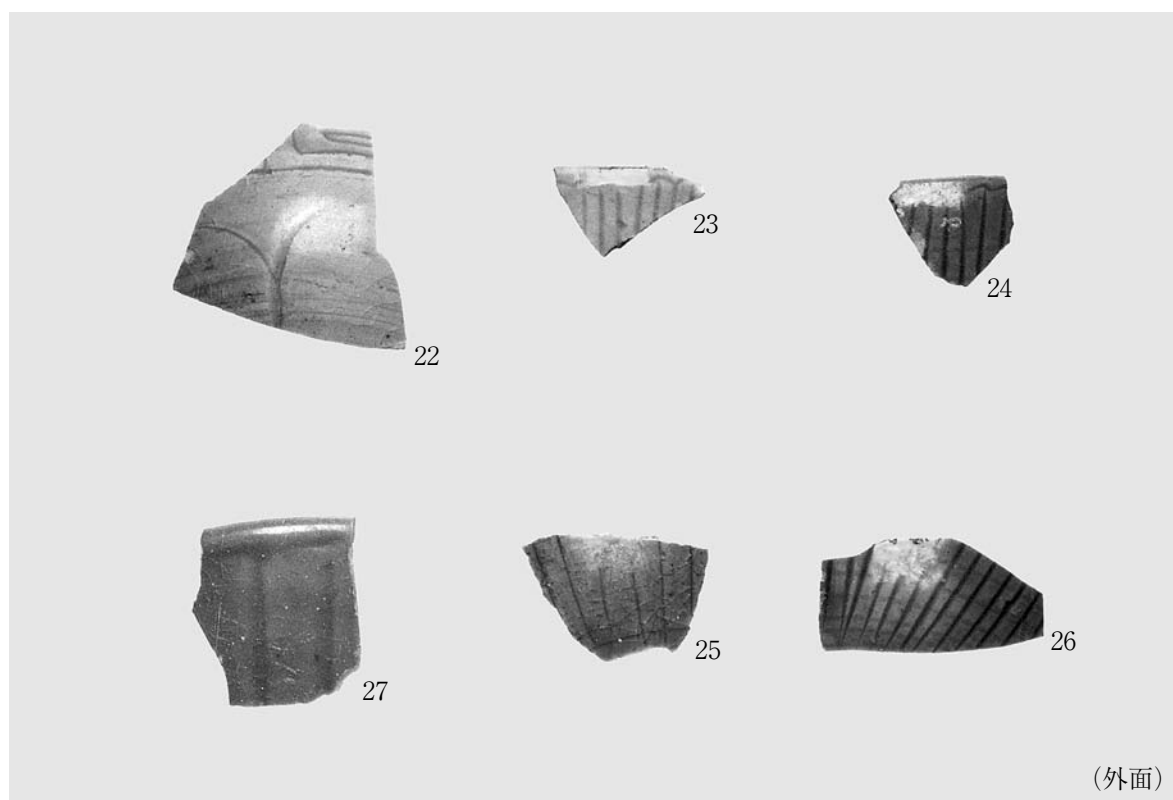
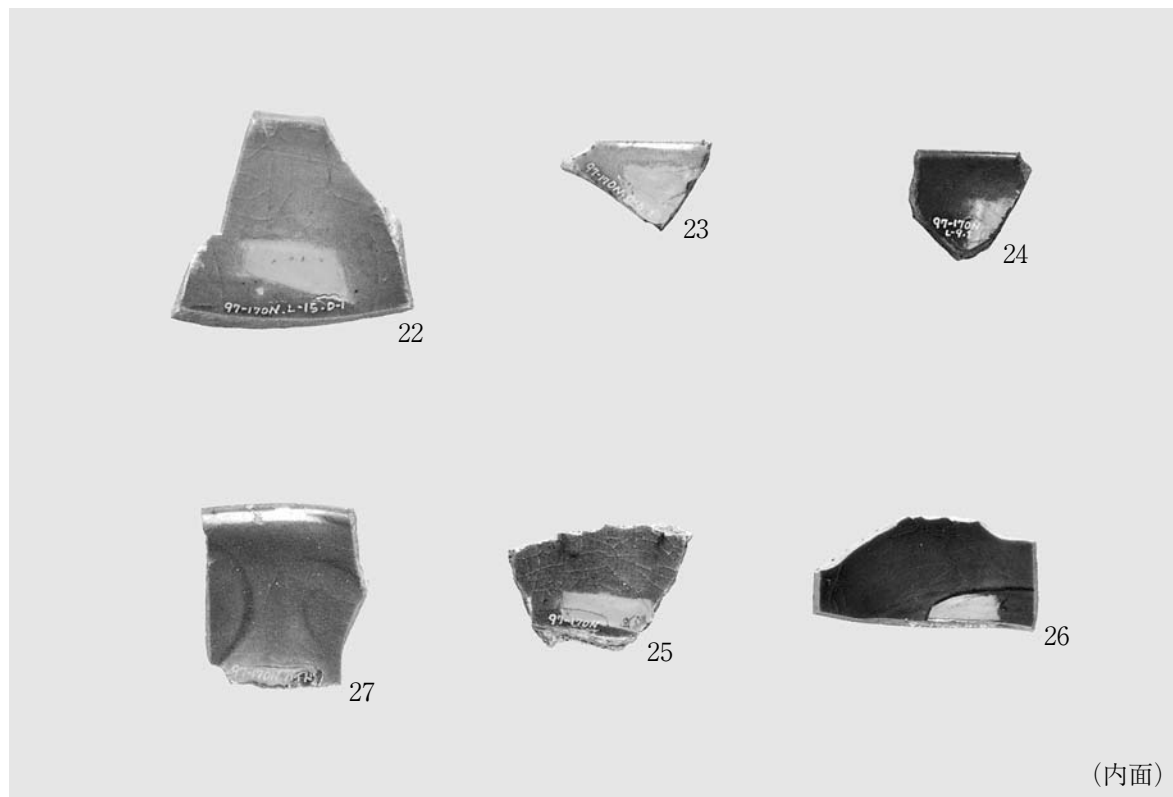


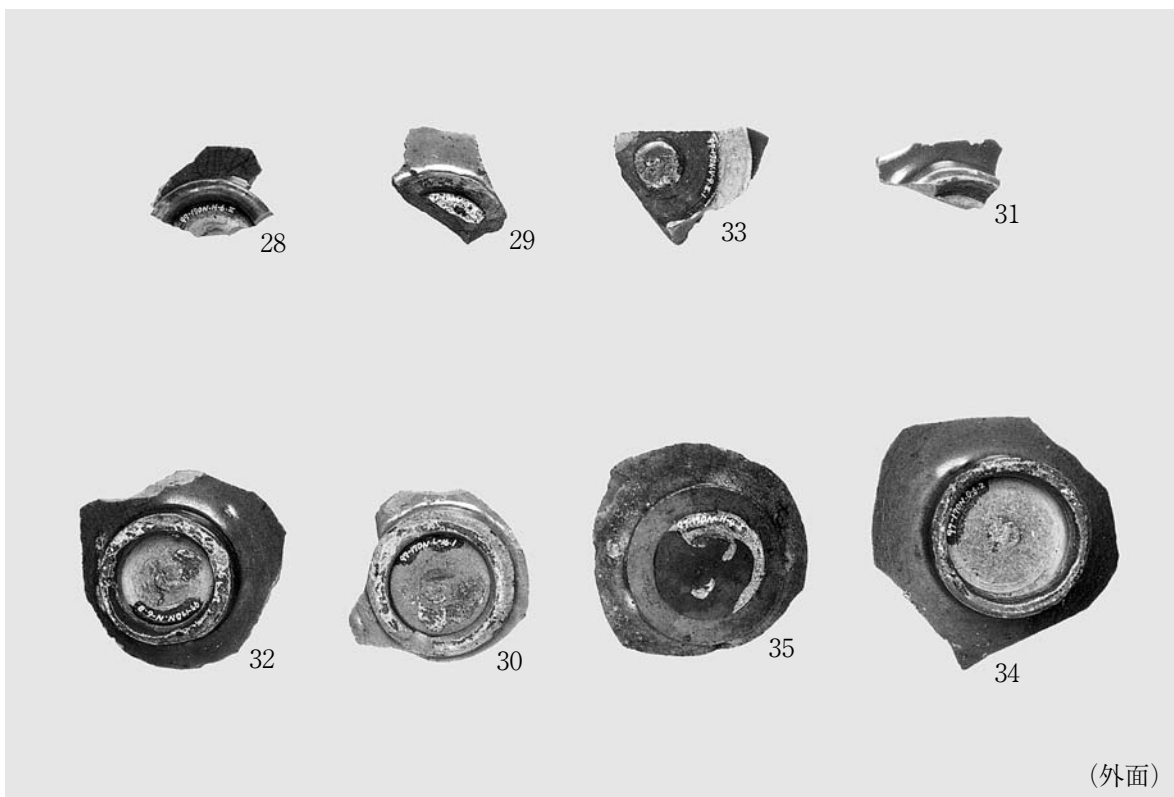
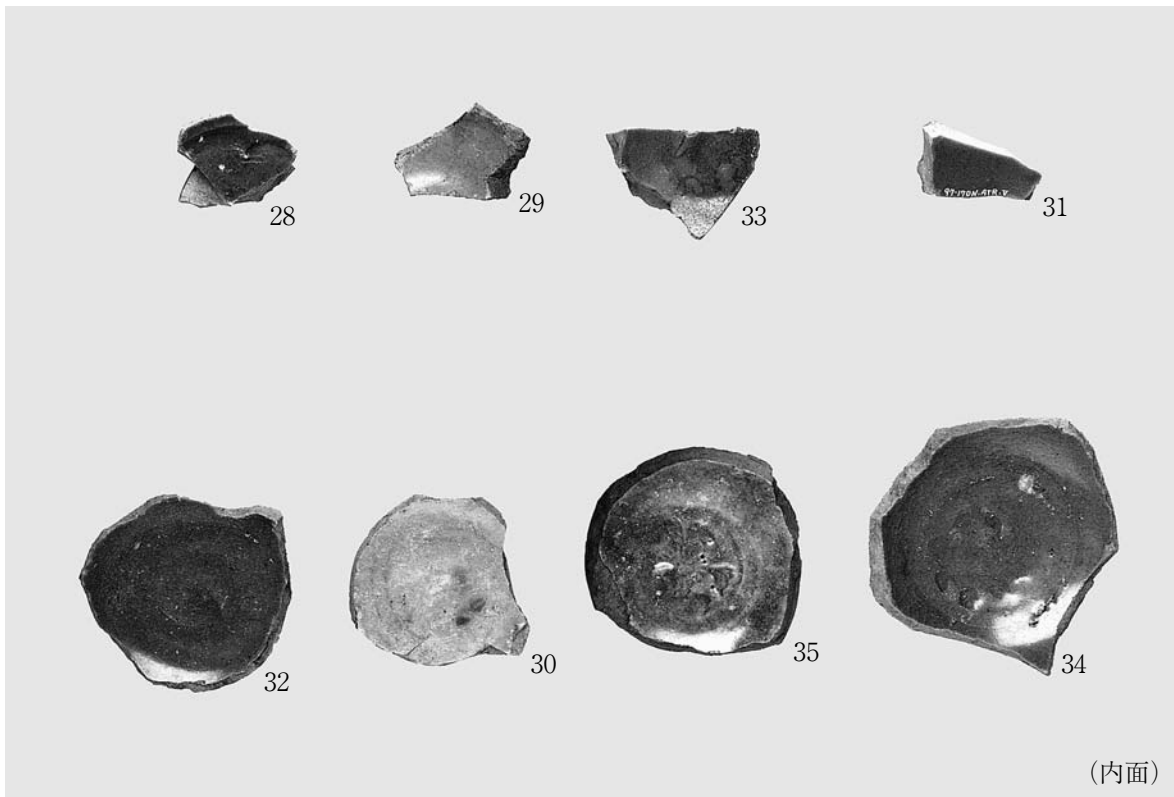
出土遺物2



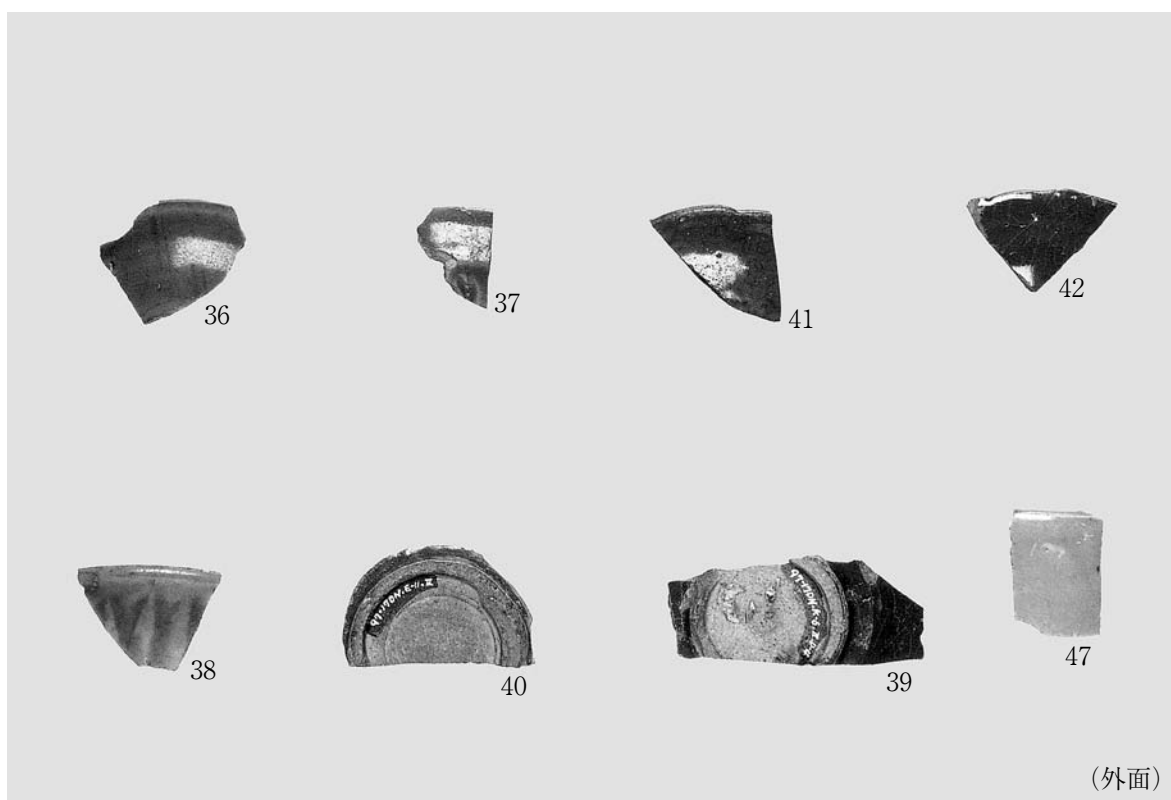
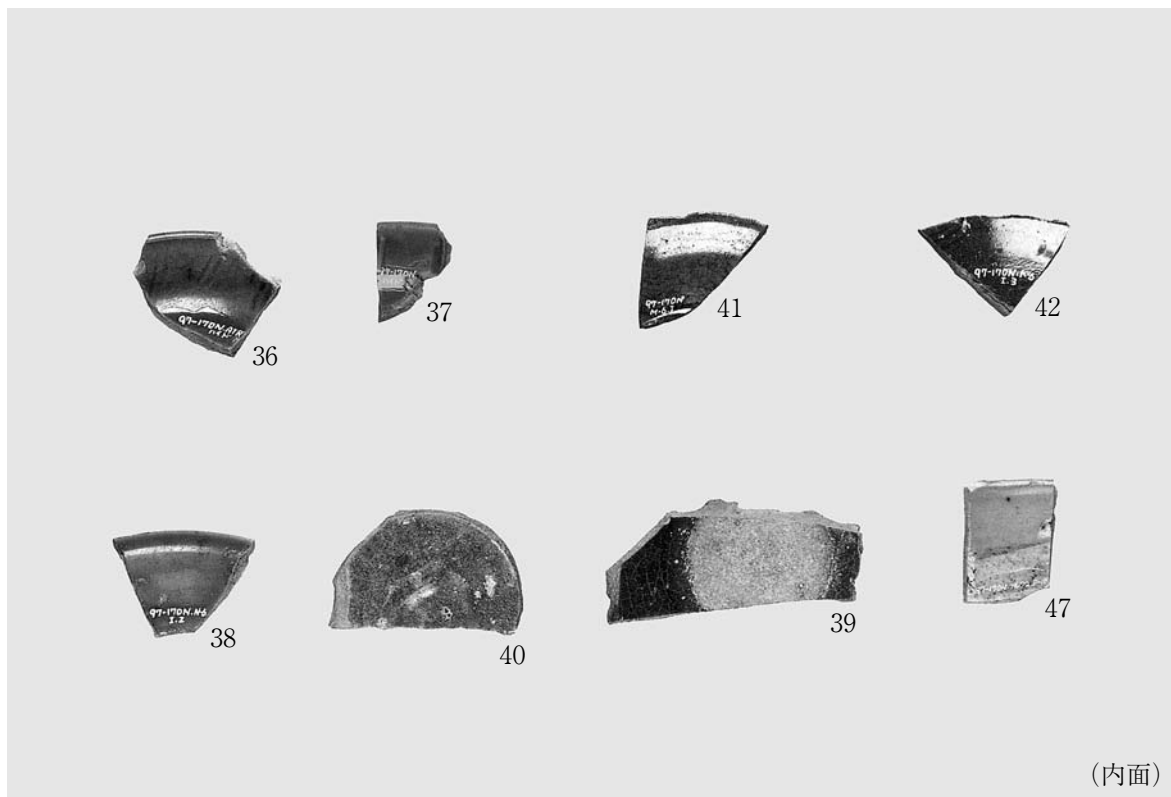


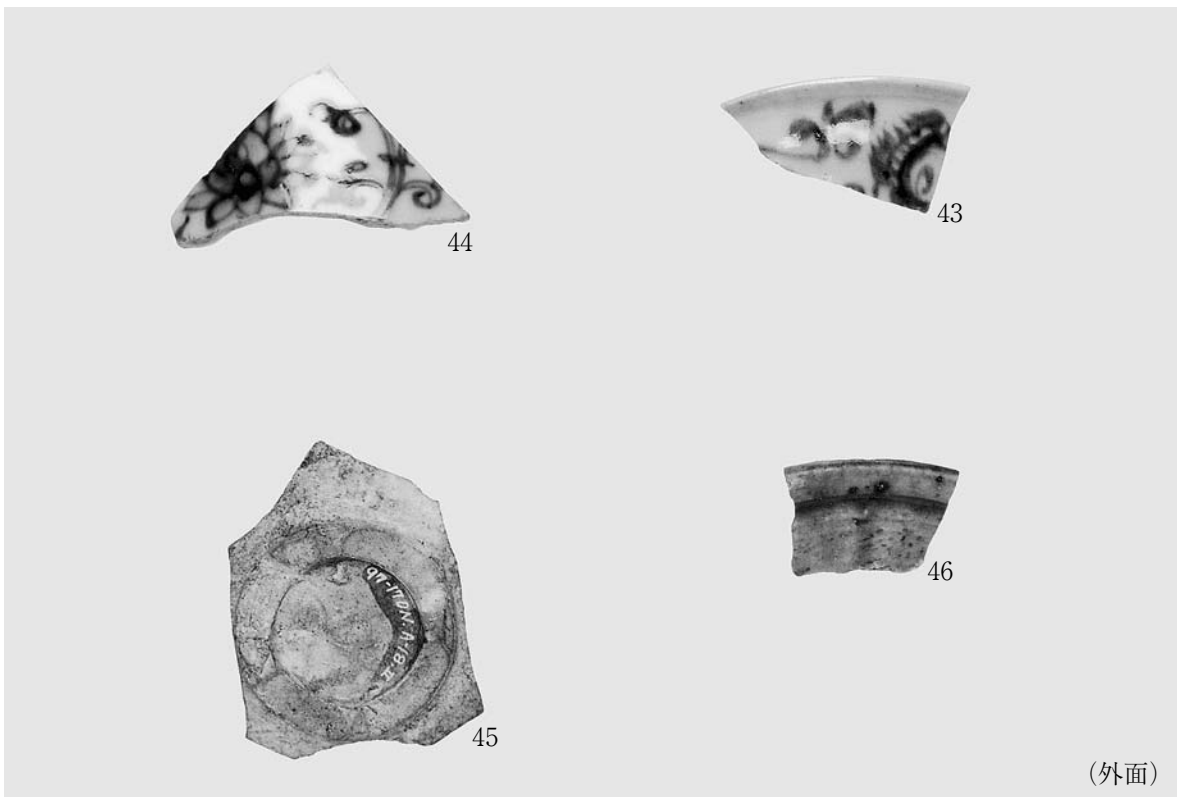
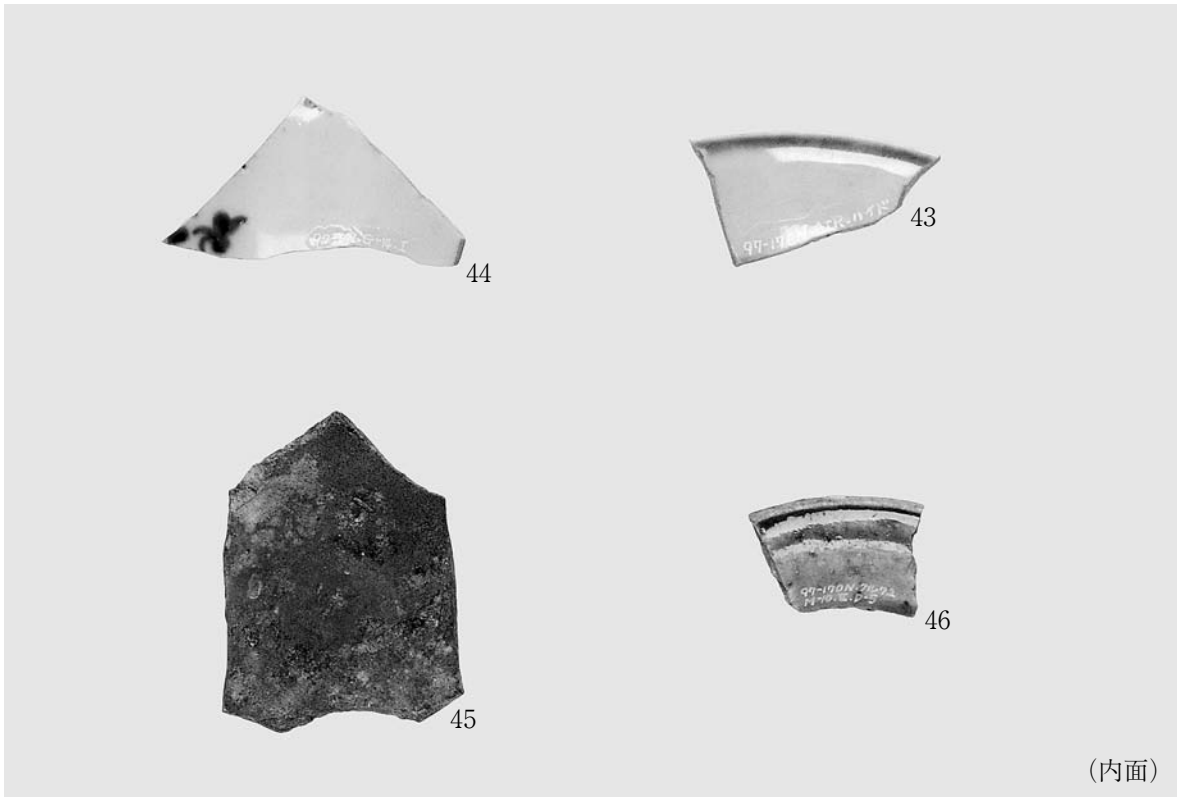
出土遺物4



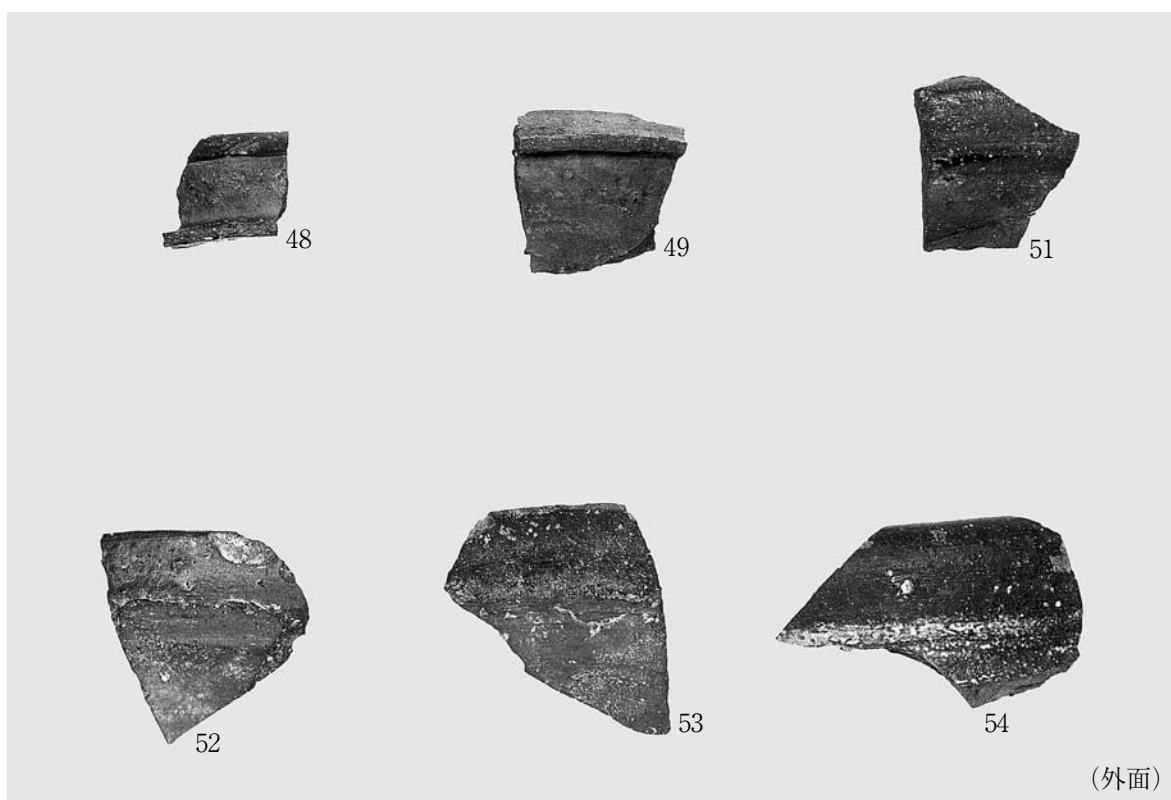
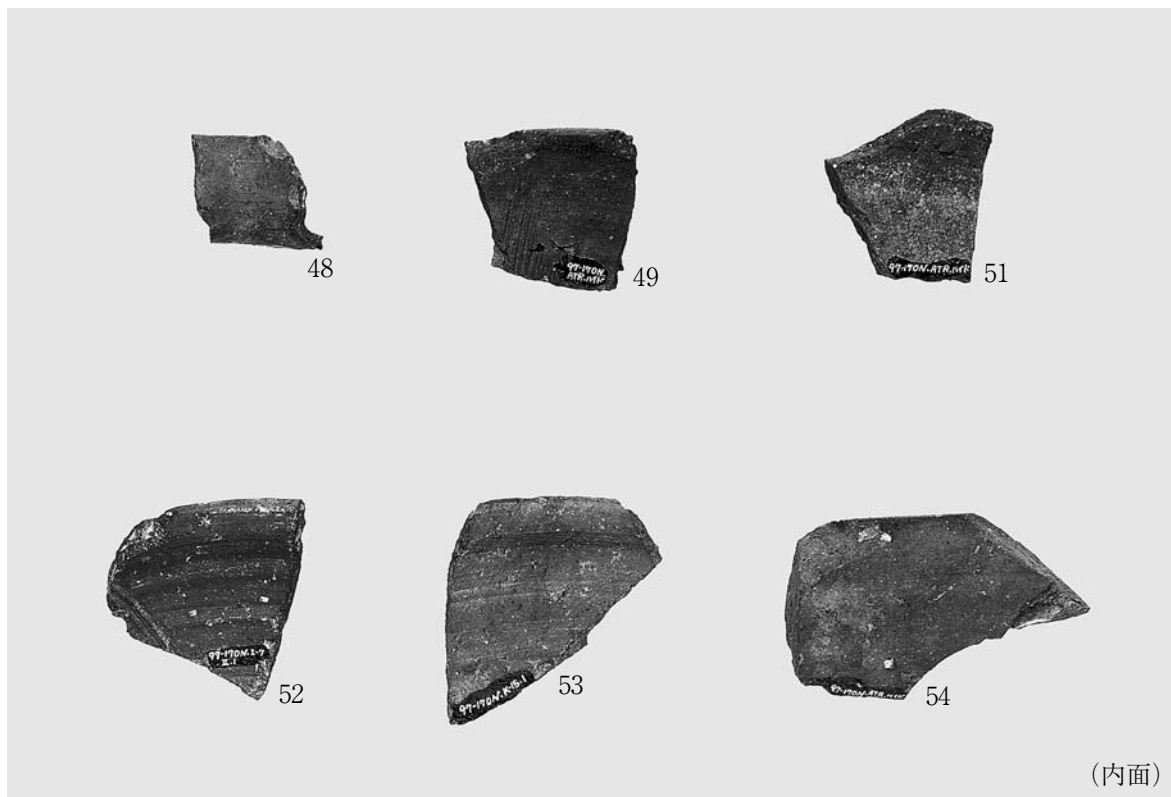


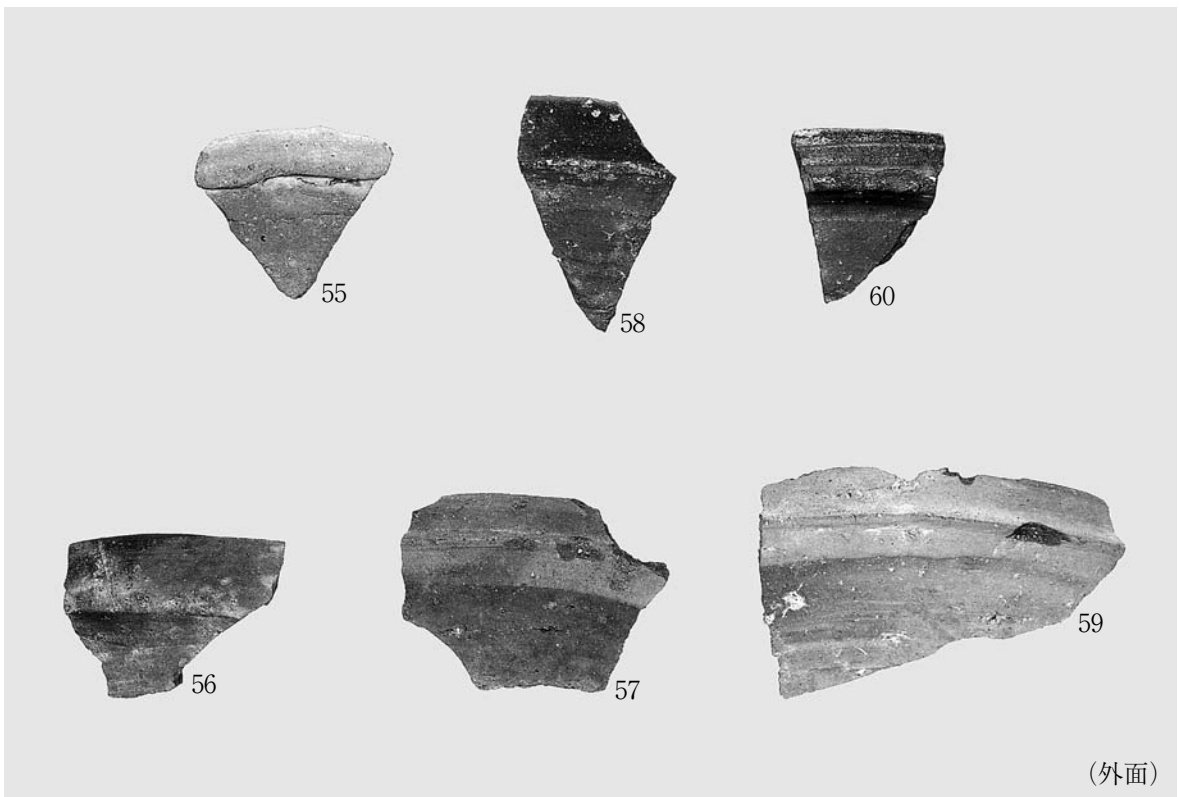
出土遺物6



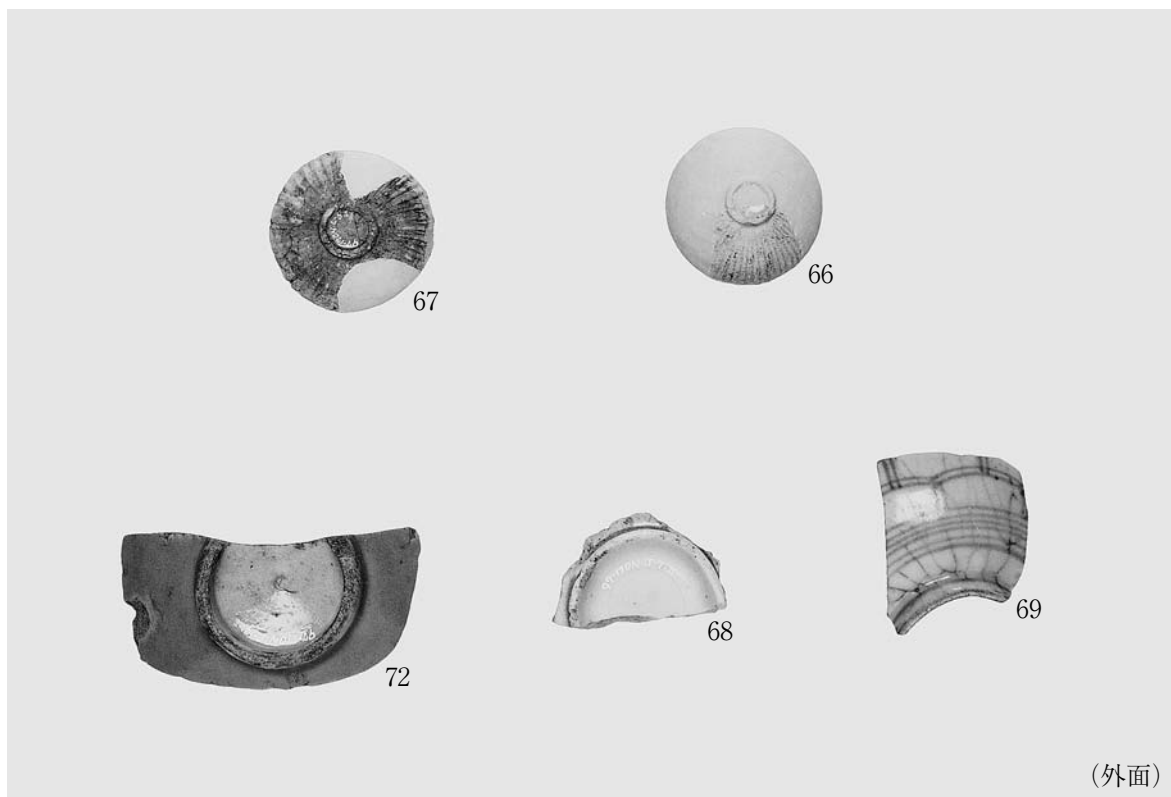
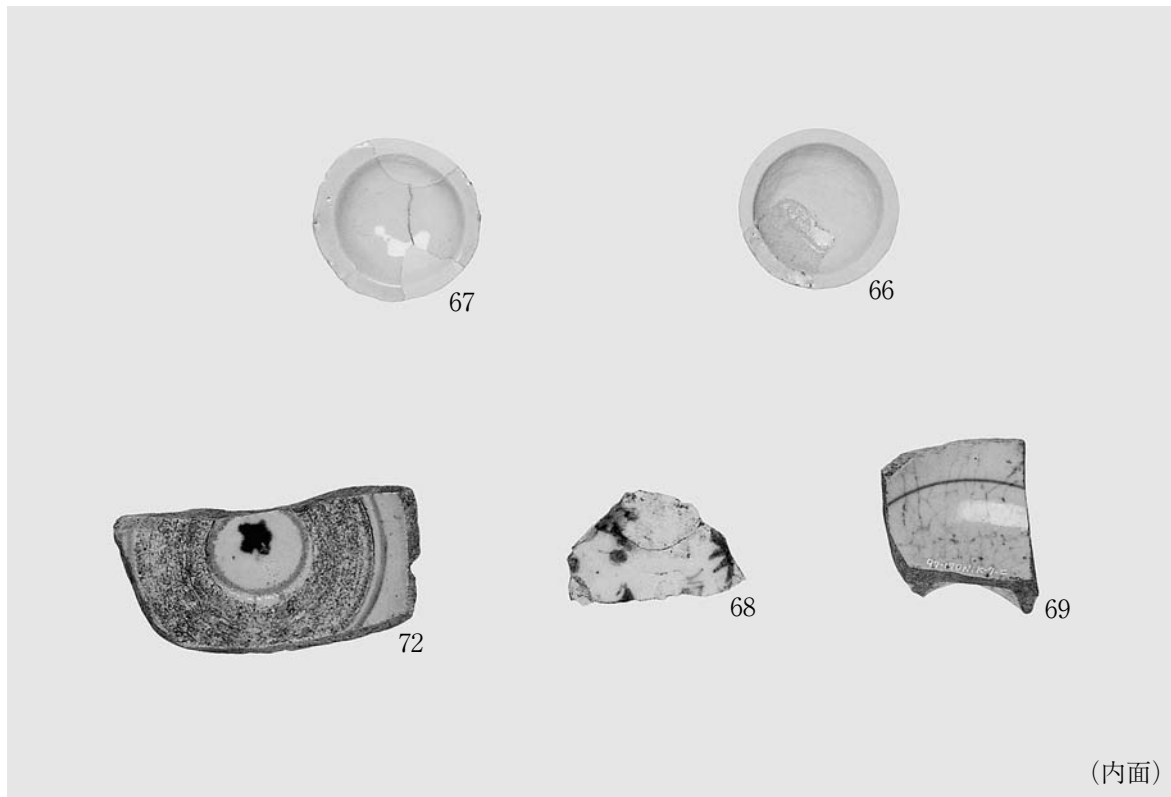


出土遺物8



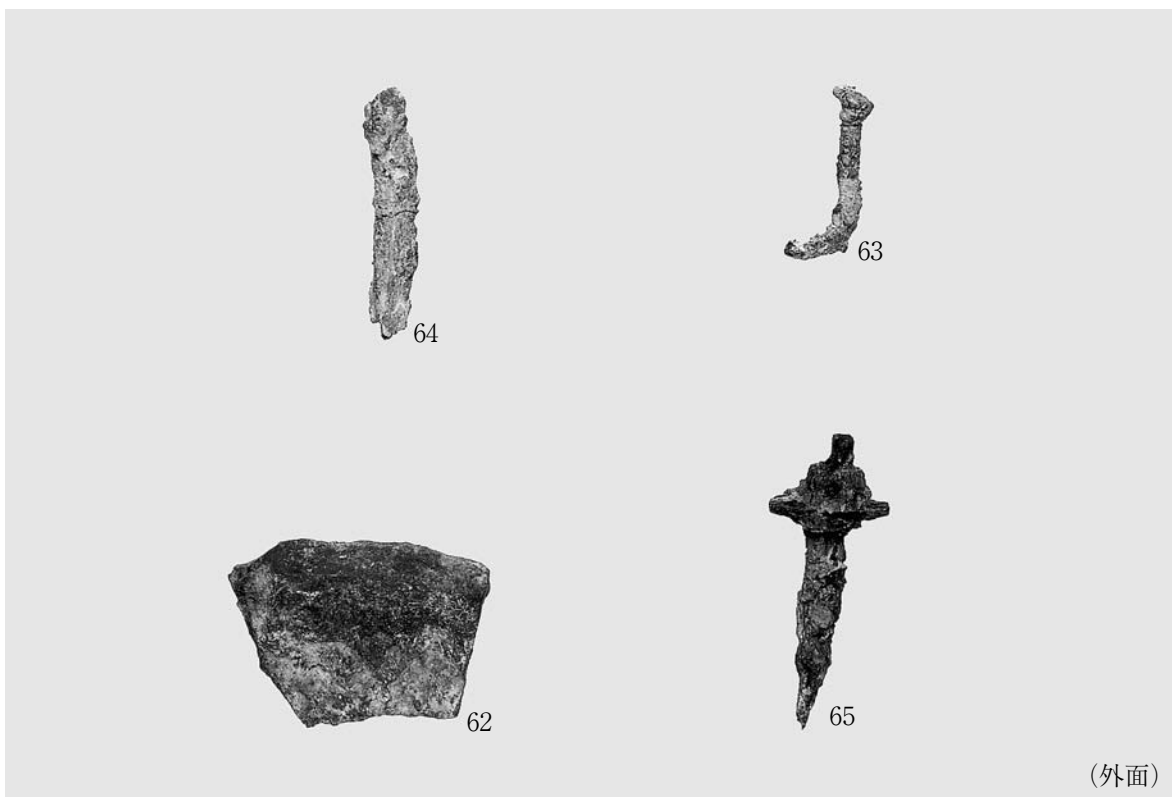


出土遺物10



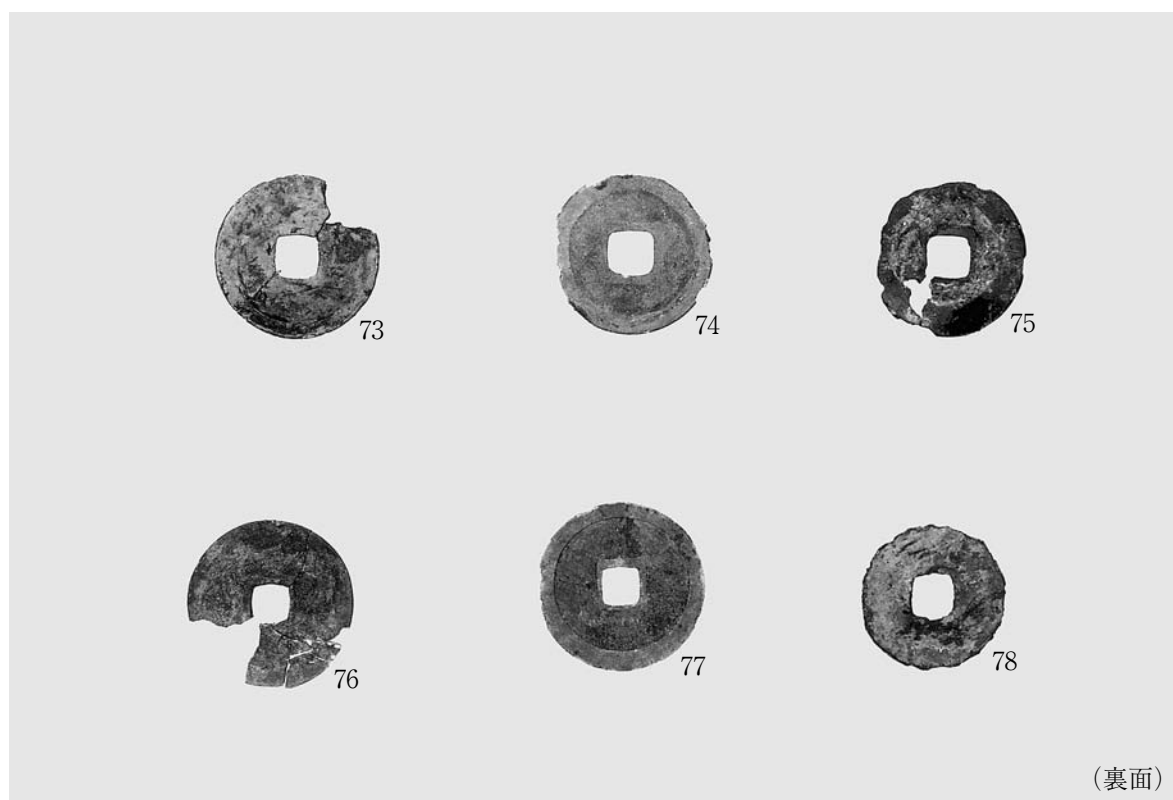
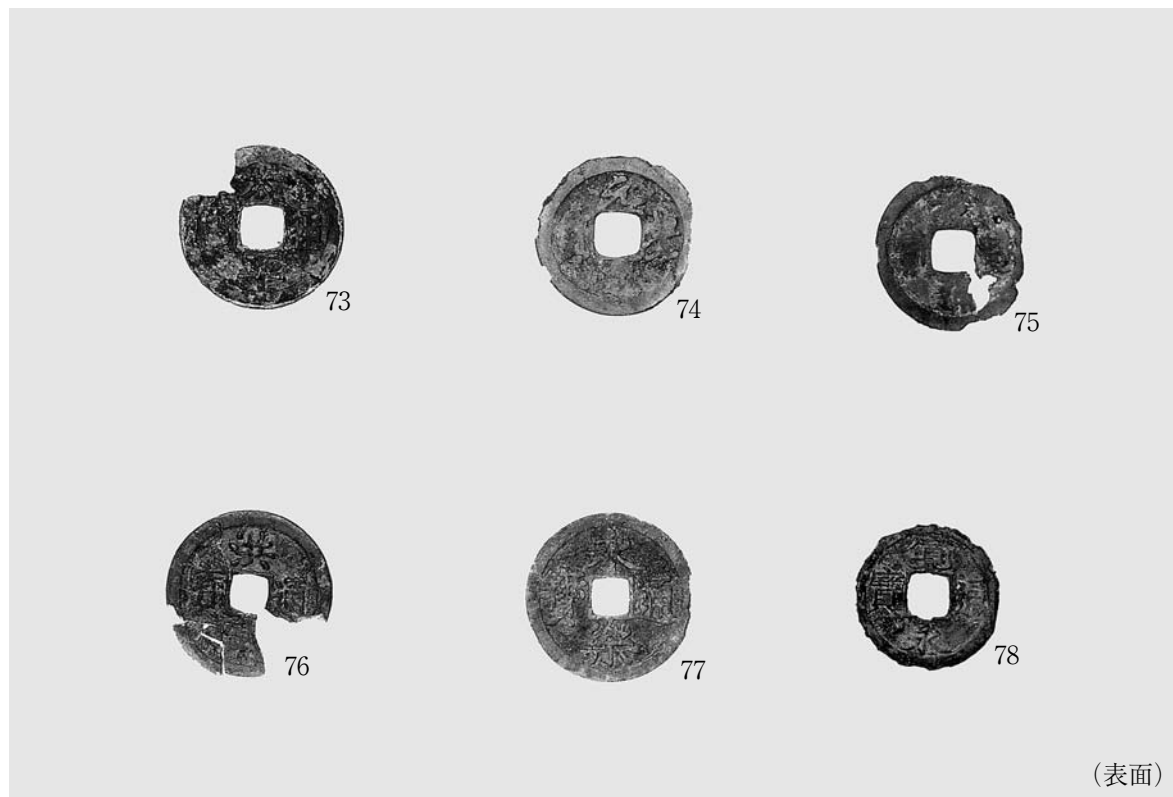


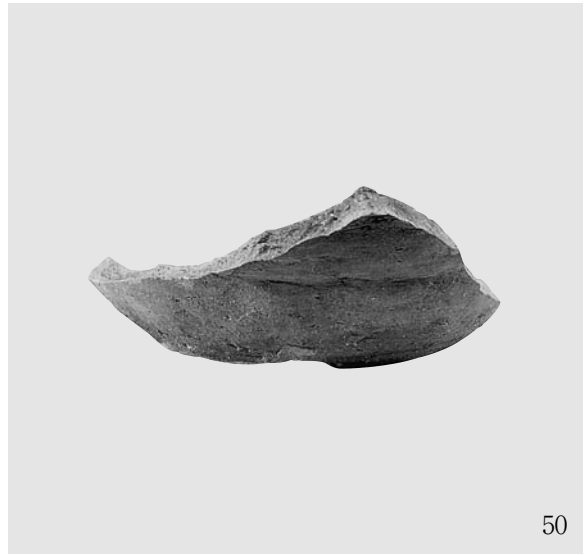
(内面)



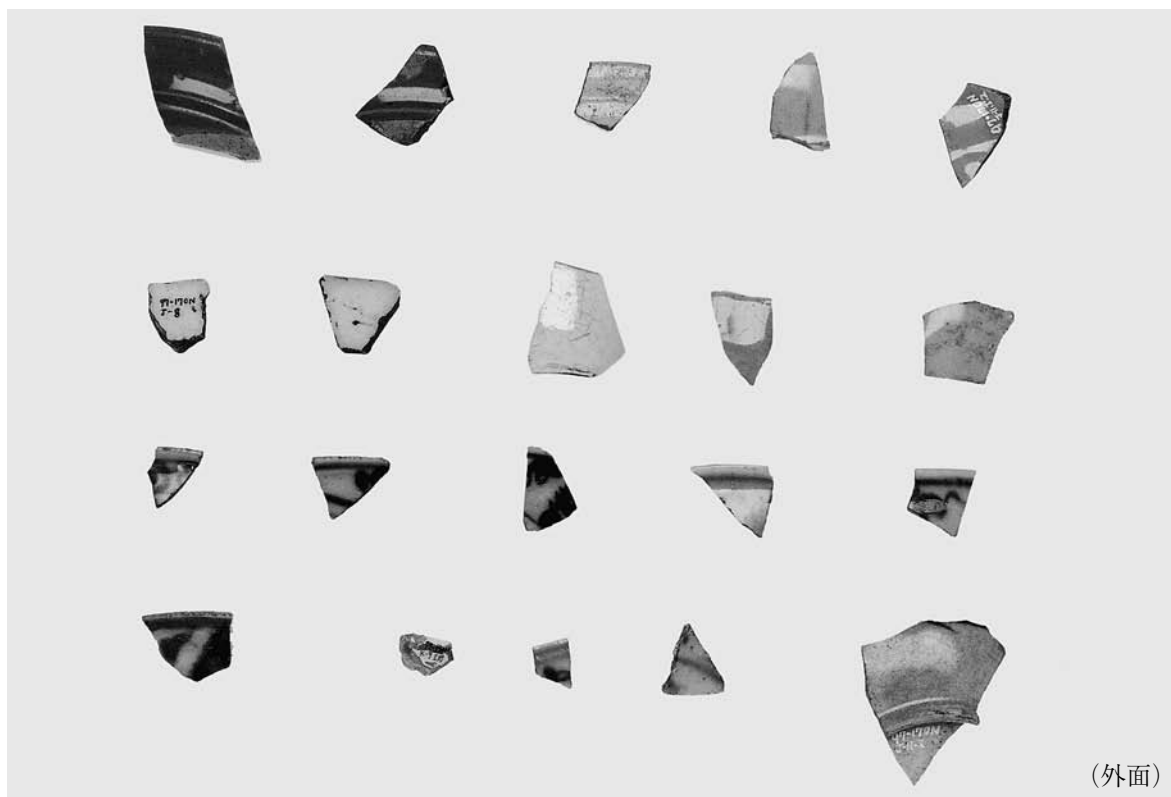
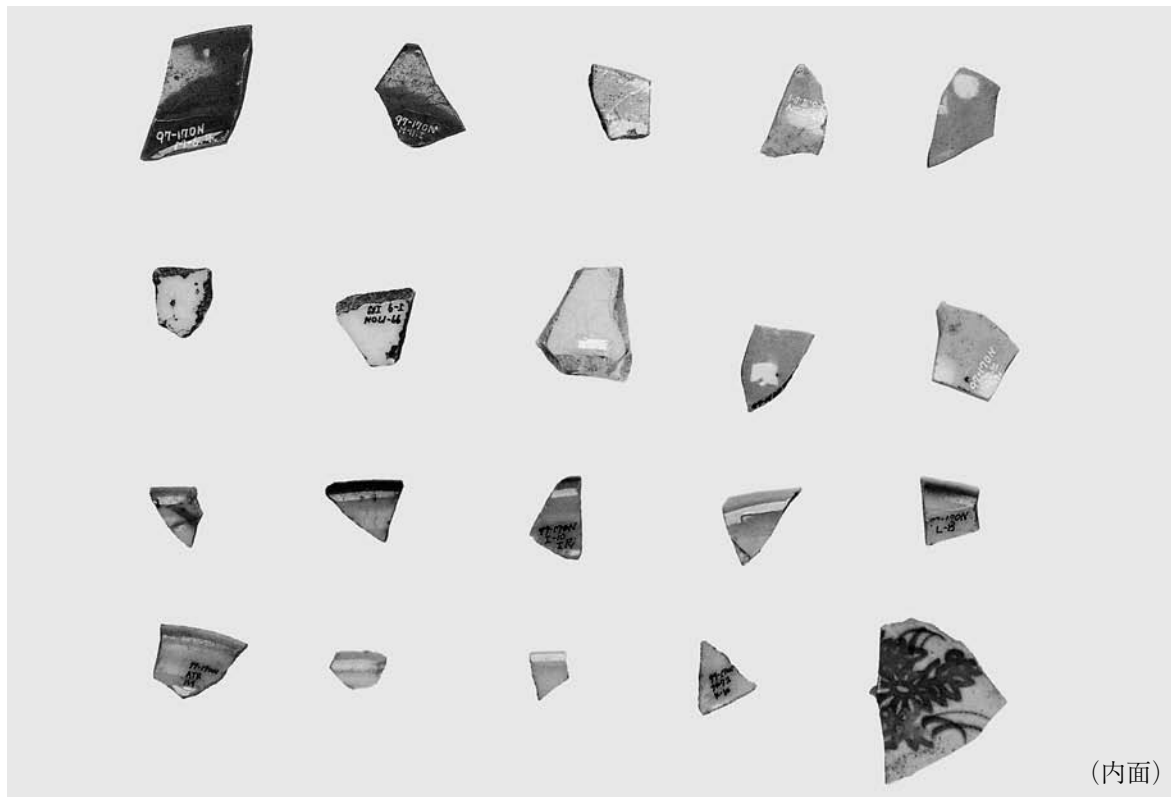
(外面)

出土遺物12

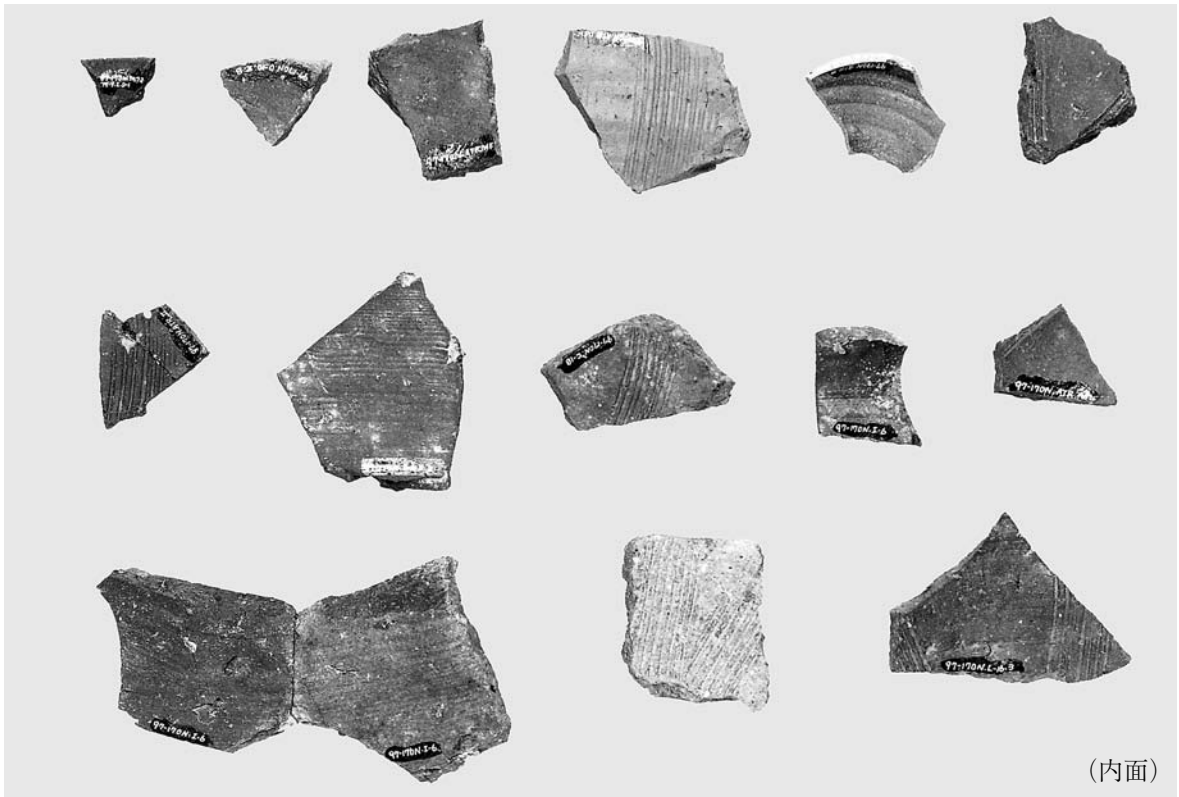




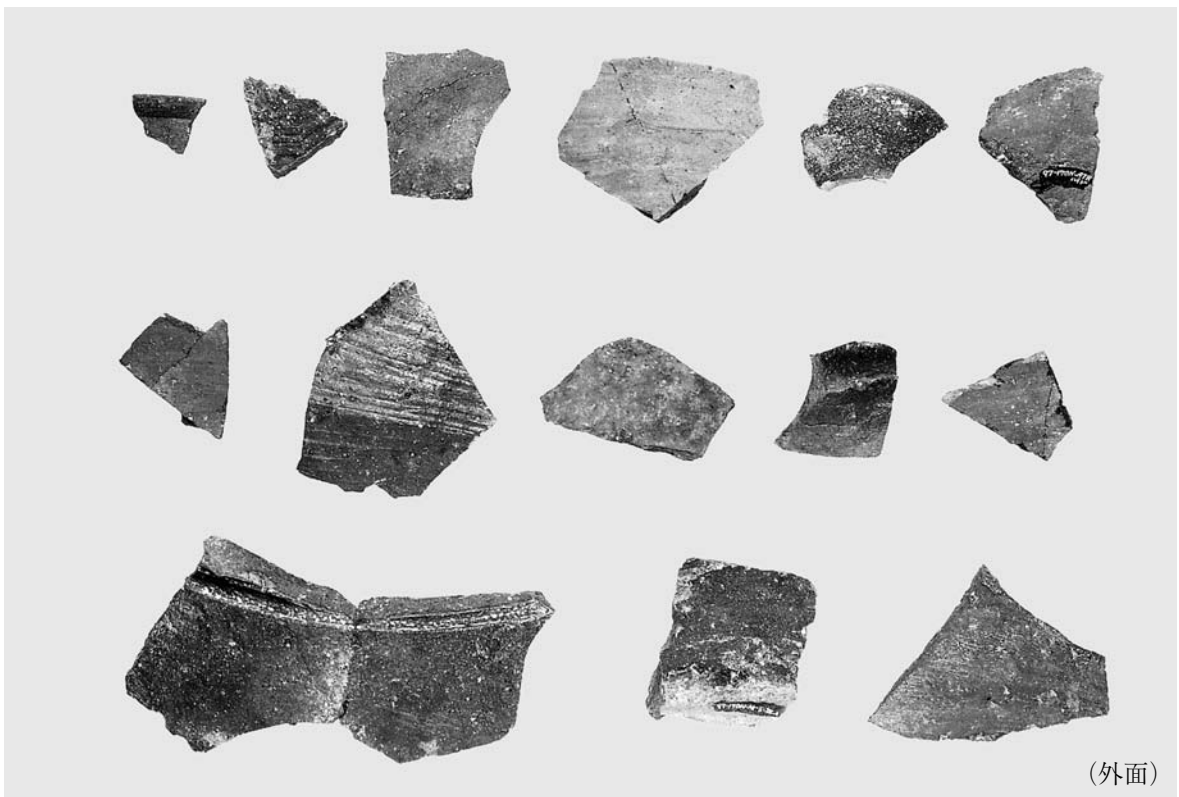
PL.40



出土遺物15

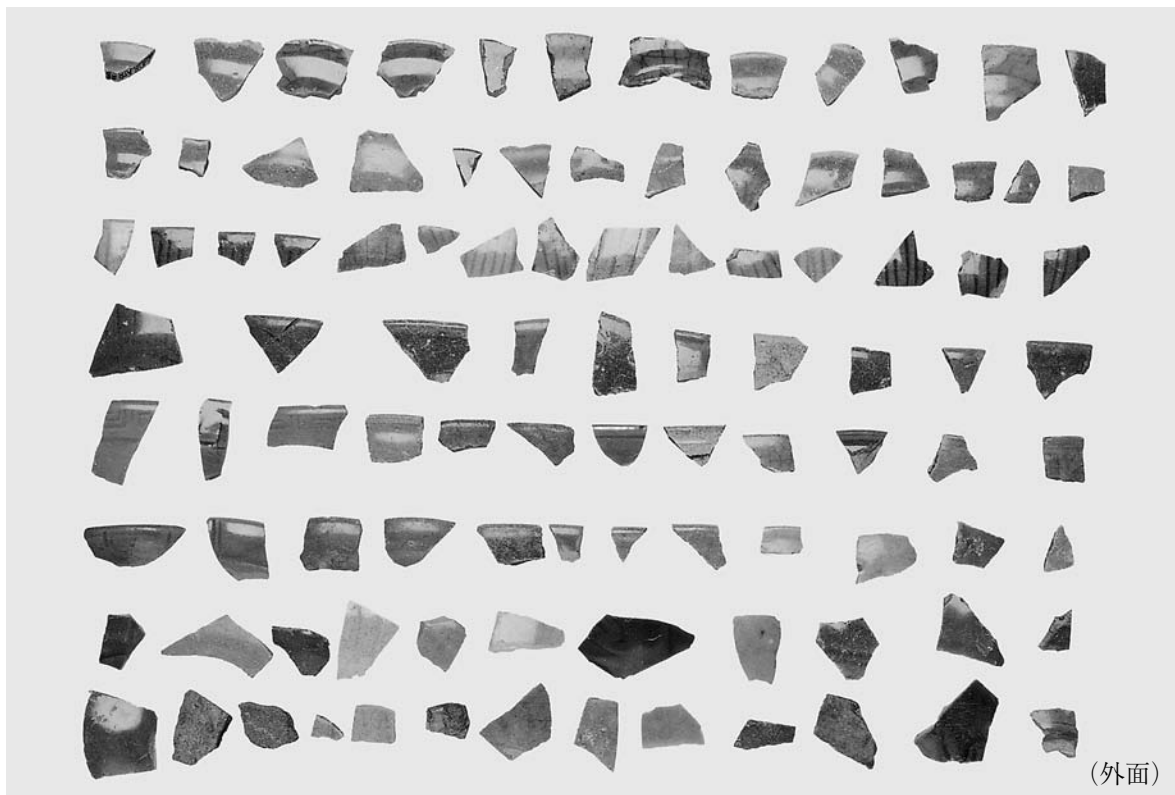
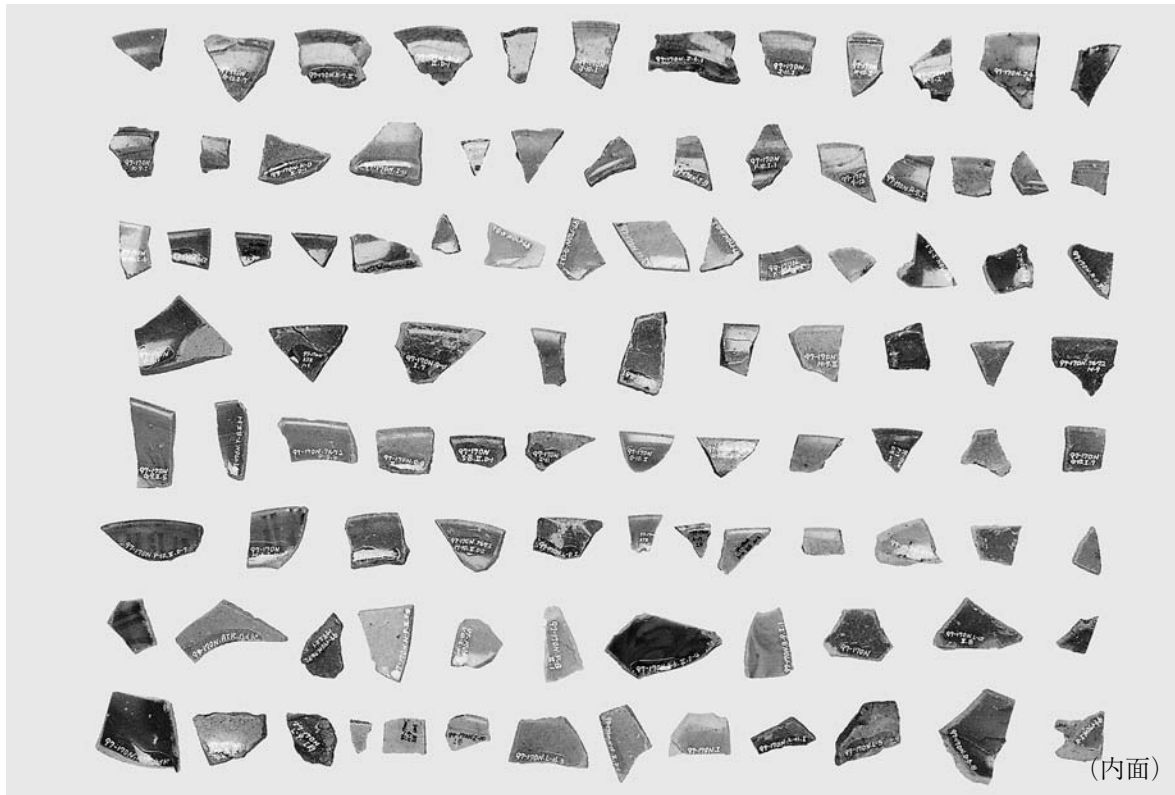


(内面)

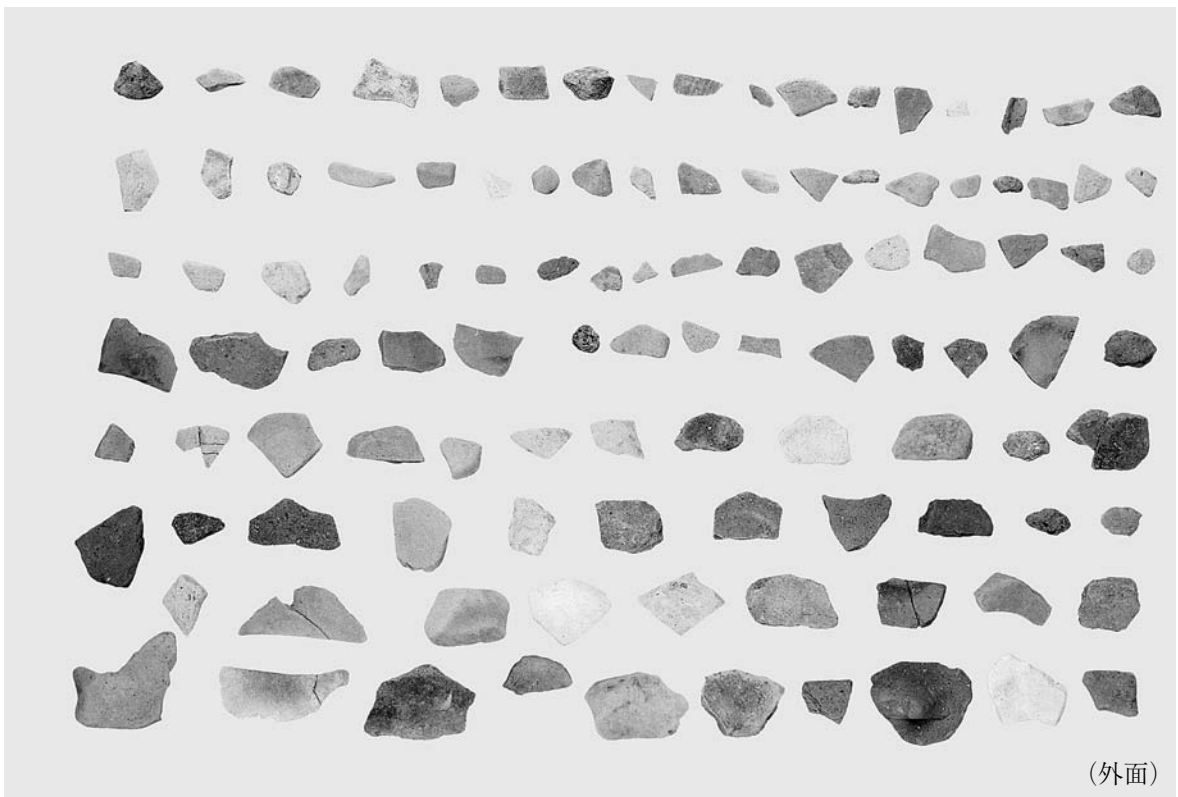
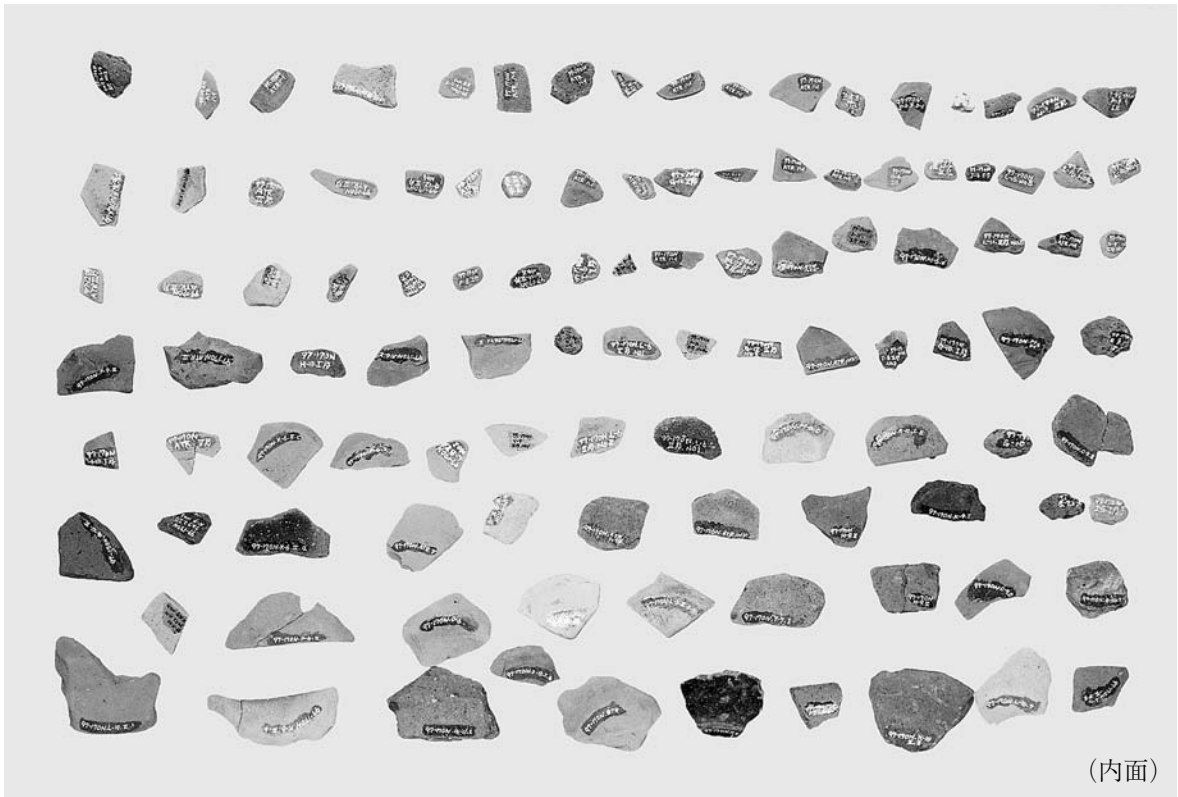


(外面)

出土遺物16



出土遺物17



出土遺物18

報告書抄録

ふりがな	にしもとじょうせき							
書名	西本城跡							
副書名	県道岡本大方線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第36集							
編著者名	松田直則・堅田至							
編集機関	高知県文化財団埋蔵文化財センター							
所在地	〒783-0006 高知県南国市篠原南泉1437-1 TEL(0888-64-0671)							
発行年月日	1999年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にしもとじょうせき 西本城跡	高知県幡多郡 大方町上田ノ 口字タナダ・ テッポウ田	423	490070	33° 0′ 37″	132° 59′ 17″	1997.10.15 ～ 1998.03.31	4,500m ²	県道岡本大方線改良工事に伴う事前の発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
西本城跡	山城	中世	堀切・堅堀・ 掘立柱建物跡 ・その他	貿易陶磁(青磁・ 白磁)・国産陶器 等		小規模な城郭であるが、交通の要所に位置し集落を防御する性格を持った中世城郭である。連続3条堀切や堅堀群が検出されている。		

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第36集

西 本 城 跡

－ 県道岡本大方線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

1999年3月

編集 (財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター

発行 高知県南国市篠原南泉1437-1

Tel. 0888-64-0671

印刷 共和印刷株式会社